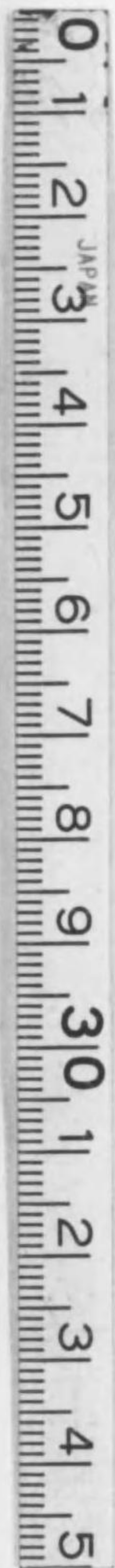


續國譯漢文大成

文學部 二十二の下

309
65

鉄
入



始



續國譯漢文大成

吉田待郎氏

寄贈本

文學部 第二十二冊 (第六帙の下ノ二)

杜少陵詩集 下の下ノ二



杜少陵詩集 卷十九

過客相尋

過客相尋ぬ

窮老眞無事 江山已定居

窮老眞に無事、江山已に居を定む。

地幽忘盥櫛 客至罷琴書

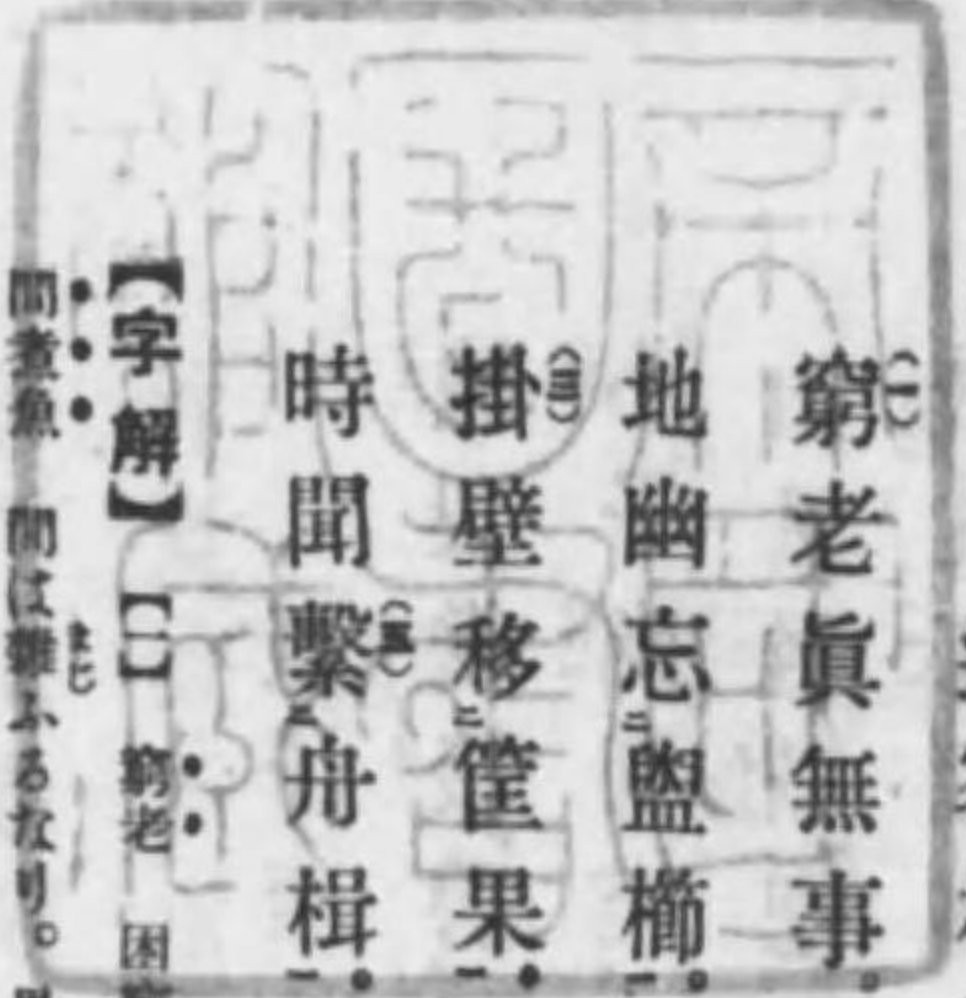
地幽にして盥櫛を忘れ、客至りて琴書を罷む。

掛壁移筐果 呼兒間煮魚

掛壁筐果を移し、兒を呼びて煮魚に間せしむ。

時聞繫舟楫 及此問吾廬

時に聞く舟楫を繫ぎて、此に及びて吾が廬を問ふを。



【字解】(一)窮老 困窮老衰。(二)定居 漢西に於て居住を定めしむ。(三)掛壁移筐果 移す掛壁之筐果に同じ。(四)及此 此とは漢西の地をさす。

【題義】 わざわざよつてたづねてくれる客のあることをよんだ詩。大曆二年漢西居住の後の作。

【詩意】 漢西の江山のあひだに居住を定めた自分は貧乏で年寄りではあるがほんたうになんにもすることがない。土地が引込んであるので(人に逢ふこともめつたにないから)盥で顔を洗つたり髪を櫛

でとかしたりすることも忘れるほどであるが、お客が来たといふので弾きかけた琴も、讀みかけた書物も中止して出迎へる。さうして壁にかけてあつたくだものかごを移して客の前にする、子供を呼んでそれを煮魚ともども雜陳せしめる。江岸に舟をつないでおいて、こんな處まで入りこんで自分の腹をたづねてくれるといふことも稀には聞くのである。(おきやくの親切さがうれしいとの意。)

豎子至

豎子至る

檀梨纒綴碧、梅杏半傳黃。

檀梨纒に碧を綴り、梅杏半は黃を傳ふ。

小子幽園至、輕籠熟奈香。

小子幽園より至る、輕籠熟奈香し。

山風猶滿把、野露及新嘗。

山風猶は把に滿つ、野露新嘗に及ぶ。

敲枕江湖客、提攜日月長。

枕を敲つ江湖の客、提攜日月長からむ。

【字解】

【一】豎子至 豎子はしもべ、阿段をいふ。西とは果園より來到せしをいふ。果園のことは後にみゆ。【二】檀梨 ヤマナシ、ナシ。【三】綴碧 綴とは枝につらなりたるをいふ。【四】梅杏 黄色をひろげつつあるをいふ。傳は傳播の意にして傳聞の義には非ざるならん。【五】小子 小もの、豎子なり。【六】幽園 山奥のその、果園をいふ。【七】熟奈 奈はカラナシ。【八】滿把 掌握のうちのみつ。【九】及新嘗 及とはおひつ、まにおふ。新嘗ははじめてなめ味ふなり。【一〇】敲枕 枕を敲にするをいふ。【一一】臥聽かきさす。【一二】江湖客 自己をいふ。【一三】提攜 手を携げたづさへる、豎子と共にくらすこと。【一四】日月長 前途をいふ。

黄生が説には往時をさすとし、久しく共に居る故に意中を解して果物を供してくれたのであるととく。今從はず。

【題義】 しもべ(阿段)が果物をもつてやつてきたことをよんだ詩。大曆二年の作なるべし。

【詩意】 「やまなし」や「なし」がやつと碧をつづり、梅や杏が半分ほど黄ばんだときだ。このをりこもの(阿段)が山の果園からやつてきた。彼がもつてきた輕い籠には熟した「からなし」がかんぱしくはひつてゐる。それを手にすると山のすすしい風がてのひらちうにいつばいまだある様な氣がするし、幸と野の面の露を帯びたままで初味をこころみることができた。ねてくらす自分はこのさきすゑながく彼と共にくらすさうとおもふ。

園

園人

仲夏流多水、清晨向小園。

仲夏流れ水多し、清晨小園に向ふ。

碧溪搖艇闊、朱果爛枝繁。

碧溪艇を搖せば闊く、朱果枝に爛として繁し。

始爲江山靜、終防市井喧。

始は江山の靜なるが爲にせり、終に市井の喧しきを防ぐ。

畦蔬繞茅屋、自足媚盤餐。

畦蔬茅屋を繞る、自ら盤餐に媚せらるるに足る。

【字解】

【一】園 果蔬の園なり。此篇及び次の「歸」詩によりて考ふるに園は流水の東に在るもの如し。【二】爛 かがやく貌。

【三】 勢助 防とはここに過ぎて避けふせぐなふ。【四】 畦蔬 はたけのうれの野菜。【五】 細 愛撫せらるべきなふふさはしの意。

【題義】 果蔬のはたけのことをよんだ詩。大暦二年五月、瀘西にての作。

【詩意】 五月になつて溪流に水が多くなつた。けふは初日のでるところから小さな果園へでかけてみる。こぶねをゆりうごかしてわたると碧のたにがはいかにもはばひろく、園にはひつてみると朱い果物が枝にかがやいて繁くついてゐる。自分が此地（瀘西）へ住んだのは始は江山が閉靜であるためであつたが、しまひには市街のやかましさを防ぐためにもよいと信じてここにおちついたので。茅屋をとりかこんではたけの野菜がいつばいにある。これさへあれば自然十分に膳部にふさはしいとみてよろしい。

歸

東帶還騎馬、東西卻渡船。

東帶して還た馬に騎る、東西卻つて船を渡す。

林中才有地、峽外絕無天。

林中才に地有り、峽外絶えて天無し。

虛白高人靜、喧卑俗累牽。

虛白高人靜なり、喧卑なるは俗累に牽かる。

他鄉閱遲暮、不敢廢詩篇。

他郷遲暮を閱す、敢て詩篇を廢せず。

【字解】 【一】 歸 瀘水の東なる果園より瀘西の居宅へかへるなふ。【二】 東帶還騎馬 園内に在るときは無作法なりにて宜しきも歸途につくときは衣冠をつけて馬にのる。【三】 東西卻渡船 東西とは或は東し或は西する義、園に向ふ時は西より東し、歸るには東よりして西す、ここは文字は東西一様に言ひなしかれども主意は西することを重しとす。【四】 虛白 虛室生白と「莊子」に見ゆ。人、虚心にて世に遊べば純白内に備はるをいふ、と。我意なきもの室は暗翳なく明白なるをいふならん。今之を人の心境にうつしてのべたり。【五】 高人 高尚な人物。【六】 喧卑俗累牽 舊解作者自己の境をいふとなす。恐らくは然らず、これ一般の境をいひ、上句の陪客とせるのみ。

【題義】 前篇の事ありてのち歸途につきたることをよんだ詩。前篇と同時の作ならん。

【詩意】 さてかへらうとするときには衣冠に身をかためてまた馬に騎り、溪邊へくれば東するにも西するにも船渡りをするのである。ここは樹林の中にわづかに平地があるばかり、絶壁にさへざられて峽以外にはすこしも天が無い様である。世間のやかましくいやしいものどもは俗累にひかれるものであるが高人の心境は虛室生白のありさまでいと閉靜なものである。（自分はその高人をしたふもので）こここの他郷で晩年をすごしながら決して詩をつくることをやめたこととは無い。

園官送菜

園官菜を送る

園官送菜把、本數日闕、矧苦苜馬齒掩乎嘉蔬、傷小人妬害君子、菜不足道也、比而作詩。

歸 園官送菜

園官菜把を送る、本數日開けぬ、矧んや苦苣馬齒嘉蔬を掩ふをや。小人の君子を妬害するを傷む、菜は道ふに足らざるなり、比して詩を作る。

【字解】 〔一〕園官 園を管する吏なり。都督の配下のもの。〔二〕菜把 野菜のたば。〔三〕本 本来。〔四〕開 送らざるをいふ。〔五〕苦苣 ケシアザミ。〔六〕馬齒 苣(ヒユ)の類といへり。園圃本草に云ふ、一の名五行草、葉青く根赤く花黄に根白く子黒く、食ふべくして少しく酸なりと。〔七〕掩手嘉蔬 よき野菜をおほひかくす。〔八〕比 たとへるなり。

清晨送菜把。常荷地主恩。
守者愆實數。略有其名存。
苦苣刺如針。馬齒葉亦繁。
青青嘉蔬色。埋沒在中園。
園吏未足怪。世事固堪論。
嗚呼戰伐久。荆棘暗長原。
乃知苦苣輩。傾奪蕙草根。
小人塞道路。爲態何喧喧。

清晨菜把を送る、常に荷ふ地主の恩。
守者實數を愆る、略ぼ其の名の存する有り。
苦苣刺針の如し、馬齒葉亦た繁し。
青青たる嘉蔬の色、埋没して中園に在るがごとし。
園吏は未だ怪むに足らず、世事固より論するに堪へむや。
嗚呼戰伐久し、荆棘長原に暗し。
乃ち知る苦苣の輩、傾奪す蕙草の根。
小人道路を塞ぐ、態爲る何ぞ喧喧たる。

又如馬齒盛。氣擁葵荏昏。
點染不易虞。絲麻雜羅紈。
一經器物內。永挂蠶刺痕。
志士採紫芝。放歌避戎軒。
畦丁負籠至。感動百慮端。

又如馬齒の盛にして、氣葵荏を擁して昏きが如し。
點染虞り易からず、絲麻羅紈に雜ふ。
一たび器物の内を経て、永く蠶刺の痕を挂く。
志士紫芝を採り、放歌して戎軒を避く。
畦丁籠を負ひて至る、感動す百慮の端。

【字解】 〔一〕地主 土地の主人、夔州の都督柏茂琳をさす。柏茂琳は大曆元年八月には邛南節度たり、其の夔州に到りしは元年と二年の交にあるならん。〔二〕守者 番人、即ち園官をいふ。〔三〕其名 野菜の名目。〔四〕埋沒在中園 中園は園中なり、此句は中園に在りとの事實をのべしものに非ず、現に送りし野菜のさまが園中の様子の如くであるといふ意味なるべし。かく解せざれば序文と應ぜず。趙注に園中嘉蔬、未嘗摘以相遺也(即ち事實とみし説)といへるは恐らくは當らず。〔五〕園堪論 反語ならん、論するにたへざるをいふ。〔六〕爲態 その態なる。〔七〕氣 馬齒の氣。〔八〕葵荏 葵は葉わさびの類、煮て食し得る菜なり、荏は桂荏、紫蘇のたぐひ。並に嘉蔬なり。〔九〕點染 美菜と惡菜と混雜させるをいふ。〔一〇〕不易虞 意料の外なるをいふ。思ひもよらぬ。と。〔一一〕絲麻 いと、あさ。〔一二〕羅紈 うすきぬ。〔一三〕器物 野菜を盛るかごをいふ。〔一四〕挂痕 あとをかけたのこすをいふ。〔一五〕志士 志氣ある人物、自己をいふ。〔一六〕採紫芝 隱遁生活をいふ。商山の四皓、むかし山にありて紫芝を採り歌を作る。〔一七〕戎軒 兵車。〔一八〕畦丁 はたけの人夫。

【題義】 都督の菜園を管理してゐる役人が野菜たばを送つてきた。本来その送り方は二三日のあひだ中止されてゐたのだ、そのうへにいま送つて來たのをみると苦苣だの馬齒苣だのが善い野菜のうへに

かぶせられてある。自分は之を見て小人が君子を妬み害ふことを傷み悲むのである。野菜ごときは言ふに足らぬのである。それでたとへて此の詩を作つた。大暦二年の作ならん。

【詩意】朝早く野菜のたばを送りこされた。自分はいつも土地の主人たる都督の御恩をになうてをるところでどうしたのか管園者が實際の野菜の数をまちがへて、自分の手許へきた野菜をみると品物の名だけがあつて實物が少い。苦苣は針の様な刺をしてゐるし、馬齒莧の葉もしげくあつて、青青としたよい野菜の色は園内で悪菜のなかに埋没してゐたと同じ様に殆どあるかなしである。園吏がこんなことをしたとてそれはまだ怪むに足らぬ、世上の事はどうしていふにたへようぞ。ああ戦伐がながくつづいて荆棘が遠き原に暗く生ひしげつてゐる。してみれば人間界でも苦苣の様なものどもが蕙草の根をうちまかしてその勢を奪うてゐるのである。小人たちががやがやとさわがしい態をして道路をふさいでゐるが、その様子はまた馬齒莧の氣勢が盛んで葵荏などの善菜をだきかかへて昏くはびこつてゐる様なものである。おもひもよらぬところに善いものに悪いものをあしらうて手品がほどこしてある、あだかも絲や麻を羅織の織物にませてある様に。この野菜もひとたび器物のなかにいれたが最後いつまでもそこにあらつばい刺の痕をのこしてゐる。自分は四皓の様に紫芝を山中に採つて、きままに歌をうたうて兵亂を避けてゐるが、このたびはたけ人夫が野菜籠をせおうてきたのできまざまの心配のはしを感動させられたのである。

園人送瓜

園人瓜を送る

江間雖炎瘴。瓜熟亦不早。

江間炎瘴ありと雖も、瓜の熟する亦た早からず。

柏公鎮夔國。滯務茲一掃。

柏公夔國を鎮す、滯務茲に一掃せらる。

食新先戰士。共少及溪老。

新を食ふには戰士を先にし、少きを共にして溪老に及ぶ。

傾筐蒲鴿青。滿眼顏色好。

傾筐蒲鴿青く、滿眼顏色好し。

竹竿接嵌竇。引注來鳥道。

竹竿嵌竇に接し、引注して鳥道より來らしむ。

浮沈亂水玉。愛惜如芝草。

浮沈水玉亂る、愛惜すること芝草の如し。

落刃嚼冰霜。開懷慰枯槁。

落刃冰霜を嚼む、開懷枯槁を慰む。

許以秋蒂除。仍看小童抱。

許すに秋蒂の除かるを以てす、仍は看む小童の抱かむ

東陵跡蕪絕。楚漢休征討。

東陵跡蕪絶す、楚漢征討休む。

園人非故侯。種此何草草。

園人は故侯に非ず、此を種うる何ぞ草草たる。

【字解】【一】柏公。柏茂琳。【二】夔國。夔州の軍務の長官となるをいふ。【三】滯務。たまつてゐた事務。【四】食新。はつものをたてる。【五】共少。數のすくなきものを衆人と共に願つ。【六】溪老。溪居の老人、自己をいふ。【七】傾筐。かたむきた

るがこ、語は「卷耳」の詩にみゆ。【八】蒲鶴青、蒲は青色、鶴は翠色をたとへいふならん。【九】接峽、接はくつつけること、峽は泉のわきでる穴をいふ。【一〇】引注、泉水を引きてそそぐ。【一一】來鳥道、來はこちらへ導き來らしむるなり、鳥道とは高處をいふ。【一二】水玉、水精玉、水晶の玉。【一三】芝草、靈芝草、仙人のとる草。【一四】落刃、たちわるをいふ。【一五】冰霜、瓜肉のとげぐあひをたとへていふ。【一六】枯橘、血肉のかれしこと、老體をいふ。【一七】許、園人が作者に許す、豫約するをいふ。【一八】秋帶除、帯は瓜の實の蔓につながらへたをいふ。へたがとれるは瓜の熟するなり。【一九】仍看、そのときも今回の如くやはり看るならん。【二〇】小童抱、抱とは瓜を抱きかかへて送り來るをいふ。【二一】東陵、邵平をいふ。邵平は故の秦の東陵侯なり、秦滅びてのち布衣となり、瓜を長安城東に種う。瓜五色あり、甚だ美なり。世に之を東陵瓜といふ。【二二】楚漢休征討、楚の項羽、漢の高祖の戰爭やみしないふ。これは軍に秦滅びしことをいひ、東陵侯を言はんための語なり、詩句としては無用のものなり。杜甫の如き大家も時としてかかる賢句あるを免れず。【二三】故侯、故の東陵侯、即ち邵平。【二四】種此、此は瓜をさす。【二五】草草、心を勞する貌、語は詩經に見ゆ。

【題義】官園のかかりのものが瓜を送つてくれたことをよんだ詩。大曆二年夏、瀘西にての作。

【詩意】長江のこの邊では炎瘴の氣はあるが瓜の熟するのは早くもない。都督柏公はこの夔州に駐在されてからこれまでたまつてゐた事務はすべてかたづけしてしまはれ、はつものをたべるとは兵卒を先きにし、數少きものまで衆と共にせられてその賜をこの老人にまで及ぼしてくれられた。見れば傾いた筐に瓜が蒲鶴の様な青色をしてゐて、我が眼中まことにいい色にみえる。そこで巖穴のところへ竹竿をくつつけて鳥の飛ぶ高い通路から我が家の方へ水をひつばつてきて瓜をそれにつけた。瓜が水にうきつしづみつする様は水晶の玉がみだれる様であり、自分のこれを受惜することは靈芝の仙草

でも得たかの様である。一たび刀刃を落下せしめて之を割つてたべると氷か霜をかむ様にじゆくじゆくとつめたくつけてしまふ。これで自分は胸のうちを開き枯れかかつた老境をなぐさめることができた。園人が言ふ所によると秋になつて瓜の蒂がとれるころにはまたまた子供にこの瓜を抱かせてもつてこさせようとのことである。楚漢の戰爭はやみて昔はなしとなり、東陵の跡もあれてたえてしまつた。それになんぞ、この園人は故の侯でもないのにこの瓜を骨を折つて種るとはどうしたのであるか。(自分はこの園人に感謝せざるを得ぬ。)

課伐木

伐木を課す

課隸人伯夷・辛秀・信行等、入谷斬陰木、人日四根止、維條伊枚、正直挺然、晨征暮返、委積庭內、我有藩籬、是缺是補、載伐篠簜、伊仗支持、則旅次小安、山有虎知禁、若恃爪牙之利、必昏黑撞突、夔人屋壁列樹、白葛、鏝爲牆、實以竹示式、遏爲與虎近、混淪乎無良、賓客憂害、馬之徒、苟活爲幸、可默歎息已、作詩示宗武誦。

隸人伯夷・辛秀・信行等に課し、谷に入り陰木を斬らしむ、人ごとに日に四根にして止む。維れ

條伊れ枚、正直挺然、晨に征き暮に返る、庭内に委積す。我に藩籬有り、是れ缺けたるを是れ補ふ、載ち篠蕩を伐り、伊に仗りて支持すれば、則ち旅次小しく安し、山に虎有るも禁を知らむ。若し爪牙の利を恃まば、必ず昏黒に控突せむ。虜人の屋壁には白菊を列樹し、鏝して牆を爲り、實つるに竹を以てして式遏を示す。虎と近く無良に混淪たるが爲に、賓客、害馬の徒を憂へ、苟くも活くるを幸と爲す、默〔歎〕息す可し。詩を作りて宗武に示して誦せしむ。

【字解】 〔一〕 伯夷、仇氏は「杜陵」に従ひて蘇人は伯夷と名づくべからずとて伯を柏に改めたり。今伯の原字に依る。〔二〕 陰木の北面に生じた木。〔三〕 條枚、區別すれば幹よりて枝を枚といひ、枝よりて葉を條といふ。〔四〕 挺然、ぬきんづる貌。〔五〕 委積、地面に置きつみあけてあること。〔六〕 藩籬、竝に「まがき」。〔七〕 篠蕩、箭竹、大竹。〔八〕 伊仗支持、斬木を杖とし竹を堅横にして遮護するをいふ。〔九〕 旅次、たびのやどり。〔一〇〕 知禁、禁とは防禦物（まがき）をいふ。〔一一〕 控突、控は牆に同じ、控突はだしぬけに突進し来るをいふ。〔一二〕 白菊、萩のたぐひなりとの説あれどもいふ。〔一三〕 鏝、こてにて泥土をぬるなり。〔一四〕 實以竹、土舞の中へ竹竿をつめるなり。〔一五〕 式遏、とどめふせぐこと。詩經に式遏遠虜とみゆ。式の字はかるし。〔一六〕 混淪、混雜するさま。〔一七〕 無良、良心なきもの、惡徒。〔一八〕 賓客、主として自己をさす。〔一九〕 害馬之徒、盜賊、武人のわるもの等をさす。黃帝襄城の下に於て牧馬の童子を見て、天下を問ふ。童子曰く、天下を爲むるは何を以てか馬を牧するに異ならん、其の馬を寄する者を去らんのみ、と。事は「莊子」にみゆ。〔二〇〕 默息、仇氏曰く、柏公此を讀す、害馬の徒、以て默して銷すべし、と。愚案するに前に一言も柏都督に及ばずして突然之をいふとするは有る可からざるのこたたり、默息を默銷ととく字義に於ても不穩なり、又上に荷活爲、幸とあるに直に默銷といふは前後矛盾すといふべし。故に其の説從ひがたし。默字は一本には噤に作れり。余因つて思ふ、默或は噤は歎或は噤の訛字ならん。譯者曰く、此詩の序文は有名なる難解の文にして余が解果して當を得るを保しがたし、譯者の是正を乞ふ。

長夏無所爲、客居課童僕。
清晨飯其腹、持斧入白谷。
青冥曾嶺後、十里斬陰木。
人肩四根已、亭午下山麓。
尙聞丁丁聲、功課日各足。
蒼皮成委積、素節相照燭。
藉汝跨小籬、當仗苦虛竹。
空荒咆熊羆、乳獸待人肉。
不示知禁情、豈惟干戈哭。
城中賢府主、處貴如白屋。
蕭蕭理體淨、蜂蠶不敢毒。
虎穴連里閭、隄防舊風俗。
泊舟滄江岸、久客慎所觸。

長夏爲す所無し、客居童僕に課す。
清晨其の腹に飯せしめ、斧を持して白谷に入らしむ。
青冥曾嶺の後、十里陰木を斬る。
人肩四根のみ、亭午山麓に下る。
尙は聞く丁丁たる聲、功課日、に各、足る。
蒼皮委積を成す、素節相照燭す。
汝に藉りて小籬を跨らす、當に仗るべし苦虛の竹。
空荒に熊羆咆ゆ、乳獸人肉を待つ。
禁を知らしむるの情を示さずんば、豈に惟だ干戈に哭す。
城中賢府主、貴に處ること白屋の如し。
蕭蕭理體淨し、蜂蠶敢て毒せず。
虎穴里閭に連る、舊風俗もて隄防す。
舟を泊す滄江の岸、久客觸るる所を慎む。

舍西崖嶠壯。雷雨蔚含蓄。舍西崖嶠壯なり、雷雨に蔚として含蓄す。
 牆宇資屢修。衰年怯幽獨。牆宇屢修するに資る、衰年幽獨を怯る。
 爾曹輕執熱。爲我忍煩促。爾曹執熱を輕んず、我が爲に煩促を忍ぶ。
 秋光近青岑。季月當泛菊。秋光青岑に近し、季月當に菊を泛ぶべし。
 報之以微寒。共給酒一斛。之に報ゆるに微寒を以てし、共給せむ酒一斛。」

【字解】 〔一〕其腹 其は重僕をさす。〔二〕白谷 谷の名、已に見ゆ。〔三〕青冥 高處をいふ。〔四〕曾巖 曾は層に同じ。〔五〕人厨 一人の厨。〔六〕四根已 ただ四株。〔七〕下山麓 木を斬りてこちらの麓へと歸るをいふ。〔八〕丁丁 伐木の聲なり。〔九〕功課 わりあての仕事。〔一〇〕日各足 毎日各人十分にす。〔一一〕蒼皮 あなき樹の皮。〔一二〕素節 しろきふし。枝を伐ち縛ひし痕をいふならん。〔一三〕希汝 仇氏云ふ、汝は木を指していふと。余は重僕をさすものとみる。〔一四〕跡小童 跡とは構架するをいふ。〔一五〕苦虛竹 趙注に云ふ、虛心の苦竹をいふと。苦竹は細竹。〔一六〕空堂 空谷荒山か。〔一七〕乳獸 兒を産める虎をいふ。〔一八〕知禁情 我が方に猛獸をして禁制あることを知らしむる情あるをいふ。〔一九〕豈惟干戈笑 戰死者ある爲に笑するは干戈に笑するなり。そのみにあらずとは更に猛獸の殺害あるをいふ。〔二〇〕賢府主 柏都督をさす。〔二一〕白屋 白茅を以て葺きたる屋、貧家をいふ。〔二二〕蕭蕭 風づかなるさま。〔二三〕理體靜 理は治なり、唐人は高宗の御諱をさけて治を理といふ。政治の體子が清淨なり。〔二四〕畏防 防禦物を設くること。〔二五〕蕭風俗 蠻人の舊慣に従ひて猛獸の害を防ぐをいふ。〔二六〕久客 自己をいふ。〔二七〕所觸 猛獸の接觸する所のもの。即ち下文の觸字。〔二八〕舍西崖嶠壯 此の句によれば作者の瀟西の居はその西に高崖あるを知るべし。〔二九〕蔚含蓄 蔚はさかんる貌、含蓄とは中に恐ろしきもの（虎など）を藏するをいふ。〔三〇〕翰宇 かき、やれ。〔三一〕資屢修 しばしば修繕するといふことからお蔭を蒙る。〔三二〕圓獨 山中の獨居。〔三三〕爾曹 重僕をさす。〔三四〕共給 供は供なり。

【題義】 しもべたちに日課として木を伐つて離をゆはせたことをよんだ詩。自分は伯夷・辛秀・信行等のしもべに日課をあたへて谷にはひつて山の北向のところに生えた木を斬らせた、一人が一日四株のきめである。その木は枝あり小枝あり、まつすぐにのびた木だ。彼等はその木をきりに晨にでかけて暮にもどつてき、木材が庭のうちに積みあげられた。自分には離根があるのでその缺けめを補ふつもりなのだ、そこでまた箭竹だの大竹だのを伐つてそれがかきねをささへるならばこれでやつと自分の旅のやどりもすこし安泰だといふものだ。なせかといふに山には虎があるから、きやつはこのかきねによつて禁制があることを知るのであらう。さもなくてきやつが爪や牙のするどきを持つたときにはきつとたそがれどきにはこちらへだしぬけに突き出してくるであらう。夔州では民家の屋壁には白菊をつらねて植ゑる、また中心には竹をつめてそとを泥でこてぬりにした牆をこしらへて虎にふせぎを見せておくのである。かやうにここは住居が虎と近かつたり、惡漢と雜居してゐるために、自分の様なここに客寓してゐる者は牧人の馬を害する様な盜賊のことが心配になつて、ただ苟めにも活きてさへゐらるれば幸だといふ様な感じをもつてゐるのだ、まことになげかはいふことである。それでこの詩を作つてこどもの宗武にみせて吟誦させるのである。大曆二年夏、瀟西にての作。

【詩意】日の長い夏になにもすることがないので、このたびすまひでもべに日課をあたへた。朝早く彼等に御飯を腹いづばいづめさせ斧を持つて白谷へはひらせり。彼等は青ぞらにつづいたかくかさなつた山嶺の北へでて十里の遠くへでかけて山陰の木を斬る、一人まへ四株だけのきめである、それをかついで彼等は眞晝頃こちらの山麓へとおりにくる。そのころまだごりごりと木を伐る聲がしてゐるが、きめられた仕事だけは毎日それぞれ十分になしとげられる。それで若い皮はうづたかく積みあげられ、素い節とふしとが互にてりかがやいてゐる。』汝等の力によつて小さい籠を構へるには木だけではないかぬ、苦竹によらなければならぬ。このさびしい山谷には熊や熊がほえ、子もちの虎が人の肉をたべようと待つてゐる。もしこの猛獸どもにこちらにそれをさしとめるだけの心があるといふことを見せぬならば、われわれは戦死者のために哭することのほかには獣害のために哭しなければならぬであらう。』いま我が夔州城中の賢い主人(柏公)は貴い地位にゐること貧居のときのごとく、さわがしくせず、しづかにして政治のすがた清浄であり、蜂蠶の様な盜賊も毒を加へず、虎のすむ穴が村里につらなつてゐるが、それをも土地の舊慣に従つて防禦してをられる。』自分はここの大江の岸に舟を泊めてゐるが、長逗留の客で何がこちらへぶつつかつてくるかについては用心しなければならぬ。自分の屋舎の西側は壯大な崖嶺がそびえてゐて、時として雷雨があり、そのがけには草木がしげつてなかにはなにもものが藏されてゐる。自分の老衰の年齢では山居の孤獨をおそれるので屋根や牆もた

びたび修繕することによつてはじめてそのおかげで猛獸の害から免れ得るのである。おまへたちは炎熱を冒してなんともおもはず自分のためにうるさききもちをがまんしてはたらいてくれた。もはや青い岑に秋げしきも近づいた。九月ともならば酒づきに菊の花を泛べて飲まねばならぬ。これまでの御苦勞に對してはすこしのすすしさを以て報いものとし、一斛ばかりの酒を振るまはうとおもつてゐるのである。』

柴門

柴門

泛舟登瀛西。迴首望兩崖。
舟を泛べて瀛西に登り、首を廻らして兩崖を望む。
東城乾旱天。其氣如焚柴。
東城旱天乾く、其の氣柴を焚くが如し。
長影沒窈窕。餘光散谿澗。
長影窈窕に沒し、餘光谿澗に散す。
大江蟠嵌根。歸海成一家。
大江嵌根に蟠る、海に歸して一家を成す。
下衝割坤軸。竦壁攢鏌鏌。
下衝坤軸を割く、竦壁鏌鏌攢る。
蕭颯灑秋色。氛昏霾日車。
蕭颯として秋色に灑ぐ、氛昏くして日車に霾る。
峽門自此始。最窄容浮查。
峽門此より始まる、最窄なるは浮查を容る。

禹功翊造化。疏鑿就岐斜。
 巨渠決太古。衆水爲長蛇。
 風煙渺吳蜀。舟楫通鹽麻。
 我今遠遊子。飄轉混泥沙。
 萬物附本性。約身不願奢。
 茅棟蓋一牀。清池有餘花。
 濁醪與脫粟。在眼無咨嗟。
 山荒人民少。地僻日夕佳。
 貧賤固其常。富貴任生涯。
 老于干戈際。宅幸蓬華遮。
 石亂上雲氣。杉清延日華。
 賞妍又分外。理愜夫何誇。
 足了垂白年。敢居高士差。

禹功造化を翊け、疏鑿岐斜に就く。
 巨渠太古より決す、衆水長蛇を爲す。
 風煙吳蜀に渺たり、舟楫鹽麻を通ず。
 我今遠遊の子、飄轉泥沙に混す。
 萬物本性に附す、身を約にして奢を願はず。
 茅棟一牀を蓋ふ、清池餘花有り。
 濁醪と脱粟と、眼に在れば咨嗟無し。
 山荒れて人民少し、地僻にして日夕佳なり。
 貧賤固其の常、富貴生涯に任す。
 干戈の際に老ゆるも、宅は幸に蓬華に遮ぎらる。
 石亂れて雲氣上り、杉清くして日華を延く。
 妍を賞する又た分外なり、理愜ふ夫れ何を誇らむ。
 足了す垂白の年、敢て高士の差に居らむや。

書此豁平昔。迴首猶暮霞。

此を書して平昔を豁にす、首を迴らせば猶暮霞。

【字解】【一】兩崖。豐唐峽の兩崖。【二】東城。白帝城、夔州の東にあるによりていふ。【三】早天。ひでりのそら。【四】其氣。氣とは早天の赤氣をいふ。【五】長影。崖壁のつづくかげ。【六】窟窟。おくふかく静かなる貌、峽間の遠暗をいふ。【七】餘光。赤氣の餘光。【八】豁。豁。洞谷空大なる貌。【九】嵌根。地底にさしこみたる根、崖壁をいふ。【一〇】下衝。下方にて衝撃する。【一一】割坤軸。地軸を裂く。【一二】鍊壁。そばだちたる崖壁。【一三】鏡。鏡の名。壁尖のするどさをたとへていふ。【一四】蕭。蕭々。さつぱりとした貌、雨を帯びたる風のさまをいふ。【一五】灑秋色。秋の氣色のことさへそそぐ。【一六】日車。日車は太陽、灑は土ふる、ここは氣がふるをいふ。【一七】峽門。豐唐の兩崖をいふ。【一八】浮查。查はいかだ。【一九】就岐斜。岐斜とはかたむきななるなるなり。土地の高低あるをいふ。【二〇】巨渠。大なる掘り割り、長江をいふ。仇氏は巨を巴に作り巴渠とす。巴渠は清水の別名、雲陽縣東にあり、北より南流して江に入る。ここには何等この巴渠水を擧ぐる要なし。故に舊本の巨字に復し巴を取らず。【二一】富貴任生涯。富貴たるとたらざるとな生涯のなるがままにまかす。【二二】賞妍。うつくしき風景を賞美すること。【二三】分外。自己の分限にあまる幸なり。【二四】理愜。自己の意地道理とかなふ。満足するをいふ。【二五】足了。満足してなるをいふ。【二六】垂白年。白髮を垂るとし、老年をいふ。【二七】高士差。差は差等、階級列位の意。【二八】船平昔。平生のくよくよした意を寛裕にする。

【題義】瀼西の宅の閉居の意をのべた詩。柴の門といふを題とす。仇氏は東屯より瀼西に往きしときの作とし、浦氏は事を以て峽間に遊び舟を瀼西にかへせしときの作とせり。ともかく瀼東から瀼西へかへりしをりの作なり。大曆二年夏の作。

【詩意】自分は東の方からもどつてきて、瀼水に舟を泛べて瀼西の地に登り、ふりかへつて瞿唐の兩崖をながめた。すると東城（白帝城）の方面ではひでりの天が乾いてその赤やけの氣が柴でも焚いて

あるかの様にみえる。崖のとはくつづいた影はしまひには奥ふかくしづかなところへ消えうせてしまひ、あかやけの名残りはがらんだうの空洞のあひだにちらばつてゐる。水底につきさした崖壁の根には大江がわだかまつてをり、その水流は海に歸して衆流をあつめて天下を一家の狀においてゐる。水が下方を衝撃する勢は地軸を裂く様であり、そそりたつた崖壁は鎧鉞の劍をあつめた様にとがつてむらがつてゐる。そこへ秋の氣色がしたとおもはれた處へさつと雨風がそそぎ來り、もやくやとした惡氣がくらくとさして太陽の前に土沙でも降つてゐるごとくみえる。」三峽の門はこの兩崖からはじまる。その最もせまいところはわづかにいかだを容れるに足るくらゐである。禹王は造化の力をたすけてここから掘り割りをして傾斜地へとだんだん導いた。その巨大なほりわりは太古のむかしから決りひらかれ、途中であつめる幾多の水流は長蛇の勢をなしてながれこんでゐる。かくして風煙渺に吳蜀につらなり、舟楫の便は鹽麻の利を通じてゐる。」今自分は遠遊してゐるものであちこちと轉轉して身を泥土のあひだに混じてゐる。いつたい萬物はそれぞれその本性にまかすものである。じぶんは自分の本性に従つて一身をつづまやかにして贅澤なことは願はず。一箇の寢臺をかやぶきの棟でおほうてあるのみで、清らかな池のほとりには春餘の花が咲きのこつてゐる。濁酒と玄米。これさへ眼前にあれば他は何にもなげくこととはない。」ここは山が荒れ地で住民はすくなく、土地はかたよりで夕の景色はことによろしい。貧乏生活はもとよりあたりまへのことで、富貴にならうとなるまいとそ

んなことは生涯のなりゆきにまかせ。兵亂の際に老を送つてはゐるが、居宅は幸と蓬や草でさへざられてゐる。石の亂れ散じてゐるところに雲氣がたちのぼり、杉の木立清らかなところに日の光を迎へられる。」かかる美景を賞玩し得るのは身分不相應な幸福かとおもふのであつて、自分の心境は意と理と合致してゐる、それだけのことで別にこれを他人に自慢するわけではない。もとより高士の階級に加はるつもりではなく、ただ今の老境に満足してをるばかりである。自分はこんなことを書きつけて平生の氣晴らしをしたのだ。ふりむいてみるとまだ夕暮の霞が消えずにゐる。」

槐葉冷淘

槐葉の冷淘

青青高槐葉、采掇付中廚。

青青たる高槐の葉、采掇して中廚に付す。

新麪來近市、汁滓宛相俱。

新麪近市より來る、汁滓宛も相俱にす。

入鼎資過熟、加餐愁欲無。

入鼎過熟に資る、加餐愁無からむと欲す。

碧鮮俱照筯、香飯兼苞蘆。

碧鮮俱に筯を照らす、香飯苞蘆を兼ぬ。

經齒冷於雪、勸人投比珠。

齒を經れば雪よりも冷なり、人に勸むるに投すること珠に比す。」

願隨金腰裏、走置錦屠蘇。

願はくは金腰裏に隨はしめて、走らせて錦屠蘇に置かむ。

路遠思恐泥。興深終不渝。
 路遠くして恐泥を思ふ、興深くして終に渝らず。
 獻芹則小小。薦藻明區區。
 獻芹は則ち小小なり、薦藻は明かに區區たり。
 萬里露寒殿。開冰清玉壺。
 萬里露寒殿、氷を開けば玉壺清し。
 君王納涼晚。此味亦時須。
 君王納涼の晩、此の味亦た時に須つ。

【字解】「一」槐葉。槐はエンジュの木。「二」冷海。「ひやしめん」、海とは冷水にてゆすりてさわすによりていふならん。詩中の記事によるに槐葉をつきて汁と滓と共に之を彫にこれまぜよくゆでしものち冷したる者なり。「三」采投。とりひろふ。「四」中厨。厨中におなじ、處所。「五」近市。ちかいと、この市の街、豐州城内の街にて瀛西に近き部分なり。「六」汁滓。槐葉のしるとかす。「七」宛相俱。宛は宛然、さながら、相俱とは汁滓と麩とをいっしょにつまませしをいふ。「八」入鼎。かなへのなかへいれて煮る。「九」資過熱。過熱とはぐたぐたに十分に煮くたがすこと、資とはそのおかげを蒙るをいふ。老人は齒が崩れればなり。「一〇」加飯。こはんをいっしょより多くたべる。「一一」悉欲無。仇氏「杜鵑」によりて「其の處き鳥からんことを悉ふ」ときたるがいががにや。余は「怒がなくならうとする」義と考ふ。「一二」碧鮮。碧色にして新鮮、槐葉麩の色をいふ。「一三」俱照飴。俱とは麩と下句の香飯とをさしていふ。飴は蜜、ハツなり。「一四」香飯。蘆芽をまぜて炊きたる飯、故に香といふ。「一五」菴。芽ぐみたるアジ。菴とは十分ひらかすいくへにも重なりてなる姿をいふ。「一六」初商。前にさほるをいふ。「一七」勸人。人にすすめてたべさす。「一八」投比珠。隋球暗投といふことあり、隋侯のひかる珠を暗夜に投するなり。文字を之に借る。「一九」人にするを投といへり。珠に比すとは情むをいふ。「二〇」金腰裏。黄金をかざつた名馬。「二一」錦屠蘇。うつくしきいへ、天子の屋をいふ。仇注に云ふ、屠蘇に三義あり、一は屠、二は酒の名、三は大なる帽子の名、こゝは第一の義なりと。「二二」路遠思恐泥。論語「子夏篇に致。遠恐泥」の語あり。泥とはど、こゝにへばりついて先方へゆきつけぬをいふ。詩の思恐泥とは古語に「恐泥」といふことがあるがそれを思ふといふなり。

【三】興深。興とは美味を食する興。「三」不渝。天子に獻じたしとの意がかはらぬなり。「四」獻芹。卷十八(一〇四頁)美芹の句解をみよ。「五」薦藻。「左傳」隱公三年に、蘋藻蘆藋之菜、可食以薦於王公、とみゆ。蘆はものくさ。誠心さへあればかかる草でも鬼神にも王公にすすめることができるといふなり。「六」區區。心の小なるさま。「七」露寒殿。曠時の殿名、借用す。「八」玉壺。氷をいれるうつは。「九」須。まつ、必要あるをいふ。

【題義】槐の葉をつまませた冷し麩をくつた詩。大曆二年瀛西にての作。

【詩意】青青とした高い槐の葉をとつて臺所へやつた。そこへ近所の街からできたての麩が来たのでそのまま葉の汁と滓とをつまませた。それを鼎でぐたぐたに煮てもらひ、いくはいもかきこむと平生のしんばいごとなどどこへか消えてしまひさうである。蘆の芽のませごはんとならべておいてたべるとこの麩の新鮮な碧色が飯とともに箸のあたりにかがやきわたる。齒のところをとほらせるとこの麩は雪よりもつめたい、これを人にやつてたべさせるにも惜しくて珠でも投げ出す様な気がする。こんなうまい麩はどうかりつばに飾つた駿馬につきしたかはせて、走つてもたせてやつて天子の錦をかざつたお屋に置くやうにしたいものだ。そんなことをいうても路が遠すぎるから古人の謂はゆる「恐泥」の掛念はあるけれども、このうまさときては、とてももつていつてもらひたいとおもふころをかへることはできぬ。なるほど昔の人が芹を天子に獻じたいといつたその心は小さいであらう。また藻の草を薦めようとした心もせまいものではあらう。しかし、かの萬里の遠くにある我が君の露寒殿、そこには玉壺が清く置かれて中から氷がとりだされる。我が君も著さにたへかねて納涼でもな

さらうといふ晩には、この冷し麪の味も時として御入用なのである。」

上後園山脚

後園の山脚に上る

朱夏熱所嬰。清旭步北林。

朱夏熱に嬰らる、清旭に北林に歩す。

小園背高岡。挽葛上崎峯。

小園高岡を背にす、葛を挽きて崎峯たるに上る。

曠望延駐目。飄颻散疎襟。

曠望駐目を延く、飄颻疎襟を散す。

潜鱗恨水壯。去翼依雲深。

潜鱗水の壯なるを恨む、去翼雲の深きに依る。

勿謂地無疆。劣於山有陰。

謂ふ勿れ地疆り無しと、山の陰有るよりも劣れり。

石椽原遍天下。水陸兼浮沈。

石椽原天下に遍し、水陸兼ねて浮沈す。

自我登隴首。十年經碧岑。

我が隴首に登りしより、十年碧岑を經。

劍門來巫峽。薄倚浩至今。

劍門より巫峽に來る、薄倚浩として今に至れり。

故園暗戎馬。骨肉失追尋。

故園戎馬暗し、骨肉追尋を失す。

時危無消息。老去多歸心。

時危くして消息無し、老い去つて歸心多し。

志士惜白日。久客藉黃金。

志士白日を惜む、久客黃金に藉る。

敢爲蘇門嘯。庶作梁父吟。

敢て蘇門の嘯を爲さむや、庶はくは梁父の吟を作さむ。」

【字解】 〔一〕朱夏 朱は夏の色。〔二〕嬰 嬰か、とりつかれる。〔三〕清旭 あまひのすめる時。〔四〕挽葛 くづのつるを手でひく。〔五〕崎峯 山のけはしき峯。〔六〕曠望 眼界ひろくのぞむ。〔七〕飄颻 駐目は注視するなり。延とはこちらを指くをいふ。〔八〕疎襟 くづつるげたえりもと。〔九〕潜鱗 淵にひそんだ魚。〔一〇〕恨水 水勢の壯なるに乗じて泳ぎだせぬことをうらむ。〔一一〕去翼 飛び去る鳥。〔一二〕地無疆 疆なしとは際限もなくひろきをいふ。〔一三〕劣於山有陰 陰は山北、即ち詩の後園の地をさす。此處に於て休息を得るなり。〔一四〕石椽 遍天下、水陸兼浮沈 石椽を文字のままにみる説に云ふ、石椽は植物にて其の子は芍薬(香草の名)の如く其の皮は鼠を齧ぐべし、時に天下亂れ小民水陸ともに之を載せて以て糧に充つるなりと、これ宋の沈存中が説なり。浦起龍その説を補ひて云ふ、遍天下とは此の地の山に産する石椽が普く天下に及ぶをいふなりと。愚案するに運載すること水陸兼浮沈といふはいかかのものにや。張遠は石椽を石原とし、尸子の石焦原の故事を引く。曰く、昔國に石焦原なる者あり、廣さ五十歩、百仞の溪に臨む、莒國に救て近づくものなし。勇を以て莒子に見ゆるものあり、卻行して踵を齊しくす、と。此の時之を借りて世路の險窄を比するなり、と。余は石椽は石原ならんと考ふ。ただ作者が石焦原の故事を用ひしや否は判明せず。石原は普通語にて石地、曉曉不毛の地をいふものとみる。天下の地兵亂のため五穀不熟なればこれ石地にひとし。水陸兼浮沈の句は浮の字は其の意軽く沈の字重く、水陸陸沈を兼ねるをいふならん。陸沈の語は「莊子の則陽篇に見え、のち漢書東方朔傳の陸沈に於て、避世金馬門。晉書桓温傳の神州陸沈、百年邱墟、等となる。作者は神州陸沈の意を用ひしなるべし。天下の人民は水に沈みて溺るる運命と、陸地ながらに沈没する運命とを併有するをいふ。〔一五〕登隴首 秦州の地方へ出かけしことをさす。〔一六〕十年 作者乾元二年を以て隴首に入る、大曆二年に至りて九年なり。十は大數によりていふ。〔一七〕碧岑 青山をいふ。〔一八〕薄倚 或は倚薄に作る、同義なり。謝靈運の抽疾相倚薄に本づく。處世の拙と疾病とが身につくをいふ。〔一九〕浩至今 浩は大なる貌、遠きさま。〔二〇〕藉黃金 「峽口」詩第二首の諸侯數賜金の意。(卷十八の二一頁句解をみよ)。〔二一〕蘇門嘯 魏の孫登が故事。阮籍嘗て蘇門山に登り、孫登に遇

ひ、ともに古今の事を商略す、登應せず、轉長嘯して退く、半嶽に至るに聲あり、響風の音のごとし、乃ち登が嘯けるなり。ここは孫登の如き隱遁者の風をいふ。【三】 梁父吟 已にみゆ。

【題義】 瀘西の居宅の北にある園の山麓にのぼつたときの詩。乾元二年より大曆三年までにて十年なり、されど作者は三年の正月に峽より出でたれば此詩は大曆二年夏の作なり。

【詩意】 夏は熱氣にとりつかれるのでたまらぬから自分は朝日のすすしいときに北の林に散歩する。小さな庭園の背後に高い岡がある。自分は葛の蔓につかまつてそのけはしいところへのぼる。遠方のひろいながめは自分の注視をよんでくれるし、いい気持ちでふわふわと襟もとを風に吹かせる。淵にひそんでゐる魚は水勢の壯なのに泳ぎだせないのを恨んでる様だし、飛び去る鳥はおくふかい雲に依りそうて處得がほである。天下の地面には際限がないなどとはいふな。いまの天下は廣いといつてもこの山にこの小陰の園が有るよりもつとわるい。いはば天下ちうが穀物のできの石原みたいなので、人民は水にも溺れ沈み、陸ながらも沈没してゐるとおなじことだ。自分は隴山の首に登りだしてから十年ばかりも青山を經歷しつつある。隴から劍門へ、劍門から巫峽へ、拙と疾とにとりつかれてあのときからずつと今日におよんでゐる。故郷は戎馬の塵に暗く、骨肉のものも尋ねるすべなく、時世は危くてすこしも消息は無く、老いゆくままに歸郷の念ばかり多い。志士は白日の去るを惜むものであり、長ながの旅人としては人から黄金をみついでもらつてやつとこの日を送りてゐるのだ。

決して孫登がした様な蘇門山の嘯をまなんで隱遁者のまねはせぬが、孔明の様に梁父の吟をなさうとはねがうてゐる。】

季夏送郷弟韶陪黃門從叔朝謁

季夏郷弟韶が黃門從叔に陪して朝謁するを送る

令弟尙爲蒼水使 令弟尙は蒼水の使爲り、

名家莫出杜陵人 名家は杜陵の人よりも出づるは莫し。

比來相國兼安蜀 比來相國は兼ねて蜀を安んず、

歸赴朝廷已入秦 歸りて朝廷に赴くとき已に秦に入る。

捨舟策馬論兵地 舟を捨て馬に策つ兵を論ずる地、

拖玉腰金報主身 玉を拖き金を腰にす主に報ゆる身。

莫度清秋吟蟋蟀 清秋蟋蟀吟するを度る莫れ、

早聞黃閣畫麒麟 早く聞かむ黃閣麒麟に畫かるるを。

季夏送郷弟韶陪黃門從叔朝謁

【字解】 【一】 季夏 六月。 【二】

郷弟 同郷同姓の人にして自己より年少者。 【三】 黃門從叔 黃門は黃門侍郎、從叔は叔父(韶)に對して。杜鴻漸をさす、鴻漸は黃門侍郎、同平章事を以て蜀を鎮し、大曆二年六月に蜀より朝廷へ還れり。 【四】 朝謁 參朝謁見。 【五】 尙爲 尙とは「まだ」なり、「まだ」とは其人の官職、其才に比して不足なりとの意を帯ぶ。 【六】 蒼水使 治水の使者の意として用ふ。作者の注にいへる開江使の職にあてていふ。開江使は江上の運

船を過せしむる職と見ゆ、蓋し臨時に設けられしものならん。蒼水使者の故事に二あり。一は搜神記にいへるものにして已に大食刀歌の句解(卷十八、六〇頁)にいたせり。他の一は吳越春秋にいふ所のものなり、曰く、禹、衡嶽に登りしとき、夢に赤繡衣の男子を見らる、自ら蒼水使者と稱して曰く、「聞く帝、文命を此に使ふと、故に來りて之を候すと。」注家此篇の故事として多く吳越春秋を引けり。

【七】成都外江。成都に内江と外江とあること已にいへり。【八】下峽舟船。三峽より下りて荊州、吳越の方へゆくふれ。【九】名家名聲ある家。【一〇】莫出。その以上に出づるものなきをいふ。【一一】杜陵人。長安の杜陵に住せる杜氏に南杜・北杜ありて杜氏中のての名家と稱せらる。杜鴻漸・杜嗣竝に之に屬するなるべし。【一二】比來。ちかごろ。【一三】相國。杜鴻漸をさす、同平章事は宰相の任なり。【一四】兼安蜀。鴻漸は已に宰相の任を帯びつつまた蜀の長官として蜀を安んずるは兼ぬるなり。【一五】歸赴朝廷。歸赴の主語は鴻漸ならん。【一六】已入秦。入秦の主語は杜嗣ならん。秦は長安をいふ。【一七】捨舟策馬。水路をはなれて陸路に就くをいふ。峽を下り荊州に至ればそより上陸して陸より長安に向ふ。【一八】論兵地。蜀、鴻漸とともにみちすがら兵事を論ずることあるべし。此の一句杜嗣についていふ。【一九】拖玉腰金。拖は曳くなり、玉佩をひきすること、腰金とは金印を腰につけること。【二〇】報主身。主は時の天子代宗をいふ。主恩に報する身。此の一句鴻漸についていふ。【二一】莫度。度は經過すること。【二二】清秋吟。秋の節をいふ、秋には蟋蟀(こほろぎ、きりぎりす)が鳴く。此の句杜嗣についていふ。途中で暇どるなといふなり。【二三】早開。作者が聞かんと欲するなり。【二四】黃閣。黃門のこと、已に見ゆ、鴻漸をさす。【二五】蹇蹇。蹇蹇閣上に功名の徽をふがかること。此の句鴻漸についていふ。第四句、捨舟策馬以下は各句交互に杜嗣と鴻漸についてのべたり。

【題義】夏の季に郷弟杜嗣がその叔父である黃門侍郎(杜鴻漸)について朝廷へかへり謁見するのを送つた詩。杜嗣は近頃開江使の職を兼ねて成都の外江の船を峽から安全にくだらせる様にしたものである。大曆二年六月の作。

【詩意】世に名聲の高い家もいろいろあるが杜陵の人にまさるものはない。令弟はその一門であるがきみほどの人物がまた蒼水使などの役をしてをるのか。やはり一門の杜鴻漸公は近來宰相としてのかにまた蜀地を安んせられたが、公が歸朝されるときにはきみもはや秦(長安)へかへつてゆかれる。きみはこれからさき舟を捨てて馬に策ち陸路をとほりながら諸處で軍略を論じあはれるであらうし、公はまた玉佩を曳きすり金印を腰にさげ天子の恩徳に報いられるからだである。きみは途中でぐづぐづして秋こほろぎが鳴きだす頃をすごしてはならぬ、いそいでゆかれるがよろしい。同時に自分はずこしも早く公が蹇蹇閣上に畫かれるとの事實を耳にしたいとおもうてゐる。

澗

澗

澗既沒孤根深。
西來水多愁太陰。
江天漠漠鳥雙去。
風雨時時龍一吟。
舟人漁子歌回首。
估客胡商淚滿襟。

澗既に沒して孤根深し。
西來水多くして太陰愁ふ。
江天漠漠として鳥雙び去り、
風雨時時龍一吟す。
舟人漁子歌ひて首を回らす、
估客胡商涙襟に滿つ。

【字解】【一】澗。堆の名、唐峽口にある江中の石。卷十四「長江」詩の孤石隱如馬の句解(二五九頁)、卷十五「澗堆」詩(三二九頁)をみよ。【二】孤根。堆石の根。【三】西來。上流より來るをいふ。【四】愁太陰。愁は愁ふことくなるをいふ。太陰は天上の雲氣をいふ。【五】漢漢。雲氣のひろく横ばる貌。

寄語舟航惡年少。 語を寄す舟航の惡年少、

休翻鹽井擲黃金。 鹽井を翻へして黃金を擲つを休めよ。

【六】鳥 雲など。【七】漁子 漁夫。【八】歌回首 首をあちこちふりむけて歌をうたふ。風浪に平氣なるさま。【九】估客 商人。【一〇】胡商 外國商人、大買をいふ。【一一】浪滿 風水、航行を妨ぐるを憂ふるなり。【一二】舟航 船にのりて航行する。【一三】惡年少 惡少年、これは商賈の旅客中にてのそれをさすならん。【一四】休翻鹽井擲黃金 仇氏翻字に注して、翻乃翻飛之意、舟行疾也、といへり。これにては翻字と鹽井と何の關係がある。愚案するに翻は傾翻の意、鹽井の水を全部ぶちまけるをいふ。鹽井は商人の財源なるに、それをまるだしにして賭博をなす。擲黃金とは金錢を賭博のために投げだすをいふ。『鹽州歌』第七首(卷十五の三六九頁)の白晝擲錢高浪中とあるを參看すべし。但、擲錢と擲金の字義を混同するなけれ。

【題義】澆瀆堆のあたりに水かさのましたことをよんだ詩。大曆二年六月の作。

【詩意】澆瀆堆の石の孤根が深く水中に没した。西方上流からくる水量が多く天上の雲氣もうれはしげだ。江上の天には雲氣がひろがつて鳥がならんでとんでゆく、雨風のをりにあたつてときどき龍がうなるこゑがする。このとき舟人や漁子は平氣で首をあちこちむけて歌をうたつてゐるが、商人は大ももしんばいしてむねに涙をいつばいながしてゐる。自分は航行する心だての惡い少年どもに一言する、おまへたちは鹽井の財源をまるだしにして黃金を棄擲してばくちをすることなどはやめたがよいと。

七月一日、題終明府水樓二首 七月一日、終明府が水樓に題す 二首

高棟曾軒已自涼。 高棟曾軒已に自ら涼し、

秋風此日灑衣裳。 秋風此の日衣裳に灑ぐ。

脩然欲下陰山雪。 脩然下らむと欲す陰山の雪、

不去非無漢署香。 去かざるは漢署の香無きに非ず。

絶壁過雲開錦繡。 絶壁雲過ぎて錦繡を開き、

疎松隔水奏笙簧。 疎松水を隔てて笙簧を奏す。

看君宜著王喬履。 看る君が王喬の履を著くるに宜しきを、

眞賜還疑出尙方。 眞賜還た疑ふ尙方より出でむかと。

【原注】終明府功曹也。兼攝奉節令。故有此句。

【字解】【一】終明府 終は姓、名は某、明府は縣令に對する敬稱、

作者の自注にみゆる如く終某は夔州府の功曹參軍にして奉節縣の縣令を兼攝せるものなり。【二】水樓 水に臨める樓。【三】高棟曾軒 曾は層。高きむな木、かさなれるのき。

【四】此日 七月一日立秋の節をいふ。杜詩に月日を稱するものは皆節候を指すと仇氏はいへり。【五】脩然 脩は條に同じ、飛疾の貌。【六】陰山 山西歸化城の西北に横はる山の名。【七】不去 仇注に對之、不、忍、命、去、といへるはいかげにや。

余は去とは漢署に向つて往く義と考ふ。不去とは漢署に向つて往かざるなり。【八】漢署香 漢の郎署の香。漢とは唐のこと、借用す。作者尙書の郎官たり。漢の尙書郎は口に藪舌香を銜みて事を奏す、氣息を芳ばしくするためなり。【九】錦繡 崖壁の草木などのうるはしさをたとへていふ。【一〇】笙簧 簧は笙の舌、笙簧は松風の音をたとへていふ。【一一】看君 君は終某をさす。【一二】王喬履 後漢の王喬襄縣の令となり參朝するるとき鳥が身となりて飛び來れる話。已にみゆ。【一三】眞賜 終某は今は奉節縣令を假攝す。

眞賜とは假に非ず本官を賜はるをいふ。【二】尙方 漢時の役所の名、天子供御の器物を作る所なりと。ここは縣令のはく履をそにて作りて賜はるをいふなり。

【題義】 七月一日に奉節縣のかりの縣令終某が水邊の樓に遊んでそこに書きつけた詩。大曆二年の作。

【詩意】 棟は高く軒は幾層にもかさなつてゐて、それだけでもはや涼しいのに、ましてけふは秋風が衣裳に吹きそそぐに於てをや。儼然として陰山の雪でもふつてこようかといふ様なこころである。自分が漢殿へと往かぬのは郎署の雞舌香が無いためではない。(ここが涼しくてこころよいからである)。ここにゐると絶壁のあたりに雲がとほりすぎて錦繡の色を開いてみせる。またまばらに生えた松が水を隔てて向ふ岸で笙の音を奏でてきかせてくれる。君は昔の仙人縣令王喬の様な履をはくにふさはしい人だ。だから天子の御作事所からほんものの履を賜はることになるのかも知れぬとおもはれる。(やがて本官に任せられるだらう。)

【二】

【三】

慮子彈琴邑宰日。

慮子琴を彈す邑宰の日。

終軍棄繻英妙時。

終軍繻を棄つ英妙の時。

承家節操尙不泯。

承家の節操尙ほ泯びず。

【字解】 【二】 慮子彈琴邑宰日 慮は定、又は快に作る、皆同じ。慮子 慮といふ者單父(縣の名)を治め、身、堂より下らずして鳴琴を彈じて之を

爲政風流今在茲。

爲政の風流今茲に在り。

可憐賓客盡傾蓋。

憐む可し賓客 盡く傾蓋、

何處老翁來賦詩。

何處の老翁か來りて詩を賦す。

楚江巫峽半雲雨。

楚江巫峽は半ば雲雨、

清簾疎簾看奕棋。

清簾疎簾に奕棋を看る。

ち謂者となりて郡國をめぐるとき節を建てて東のかた國を出づ。關史曰く此れ乃ち前きの棄繻生なりと。英妙とは年わかくすぐれたるをいふ。これは同姓の故事を用ふ。【三】 承家節操 終軍の家風を承繼した節操。【四】 爲政風流 慮子賤が琴を彈きながら縣を治めた様な風流の政治のしかた。【五】 傾蓋 孔子が鄭の程子と途であひ車蓋を傾けて語りあひし故事。又、白頭 如新、傾蓋 蓋如、との古語、「漢書」の鄭國傳にみゆ。【六】 何處老翁 暗に自己をいふ。【七】 清簾 簾は「たかむしろ」。【八】 奕棋 碁の勝負のこと。

【詩意】 むかし慮子賤は縣令であつたときに琴を弾きながらなんにもせずその地方を治めた。また終軍は年わかの際に繻をすてて關門をとほつたといふ氣概のあるものであつた。今、君をみると終軍家傳の節操がまだほろびずにゐるし、慮子そのまゝの風流な政治ぶりがここに在るのである。一座の賓客はすべて傾蓋如故といふ様であることは愛すべきことであるし、そこへどこのおやちだか來て詩をつくつたりする。さうして楚江・巫峽になかば雲雨のかかつてゐるときに、まばらな簾をかけ、清

らかな竹席をしいたところ、棋の勝負をみてゐる。

行官張望、補稻畦水歸

行官張望、稻畦の水を補ひて歸る

東屯大江北、百頃平若案。

東屯は大江北の北、百頃平かなること案の若し。

六月青稻多、千畦碧泉亂。

六月青稻多し、千畦碧泉亂る。

插秧適云已、引溜加溉灌。

插秧適云に已む、溜を引きて溉灌を加ふ。

更僕往方塘、決渠當斷岸。

僕を更へて方塘に往かしめ、決渠斷岸に當る。

公私各地著、浸潤無天旱。

公私各、地著す、浸潤天旱無し。

主守問家臣、分明見溪畔。

主守家臣に問ふ、分明溪畔に見ゆ。

芊芊炯翠羽、剡剡生銀漢。

芊芊として翠羽炯たり、剡剡として銀漢に生ず。

鷗鳥鏡裏來、關山雪邊看。

鷗鳥鏡裏に來る、關山雪邊に看る。

秋菰成黑米、精鑿傳白粲。

秋菰黑米を成さば、精鑿白粲に傳(傳)けむ。

玉粒足晨炊、紅鮮任霞散。

玉粒晨炊するに足れり、紅鮮霞散に任せむ。

終然添旅食、作苦期壯觀。

終然旅食を添へむ、作苦壯觀を期す。

遺穗及衆多、我倉戒滋漫。

遺穗衆多に及ばさむ、我が倉は滋漫なるを戒めむ。

【字解】 一 行官 田を支配する掛りのもの。二 張望 行官の姓名。三 稻畦水 稻田の畦の水。これは東屯にある田についていふ。四 關 漢西の宅へかへる。五 東屯 昔時後漢の公孫述が開墾せし田地にして其の地は東漢水の東に在り。作者此に稻田を所有せり。豐州歌第六首「東屯稻畦一百頃」の句解(卷十五、三六八頁)をみよ。六 百頃 六尺四方を歩とし、百歩を一畝、百畝を一頃とす。百頃は百萬坪にあたる。これは東屯の稻田全面積にして作者の所有は下文の千畦といふものなるべし。千畦とのみにては面積知りがたし。七 案 つくみ。八 千畦 千條のあぜみち。九 碧泉 これは菰米よりある水についていふ。一〇 插秧 苗を植付ける。田植。一一 引溜 溜はおつる水。一二 溉灌 水の吐きたしと、そそぎいれ。一三 更僕 僕を更代させて。一四 方塘 方形の貯水池。一五 決渠 みぞをきりひらく。上記の方塘から吐き口をつけて導くべし。一六 當斷岸 地形をいふ。一七 公私各地著 此の句より關山雪邊看まへ八句は張望の作者に報告する語なり。仇氏は此のうちの上四句を張望の歸答の詞、下四句を作者の想像の景なりとせり。今従はず。公私とは公田私田なり。公田は蓋し豐州都督に屬するものなるべく、私田は作者其他一人の所有に屬するものなるべし。地著とは土着なり、その土地におちついて耕作してゐるをいふ。一八 浸潤 水がよくしめりをあたふるをいふ。一九 主守問家臣 主守とは行官張望をいふ、蓋し稻田を看守する責任者なり。家臣とは他の配下の僕隸をさす。二〇 見溪畔 溪畔とは東漢水のほとりをいふ。見とは稻田の状況が見らるるをいふ。即ち下の芊芊以下のさまなり。二一 芊芊 苗の生えしげるさま。二二 炯翠羽 翠鳥の羽のかがやくが如し。苗の青青たるをたとへていふ。二三 剡剡 鋭利なる貌、苗のさきの尖りたるさま。二四 生銀漢 銀漢は「あまのがは」、田に水の満ちたるをたとへいふ。二五 鏡 水面の明かなるをたとふ。二六 關山 附近の一般の山をいふ。二七 雪邊 水田白きによりて之を雪のふりしけるにたとふ。二八 秋菰成黑米 菰はまこものこめ。彫菰米といふものなり。其の色黒し。此の句より最後の「我倉」の句までは作者の意中なり。二九 精鑿 米をよ

くつきて白くすること。鑿の字は本来鑿に作れり。十分の六ペリにつくを鑿といひ、十分の七ペリにつくを精といふ。【三二】傳(傳)白米 一本に傳を傳に作る。余は傳に従ふ。傳は附なり、又合するなり。白米とは白くして光りたる米をいふ。精鑿傳、白米は傳、精鑿之白米の義。精鑿せる白米に黒米を附け合はすをいふ。【三三】玉粒 白米の玉の様な米粒。【三四】晨炊 わしたの炊事。【三五】紅鮮 紅色の米。これまた白米とまぜて炊ぐならん。【三六】散飯 點點と飯のごとく散在する。【三七】愁然 つひに、結局。【三八】添旅食 旅中の食糧を増加する。【三九】作苦 耕作の苦業をなす。【四〇】壯觀 さかんなるもの。獲稻の大量なるをいふ。【四一】遺種 おちこぼれの稻のほ。【四二】衆多 多くの人人。【四三】我倉 倉はこめぐら。【四四】滋養 あふれるほどたくさんあること。

【題義】田地掛りの張望が稻田の畦の水を補うて東屯からかへつて報告したことをよんだ詩。大曆二年漢西にての作。

【詩意】東屯は大江の北にあつて、百頃ばかりの地面が案の様に平である。六月には青い稻が多く、千すぢの畦には碧い泉がみだれてゐる。(それではまだ足らぬから)いまちやうと田植がすんだところで落ち水を引いて灌溉を加へる。そのためかはるがはる僕を貯水池へやつて断岸になつてゐる處からみぞをほりわらせた。掛りの男(張望)がもどつていふには、東屯では公田も私田もみなそれぞれれ土着してゐるし、地面にはしめりけがあつてひでり知らずである。主守が他の家臣たちになつてみたが彼等のいふとほり稻田の景氣のよさは分明と溪水のほとりにあらはれてゐる。即ち苗は芋芋としげつて翠鳥の羽がかがやく様にあをあとしてゐるし、刻刻と鋭い尖りさが銀漢のなかに生えてゐる様である。かもめは鏡のなかに飛んでくるかとおもはれ、關山は雪原のほとりにでもある様にな

がめられる。」と。(そこで自分がおもふ)秋の菰米が黒米になつたらよくついた白米とそれを附け合はさう。朝飯をたくときには白玉の米粒は十分ではあるがそれに紅色の米を霰の様に散らしてたくのもそれもよからう。結局はこの旅中での食糧を増加しやすのであり、どうか骨折つて耕作して秋の收穫の壯觀をみたいと期待するのである。若し米が非常によくできたときは自分の米倉ばかりありあまつてもしかたがないので、さうならぬ様にすべきであり、おち種などは多くの人人に拾はせてわけてやりたいとかんがへてゐるのである。」

秋、行官張望、督促東渚耗稻、向畢清晨、遣女奴阿稽、豎子阿段、往問

秋、行官張望、東渚の耗稻を督促し、畢るに向んとす。清晨、女奴阿稽、豎子阿段を遣はし往きて問はしむ

東渚雨今足、佇聞粳稻香、東渚雨今足る、聞かひと佇つ粳稻の香しきを。

上天無偏頗、蒲稗各自長、上天偏頗無し、蒲稗各自長し。

人情見非類、田家戒其荒、人情非類を見れば、田家其の荒るるを戒む。

執行官張望督促東渚耗稻向畢清晨遣女奴阿稽豎子阿段往問

功夫競措措、除草置岸旁。
 穀者命之本、客居安可忘。
 青春具所務、勤墾免亂常。
 吳牛力容易、竝驅紛遊場。
 豐苗亦已穢、雲水照方塘。
 有生固蔓延、靜一資隄防。
 督領不無人、提攜頗在綱。
 荆揚風土煖、肅肅候微霜。
 尚恐主守疎、用心未甚臧。
 清朝遣婢僕、寄語踰崇岡。
 西成聚必散、不獨陵我倉。
 豈要仁里譽、感此亂世忙。
 北風吹兼葭、蟋蟀近中堂。

功夫競ひて措措たり、草を除いて岸旁に置く。
 穀は命の本なり、客居安んぞ忘る可けむ。
 青春より務むる所を具ふ、勤墾亂常を免る。
 吳牛力容易なり、竝驅紛として場に遊ぶ。
 豐苗亦た已に穢し、雲水方塘を照らす。
 生有れば固より蔓延す、靜一隄防に資る。
 督領人無きならず、提攜頗る綱に在り。
 荆揚風土煖なり、肅肅微霜を候ふ。
 尚ほ恐る主守の疎にして、心を用ふる未だ甚だ臧からざらむことを。
 清朝婢僕を遣はし、語を寄せ崇岡を踰えしむ。
 西成聚れば必ず散せむ、獨り我が倉を陵くするのみならず。
 豈に仁里の譽を要めむや、感す此の亂世の忙はしきに。
 北風兼葭を吹く、蟋蟀中堂に近づく。

荏苒百工休、鬱紆遲暮傷。 荏苒百工休す、鬱紆として遲暮に傷む。

【字解】 〔一〕東清 東瀛水のなごき。東屯をさす。 〔二〕耗稻 耗は減損するなり。耗稻といはば稻をへらす如くみゆるもさにあらず。稻のあひだに生ずる雜草をぬきてへらすなり。俗用の語とみゆ。こちらの「田の草とり」をいふ。 〔三〕向舉 へばりかける。草とりは夏より始めしものなるも秋になりてをばりかけしをいふ。 〔四〕清農 晴れたあき。 〔五〕女奴 なんなしもべ。 〔六〕阿種 女奴の名。 〔七〕阿段 しもべの名、已にみゆ。 〔八〕竹間 竹はたすむことなれど待つ意なり。 〔九〕櫻稻 ればらぬ米のなるいれ。 〔一〇〕個顔 依怙ひいき。 〔一一〕蒲神 がま、ひえ。 〔一二〕非類 同類でなきもの、雜草は稻と異類のものなり。 〔一三〕田家 農家。 〔一四〕芟 草をはやして地面をあらす。 〔一五〕功夫 はたらくこと。 〔一六〕措措 力を用ふる貌。 〔一七〕命 生命。 〔一八〕青春 青は春の色、春より以來の意。 〔一九〕具所務 務むべきことはみなする。 〔二〇〕勤墾 つちをほりかへすにつとめる。 〔二一〕吳牛 吳の地方の牛、水牛のこと。 〔二二〕力容易 力をださせることやすし。 〔二三〕竝驅 二四いつしよに駕してかりたてる。 〔二四〕紛遊場 紛はみだるる貌。場は耕作の場。此の句より上の六句は春耕のことなるをいふ。 〔二五〕穢 穢し、多し。音キ。 〔二六〕雲水 雲影をうかべた水。 〔二七〕有生 生は雜草の生ずるをいふ。 〔二八〕靜一 しづかに意を專一にする、(草とりのために)。 〔二九〕資隄防 隄防とは雜草の蔓延をふせぐこと。資とはそのおかげを蒙るをいふ。 〔三〇〕督領 草とりの人夫を監督しひきふる。 〔三一〕不無人 人あるをいふ。人とは強梁をいふ。 〔三二〕提攜 いつしよにはたらく。 〔三三〕在綱 「尙書」盤庚上篇に、若「網在綱、有條而不可紊、若「農服田力、穡乃亦有秋」とみゆ。網が大綱によつて目が張らるることと監督者が諸人をひきしめてゆくをいふ。此の句より上六句は夏の草とりのことをいふ。 〔三四〕荆揚 蜀地をこめて南土をいふ。已にみゆ。 〔三五〕肅肅 つめたくてひきしまるる貌。霜の形容。 〔三六〕候微霜 候は「うかがふ」、「まつ」。霜おりて禾の成熟するときをまつなり。 〔三七〕尙恐 この尙の字は前文の督領人あり、提攜在綱をうけていふ。 〔三八〕主守疎 主守は前篇に見ゆ。田の責任者張梁をいふ。疎は疎虞、疎漏、用意足らずうっかりしてなること。 〔三九〕咸 善し。 〔四〇〕清朝 清農。 〔四一〕寄語 張梁に傳言する。 〔四二〕踰崇岡 途にて高き岡をこえゆ

秋行官張梁督促東瀛耗稻向舉清農遣女奴阿種整子阿段往問

く。此の句より上六句は序にいふ「往問」のことをのぶ。【一】西成 秋の西風吹きて五穀成熟すること。「尙書」堯典に、平秩西成とみゆ。【二】衆必散 收穫を棄めしうへは必ずそれを他人にも散給する。【三】陸我倉 穀とは圃のごとく高くするをいふ。【四】仁里譽 「論語」に里仁の語あり、鄭玄が注に、仁者の里に居るときたり。張衡が思文賦に、匪仁里其焉宅とあり、仁里の語の本づく所なり。他人に穀を販はすことき人の居る處は仁里といふべし。【五】兼葭 ひめよし、よし。詩經に、兼葭蒼蒼白露爲霜とみゆ。【六】蟋蟀近中堂 詩經に、十月蟋蟀、入我床下とみゆ。【七】荏苒 しいに時のたつさま。【八】百工休 諸事の力役やむをいふ。「禮記」月令に、霜降百工休とみゆ。【九】心むすばれくよくよするさま。【十】暹暮 晩年にあたり心いたむをいふ。

【題義】 稻田掛りの張望に東屯の田の草とりを督促させておいたところ、秋になつてそれがをほりかけたので、晴れたあさ女しもへの阿稽と、やつこの阿段とをあらへやつて様子をたづねさせた。そのことをよんだ詩。黃鶴はこの詩を大曆二年の秋、瀘西からきて東屯に居たときの作としてゐる。

【詩意】 東流水のなごさ(東屯の地)ではいま雨が十分で、やがて稷稻が香しくみるのであらうかとまつてゐるのだ。天には偏頗はないから稻がそだつとともに蒲や稗もめいめいせがのびる。人の情ではそんなやくざな草をみてはそのままにして田地をあらさせておくことは農家としてできぬのである。だからせつせとはたらいで、草とりをして岸のわきにおいておくのだ。穀物は人の生命の本だから、たびすまひの身だとしてどうしてそれを忘れてよからうぞ。春から務むべきことはみんな務めて、土壌をほりかへすことにつとめて農家のきまりをみださぬ様にした。水牛をつかへば力わざをさせること

はたやすいから、二匹いつしよにつないでたくさん耕場にはたらかせたのだ。(そのせむか) ふさふさした苗がたんとでき、雲影をうつしたきれいな水は貯水池にかがやいてゐる。雑草もそこに生える、生えたやつはもとよりはびこる、はびこらせす苗をよくするには専心草ののびるのを防がなくてはならぬ。草とりの監督者としては人がないわけではなく、(張望がゐる)他のものをひきつれて大綱をしめくくつてやつてゐる。こちらは風土があたたかたで、つめたい霜がおくのを待つてゐるのだ。そんな場合だから草とりの監督は人を得てゐてそれでよささうではあるが、自分はそれでもまだ責任者(張望)がうつかりして心のくばりかたがひどくいいこともなからうかとときづかはれるので、けふはあさから婢僕(阿稽と阿段)をつかはして高い圃をこえて先方へこちらのころもちを傳言させた。もしでき秋になれば、自分は自分の倉をたかく積みあげるばかりではなく、聚つた穀物をきつと散じてひとびともわけてやらうとおもうてゐる。これは自分のゐるところが仁者の里だなどいはれてはめられることを求めるわけではないので、まのあたりみる亂世の人民のあわただしさをみて感にたへないためだ。北風がよしあしを吹きたて、こほろぎは堂中にちかづき、寒さが音づれるにつけて次第に野外の諸仕事も休みになるのである。かかるをり亂世の窮民のことをかかんがへると晩年の自分のころはむねにむすばれて傷ましいのである。」

阻雨不得歸瀼西甘林

雨に阻てられて瀼西の甘林に歸ることを得ず

三伏適已過 驕陽化爲霖

三伏適已に過ぎたり、驕陽化して霖と爲る。

欲歸瀼西宅 阻此江浦深

瀼西の宅に歸らむと欲すれども、此の江浦の深きに阻て

壞舟百板坼 峻岸復萬尋

壞舟百板坼く、峻岸復た萬尋なり。

篙工初一棄 恐泥勞寸心

篙工初めより一棄す、恐泥寸心を勞す。

佇立東城隅 悵望高飛禽

佇立す東城の隅、悵望す高飛の禽。

草堂亂玄圃 不隔崑崙岑

草堂玄圃に亂る、隔てず崑崙の岑。

昏渾衣裳外 曠絕同會陰

昏渾なり衣裳の外、曠絶同じく會陰。

園甘長成時 三寸如黃金

園甘長成せし時、三寸黄金の如し。

諸侯舊上計 厥貢傾千林

諸侯舊計とともに上る、厥の貢千林を傾く。

邦人不足重 所迫豪吏侵

邦人重んずるに足らずとす、迫らるる所は豪吏に侵さる

客居暫封殖 日夜偶瑤琴

客居暫く封殖す、日夜瑤琴に偶す。

虛徐五株態 側塞煩胸襟

虚徐なり五株の態、側塞胸襟煩なり。

安得輟雨足 杖藜出嶺嶽

安んぞ得む雨足を輟め、藜を杖いて嶺嶽たるを出で、

條流數翠實 偃息歸碧溥

條流翠實を數へ、偃息碧溥に歸り、

拂拭烏皮几 喜聞樵牧音

烏皮の几を拂拭して、喜びて樵牧の音を聞き、

令兒快搔背 脫我頭上簪

兒をして快く背を搔かしめ、我が頭上の簪を脱すること

【字解】 一 阻雨 雨にじやまされる。 二 甘林 甘は柑、他の處もおなじ。みかんの木のはやし。 三 三伏 夏至のち第

三度の日を初伏、第四度の中伏、立秋後の初庚を末伏とす。五行説にて庚は金なり。火盛なれば金は融伏す。立秋後は金が火に代る。

この三伏は最も暑き時節なり。 四 驕陽 威張つてゐた陽氣。 五 霖 ながあり。 六 江浦 江は大瀆水。 七 百板坼 多く

の舟板が裂開する。 八 篙工 ふながた。 九 恐泥 槐葉冷淘の時をみよ。 一〇 佇立 じつとたつてまつ。 一一 東城隅 東

城は白帝城。 一二 亂玄圃 亂とはまざれること。玄圃は懸圃、崑崙山上の仙城にある屋上庭園。 一三 崑崙岑 仙山。 一四 昏

渾 雨氣のくらくにふること。 一五 曠絶 非常にはるか。 一六 會陰 層陰なり、かさなれる陰氣。 一七 長成 成長。 一八

三寸 直径の長さ。 一九 黃金 柑の色。 二〇 諸侯 地方長官。 二一 上計 計は地方より中央へやる會計報告吏、上計とはそ

の計吏につけて朝廷へたてまつるをいふ。 二二 厥貢 其の貢、豐州の土貢。 二三 傾千林 傾とは盡くす意。 二四 邦人 土地

の人民。 二五 豪吏侵 豪吏は權勢ある官吏、侵は侵奪。 二六 封殖 土を盛りうる。 二七 偶瑤琴 偶は偶四、匹敵するをい

ふ。瑤琴に偶すとは瑤琴を愛撫することく之を愛撫するをいふ。 二八 虛徐 詩經風の北風篇にみゆる虚邪(邪音徐)なり。虚邪は

ゆるやかなる貌。蓋し柑樹の衰弱せしさまをいへるならん。 二九 側塞 其の義未だ詳ならず、かたむき、ふさがる。 三〇 正を失ひ、

開散せざるさまをいふか。 三一 安得 末までかかぬ。 三二 嶺嶽 山けはしき貌。 三三 條流 小枝の末梢をいふ。 三四 翠實

わかく青さみ。 三五 偃息 れてやすむ。 三六 歸碧溥 碧溥は碧色の瀆水のほとり。 三七 烏皮几 黒皮の脇息。 三八 樵牧音

樵はきこり、牧は家畜飼ひ、雨はるれば樵者牧者みな山野に出づ。故にその歌唱の聲音なきを得べし。

阻雨不得歸瀼西甘林

【題義】 雨にじやまされて瀼西のみかんばやしへかへることができなかつたことをよんだ詩。「杜臆」には當時白帝城に往きて雨に阻せられしものなりといへり。これは詩中に「東城隅」とあるによりて立てし説なり。白帝城に臨時にゆきしか、東屯に滞在せしかは詩にはみえず。理を以て推せば東屯に居りて瀼西へかへらんとせしものなるべし。大曆二年七月の作。

【詩意】 三伏の炎熱がすでに過ぎて、これまで威張つてゐた陽氣はながめにかはつた。自分は瀼西の宅へかへらうとおもふが江浦の水の深いのにじやまされてゐる。こはれた舟は多くの板がひらけてしまつたし、けはしい岸は萬尋の高さほどある。船夫ははじめから渡りのことなどほうちやつてゐる。自分は途中でぐづついて目的地へはゆきつけぬかと心をいためてをる。それで東城（白帝城）の隅にたたすんで、高く飛ぶとりをうらめしくながめてゐる。崑崙山に隔てられたわけではないが、じぶんの草堂（瀼西の）が玄圃かなどの様にめつたに往けぬ場所のやうになつてしまつた。じぶんがきてゐる衣裳以外はまつくらで、非常に遠方まで一様に陰氣がかさなつてゐる。果樹園のみかんが大きくなつたときは實の大きさは直徑三寸ほどあつて黄金色をしてゐる。もとは此地の長官は千林のみかんを傾けつくして中央への貢物とし會計吏とともにたてまつらせられたものだ。しかるにいま土地の人がそれを重んずるに足らぬものだとしてゐるのは、みかんをつくつても豪吏の侵奪に迫られるからのことである。じぶんは旅住居でしばらくみかんの木をうるつけ、日も夜も瑤琴同様に愛撫した。そ

のなかで五株ばかりはよわつた態をしてゐるので、それをおもふと心も顛倒し塞がつて胸のながくしやくしやしてくる。』 どうしたら雨足があがつて、あかざの杖をつきながらけはしい山からでて、碧水のほとりにかへつて休息して、えだのさきになつてゐる青い實をかぞへ、黒皮の脇息のほこりをふきとつて、きこりや家畜飼ひの歌をうれしくきき、頭の冠の簪をぬき去つて、こどもにきもちよく背をかかせることができるだらうか。』

又上後園山脚

又上後園の山脚に上る

昔我遊山東。憶戲東嶽陽。

昔我山東に遊ぶ、憶ふ東嶽の陽に戯れしことを。

窮秋立日觀。矯首望八荒。

窮秋日觀に立ち、首を矯げて八荒を望む。』

朱崖著毫髮。碧海吹衣裳。

朱崖毫髮を著く、碧海衣裳を吹く。

尊收困用事。玄冥蔚強梁。

尊收用事に困しむ、玄冥蔚として強梁たり。

逝水自朝宗。鎮石各其方。

逝水自ら朝宗す、鎮石各其の方。

平原獨憔悴。農力廢耕桑。

平原獨り憔悴す、農力耕桑を廢す。

非關風露凋。曾是戍役傷。

風露の凋ましめしに關するに非ず、曾是戍役に傷は

於時國用富足、以守邊疆。時に國用富めり、以て邊疆を守るに足れり。
 朝廷任猛將、遠奪戎馬場。朝廷猛將に任ず、遠く奪ふ戎馬の場。
 到今事反覆、故老淚萬行。今に到るまで事反覆す、故老淚萬行。
 龜蒙不可見、況乃懷故鄉。龜蒙見る可からず、況んや乃ち故郷を懷ふをや。
 肺萎屬久戰、骨出熱中腸。肺萎む久戰に屬す、骨出でて中腸熱す。
 憂來杖匣劍、更上林北岡。憂來匣劍に杖る、更に上る林北の岡。
 瘴毒猿鳥落、峽乾南日黃。瘴毒に猿鳥落つ、峽乾きて南日黃なり。
 秋風亦已起、江漢始如湯。秋風亦た已に起る、江漢始めより湯の如し。
 登高欲有往、蕩析川無梁。高きに登りて往く有らむと欲す、蕩析して川に梁無し。
 哀彼遠征人、去家死路旁。哀しむ彼の遠征の人、家を去りて路旁に死し、
 不及祖父塋、纍纍塚相當。祖父の塋に及ばず、纍纍として塚相當る。

【字解】【一】又、前の上後園山園詩あり、故に「又」といふ。後園は瀋西の宅の北園。【二】山東、太行山脈の東方。今の山東省地方。【三】東嶽、東嶽は泰山、泰安府にあり、陽は南。【四】窮秋、秋のすま。天寶四載の秋が。【五】日觀、泰山頂上の東南巖の名。又日觀峰といふ。【六】嶺首、嶺とはたかく昂ぐるなり。【七】八荒、八方のばて。【八】朱崖、珠崖ともいふ。漢の武帝の置

きし郡の名、今の廣東地方。【九】著卷、舊注にいふ、遠視甚だ微なるをいふと。【一〇】碧海、東海をいふ。【一一】尊收、秋の神。【一二】困用事、用事とは權力をほしいままにするをいふ。困とはつかるをいふ。秋の勢力が衰ふるをいふ。【一三】玄冥、冬の神。【一四】窮強梁、窮はさかんなる貌、強梁はつよくあはれること。冬の勢力が加はれるをいふ。「禮記」の月令に、孟秋之月、其神尊收、孟冬之月、其神玄冥、とみゆ。【一五】朝宗、海を宗として之に向ふをいふ。【一六】嶺石、嶺山なり、其の地方のまじりの山。「周禮」の夏官職方氏に九州各、其の方位によりて嶺山ある、ことをいへり。東南揚州は其の山嶺は會稽、正南は荊州、其の山嶺は衡山といふの類なり。【一七】平原、中原をいふ。【一八】風露、氣候によりてしほみ衰ふ。【一九】曾是、曾は乃なり。【二〇】戎役、征戎力役に人力がとらるるによりて農功が傷害せらる。【二一】於時、時とは玄宗の盛時をいふ。【二二】守邊疆、守とは消極的に防守するをいふ。【二三】任猛將、猛將とは安祿山その他の蕃人出身の武將をいふ。【二四】戎馬場、夷秋の地をいふ。【二五】事反覆、河北の節度使等しばしば朝廷に叛きしをいふ。【二六】龜蒙、二山の名。泰山に近し。【二七】屬久戰、仇氏は戦とは疾を病めて身戰ふ義なりといへり。之を證するため過王侍詩の寒熱時交戰の句を引けり。愚案するに上に寒熱の字あらば格別のこと、單に久戰とあるは戰亂の久しきないふならん。仇氏に従はず。【二八】骨出、肉おちてやせるをいふ。【二九】杖匣劍、劍を杖につく、匣の字は贅語といふべし。【三〇】江漢、蜀の江をいふ。【三一】如湯、水のあつきをいふ。瀋水などがそそぐゆゑなり。【三二】登高、この園の高處にのぼるをいふ。【三三】蕩析、梁が波にうごかされて裂開する。【三四】川無梁、梁は船橋なり。【三五】不及、及とはゆきつくをいふ。【三六】祖塋、父祖の墓。【三七】纍纍、かさなる貌。【三八】塚相當、冨るとは向きあふをいふ。

【題義】二度めに瀋西の北園の山麓にのぼつたことをよんだ詩。大曆二年秋の作。

【詩意】むかしじぶんは山東に遊んだ。あのととき戯れに東嶽(泰山)の南に戯れたことをおもひだす。あのとときは秋の末であつたが日觀峯のうへに立つて首をあげて八方のはてをながめた。南の方朱崖の地は一髪のごとく、東のかた碧海の風は衣裳を吹く。時候は秋の神がやつと勢力を失ひかけて、冬

の神があばれたすときであつた。東にながれゆく水はひとりでに海へとそそぐ、九州の山鎮はそれぞれ其の方位に於てその地方のしづめとしてたつてゐる。しかるに中原の地方だけは民力がやつれ、農民は耕桑のわざをやめてしまつた。これは風露などの氣候のためにしばまされたのではなくして征戍や力役に人力がとられるために傷はれたのである。そのころは國力が富んでをり、十分それで國境を守れたのである。ところが朝廷は蕃人の猛將に事をうちまかされ、遠く北狄の地方を奪取することをなされた。』その結果が、あのとときから今日まで軍事の形勢反覆常なく、老人たちをして萬行の涙を流させてゐるのである。今じふんは泰山のそばの龜山蒙山などをみたいとおもふがそれは見られぬ。ましてやいくら故郷をおもうても故郷が見られるわけのものではない。ながながの戦亂にあたつてじぶんの肺はしばんでしまひ、骨はとびだして腸のなかが熱してゐる。しんばいのあまり劍をついてさらに林の北の岡にのぼつてみる。すると惡氣のために猿や鳥もうへから落ちてき、峽谷は乾ききつて南方の日色が黄ばんでみえる。もはや秋風は起つたのだが、ここの江水はあつくて始めつからお湯の様である。じふんは高い處にのぼつてどこぞへ往きたいとおもふが船橋はこはれてしまつて川にはそれがない。』きのどくなことである、彼の遠征の人人は、彼等は家からはなれて路ばたで死んでしまひ、祖先以來の墓にたどりつくことはできず、他郷での塚がかさなつて向きあうてゐる。』

奉送王信州峯北歸

王信州峯が北歸するを送り奉る

朝廷防盜賊。供給愍誅求。

朝廷盜賊を防ぎ、供給するに誅求せらるるを愍む。

下詔遷郎署。傳聲典信州。

詔を下して郎署より遷し、聲を傳へて信州を典らしむ。

蒼生今日困。天子嚮時憂。

蒼生今日困む、天子嚮時憂ふ。

井屋有煙起。瘡痍無血流。

井屋煙の起る有り、瘡痍血の流るる無し。

壤歌惟海甸。畫角自山樓。

壤歌するは惟だ海甸、畫角自山樓。

白髮寐常早。荒榛農復秋。

白髮寐ぬる常に早し、荒榛農復た秋なり。』

解龜踰臥轍。遺騎覓扁舟。

解龜臥轍に踰ゆ、遺騎扁舟を覓む。

徐榻不知倦。穎川何以酬。

徐榻倦むを知らず、穎川何を以てか酬いむ。

塵生彤管筆。寒膩黑貂裘。

塵は生ず彤管の筆、寒には膩なり黑貂裘。

高義終焉在。斯文去矣休。

高義終焉在り、斯文去矣休せむ。

別離同雨散。行止各雲浮。

別離雨散に同じ、行止各雲浮。

林熱鳥開口。江渾魚掉頭。

林熱して鳥口を開き、江渾りて魚頭を掉る。』

尉佗雖北拜 太史尙南留

尉佗北拜すと雖も、太史尙は南留す。

軍旅應都息 寰區要盡收

軍旅應に都て息むなるべし、寰區盡く收めむことを要す。

九重思諫諍 八極念懷柔

九重に諫諍を思ふ、八極に懷柔せむことを念ふ。

徙倚瞻王室 從容仰廟謀

徙倚として王室を瞻る、從容として廟謀を仰ぐ。

故人持雅論 絕塞豁窮愁

故人雅論を持す、絕塞窮愁豁なり。

復見陶唐理 甘爲汗漫遊

復た見む陶唐の理、甘んじて汗漫の遊を爲さむ。

【字解】 王信州 王崑は姓名。信州は豐州の古名。王崑は豐州の刺史たりしなり、故に王信州といへり。北歸 北のかた長安へかへるなり。供給 軍需を供給するため人民が誅求せらるるをあらはれむなり。聖の主語は朝廷。遷 郎署は郎官の役所、王崑は中央の郎官たりしを豐州の方へうつす。傳 評判をたてるをいふ。中央からわざわざ郎官を地方へだすといひふらす。井屋 井は市街の條坊の交又整然たるさまをいふならん。炊煙 炊煙の生するをいふ。太平の民歌をいふ。堯の時の老人腹を鼓して擊壤して歌ふ。海甸 沿海の地方、趙注・浦注等は此語を今の江蘇省方面をいふとし、當時唯だその地方平靜なりしといへり。之によれば此句は下句と對照して彼の平靜を言ひて此の騷亂をあらはす結果となる。これ作者の意に非ざるべし。作者は蓋し豐州の治まりしことを言はんとするにあるべければ、豐州を荆揚といふ類にて、豐州地方をさして海甸といへるものならん。山樓 豐州の城樓。白髮 自己の老耄をいふ。交棒 はりの木生えておれる。蓋し東屯の田地についていふ。解魚 印をときて官を去ること、崑が辭任をいふ。龜とは印の紐にかめを刺するによりていふ。謝靈運が初去郡時に解魚在管平とみゆ。臥轍 後漢の侯霸が故事。霸、臨淮の太守となり、任を去るとき人民哭して車を遮り、或は道に當りて臥す。人眾ありて去るを惜まれしなり。遺騎 賈島舟 晉の劉惔・張憑が故事。丹陽尹劉惔、孝廉張憑が船を

もとめしめ同載せし話。卷十(四五八頁)、孝廉船の句解をみよ。こは劉惔を王崑に比し、張憑を自己に比す。扁舟といへるは作者豐州に寄寓することさして扁舟といふによる。徐樞 後漢の陳蕃、高士徐樞(孺子)を禮遇し、之がために專用の椅子をそなへし故事。陳蕃を王崑に比し、徐樞を自己に比す。颶川何以酬 舊解多く颶川は陳蕃が郡號なるにより上の徐樞の關係より王崑を著に比したりとなす。余はしかおもはず、これは黃霸が故事を用ひしものなるべし。漢の宣帝の時、黃霸、潁川太守となりて令譽あり。帝爲めに詔を下す。霸を以て州の長官としての崑に比したりとみるべきなり。形管筆 あかぢくの筆、尙書郎の用ふる所。寒賦 賦はあぶら垢のつきたるをいふ。黑貂裘 蘇秦が故事。高義 王崑の高き友誼。終焉 あくまで。斯文 文學の士、己をさす。尉佗 漢の高祖の時、臨賈、南越王尉佗に説きて漢に服従せしむ。此の時さきに叛きし崖旰入朝す、名を奉と改む。吁嗟願せしにより尉佗を以て之に比す。北拜 北面して拜す。太史尙南留 司馬談が故事。卷十七(六五六頁)、周南留滯の句解をみよ。自己の豐州に滯留するをいふ。軍旅 いくさごと。寰區 天下。盡 盡。收 收とは朝廷の手へとりかへすこと。思諫諍 思とは作者がおもふなり。八極 八方のはて。念懷柔 念とは作者がおもふなり。懷柔はなづけ、やすんずる。徙倚 しづかに歩なうつさま。廟謀 朝廷のはかりごと。故人 崑をさす。雅論 正論。絕塞 豐州をさす。豁窮愁 豁はひらけ散するなり。窮愁は困窮のうれい。陶唐 陶唐は堯の氏。理は治なり。汗漫遊 若士、汗漫と九嶺の上に遊ぶといふこと淮南子にみゆ。汗漫は能く天に遊ぶ者なり。作者亦此の輩と自由に遊ばんとするをいふ。

【題義】 夔州の刺史王崑が官をやめて北のかた長安へかへるのを送つた詩。大曆二年秋の作ならんか。
【詩意】 朝廷は盜賊を防禦せられる、それで軍需の供給があるにつけて人民が官吏から財物を誅求せられることをきのどくにおぼしめされて、詔を下して王崑を中央の郎官の役所から遷して、この旨を特に宣傳して信州(夔州)をつかさどらしめられたのである。天子はまへから御心配になり、人民は

今日まで困窮してゐたのであるが、(王君がきてからは)市街の人家に炊煙が起り、人人も瘡痍をうけてそこから血を流す様なことは無くなつた。もとより城樓では番兵が畫角を吹き鳴らすはあたりまへのことであるが、この海べりでは撃壤の歌をうたふほどの太平となつた。それでじぶんの様な白髮の老人も早くから寐ねることができ、榛棘が荒れてゐる田地でも農事上で秋を見るといふ風である。王君はじぶんを禮遇してくれ、むかしの劉惔の様にわざわざ騎兵をつかはして張孝廉の船をさがさせた様な態度をとられたが、今や印綬を解いて官を去らうとし、その人から惜まれることは侯霸が臨淮を去るとき人民が車轍に臥してひきとめた以上である。君は平生陳蕃が特別の榻を設けて徐穉をもてなした様に倦むことを知らずじぶんをもてなしてくれられたが、今やじぶんは潁川の太守にも似た君に對して何もものを以ておむくいをしてよいかわからぬ。自分は郎官にはなつたがあか軸の筆には塵が生じてそれを用ふこともなく、貧しくして黑貂の裘には寒さのをりあふら垢がにじんである。かかる自分に對する君の高義はあくまでのこつてゐるが、斯の文を以て任ずる自分は時去つてゆくゆく萬事休すである。いまわかれることは雨がちりちりに飛びちると同様である。行く君と止まる我とは前途は浮雲のごとく定めがない。いま林はあつくて鳥も口を開けてあへぎ、江水はにごつて魚も頭をふつてうごめいてゐる。昔の尉佗に比すべき崔旰はやつと歸順してめでたいが、太史公に比すべき自分はまだ南方に滯留してゐる。これからはいくさごとはすべてなくなるであらう。天下の士

地はすべて朝廷の方へとりかへさなくてはならぬ。自分は九重の天子に向つて諫諍の臣あらんことをおもひ、八方の國土に對してはそれをなづけやすんじてやりたいとおもふ。それでゐざりながら高く王室をみあげ、ゆつたりとして朝廷の謀圖いかにと仰いでゐる。幸に舊知のあひだがらである君は正直の議論を所持してをられるから、自分はここの絶塞でしんばいも散つてしまふのである。君があらへゆくなれば、ふたたび帝堯陶唐氏時代の政治を見ることができらう、だからそのときは自分分は安心して平氣で汗漫の徒と遊びをするであらう。」

驅豎子摘蒼耳

豎子を驅りて蒼耳を摘ましむ

江上秋已分。林中瘴猶劇。
 江上秋已に分る、林中瘴猶ほ劇し。
 畦丁告勞苦。無以供日夕。
 畦丁勞苦を告ぐ、以て日夕に供すべき無し。
 蓬莠獨不焦。野蔬暗泉石。
 蓬莠獨り焦げず、野蔬泉石に暗し。
 卷耳況療風。童兒且時摘。
 卷耳況んや風を療すをや、童兒且つ時に摘まむと。
 侵星驅之去。爛漫任遠適。
 星を侵して之を驅り去らしむ、爛漫遠く適くに任す。
 放筐亭午際。洗剝相蒙翳。
 筐を放つ亭午の際、洗剝して相蒙翳す。

登^(二八)牀^(二八)半^(二八)生^(二八)熟^(二八)。下^(二九)筋^(二九)還^(二九)小^(二九)益^(二九)。
 牀^(二八)に登^(二八)すは半^(二八)ば生^(二八)熟^(二八)なり、筋^(二九)を下^(二九)せば還^(二九)た小^(二九)益^(二九)あり。
 加^(三〇)點^(三〇)瓜^(三〇)薤^(三〇)間^(三〇)。依^(三一)稀^(三一)橘^(三一)奴^(三一)跡^(三一)。
 瓜^(三〇)薤^(三〇)の間に加^(三〇)點^(三〇)すれば、依^(三一)稀^(三一)たり橘^(三一)奴^(三一)の跡^(三一)に。
 亂^(三二)世^(三二)誅^(三二)求^(三二)急^(三二)。黎^(三三)民^(三三)糠^(三三)乾^(三三)窄^(三三)。
 亂^(三二)世^(三二)誅^(三二)求^(三二)急^(三二)なり、黎^(三三)民^(三三)糠^(三三)乾^(三三)窄^(三三)し。
 飽^(三四)食^(三四)亦^(三四)何^(三四)心^(三四)。荒^(三五)哉^(三五)膏^(三五)粱^(三五)客^(三五)。
 飽^(三四)食^(三四)する亦^(三四)た何^(三四)の心^(三四)ぞ、荒^(三五)なる哉^(三五)膏^(三五)粱^(三五)の客^(三五)。
 富^(三六)家^(三六)廚^(三六)肉^(三六)臭^(三六)。戰^(三七)地^(三七)骸^(三七)骨^(三七)白^(三七)。
 富^(三六)家^(三六)廚^(三六)肉^(三六)臭^(三六)し、戰^(三七)地^(三七)骸^(三七)骨^(三七)白^(三七)し。
 寄^(三八)語^(三八)惡^(三八)少^(三八)年^(三八)。黃^(三九)金^(三九)且^(三九)休^(三九)擲^(三九)。
 語^(三八)を寄^(三八)す惡^(三八)少^(三八)年^(三八)、黃^(三九)金^(三九)且^(三九)つ擲^(三九)つことを休^(三九)めよ。

【字解】 〔一〕 蒼耳 草の名。蒼耳が卷耳とひとしきや否や異あり。本文には卷耳況瘰癧とあれば作者は同じと考へしが如し。實際は別物なるが如く、蒼耳はアナモミと稱するもの、卷耳はハコベ、カハラケナの類なりといへり。〔二〕 秋已分 秋分の節となりしこと。〔三〕 割 激しきこと。〔四〕 告勞苦 これより且時摘までは畦丁即ち墾子の辭なり。〔五〕 供日夕 野菜を夕膳のおかすに供へる。〔六〕 蓬莠 莠は惡草。〔七〕 野蔬 野生のやさい。〔八〕 暗泉石 泉石のあたりを蔽ふないふ。〔九〕 卷耳 上に出だせり。〔一〇〕 瘰癧 本草に卷耳は瘰癧・風濕・周痺・四肢の拘攣を療すとみゆ。詩句の風は風痺なるべし。〔一一〕 童兒 即ち題の墾子。墾子自ら稱していふなり。〔一二〕 侵星 朝はやく。〔一三〕 濯漫 勝手に飛ぶさまとみゆ。或は曰く不齊の貌と。〔一四〕 放筐 草つみのかごをなげだす。つみするをいふ。〔一五〕 洗剝 舊解に云ふ、土を洗ひ毛を剝ぐをいふと。剝が毛をはぐことなるや否やは不明。汚れまたは食ふに妨げあるところをむしりとるをいふならん。〔一六〕 相蒙覆 舊解に食巾を以て之を覆ふをいふとなせり。これは「周禮」の墾人職などよりおもひつきし解ならんも、相蒙覆とありて蒙覆を一つに用ひあれば洗剝を了へたるものを互にかされかぶせあふをいふなるべし。〔一七〕 登牀 牀は食牀、食桌をいふ。〔一八〕 半生熟 生と煮たものとを半半。〔一九〕 下筋 はしをおろす、たべ

ること。〔二〇〕 小益 衛生上にす、この利益あること。〔二一〕 加點 ちよつびりのせる。〔二二〕 瓜薤 かり、ラツキヤウ。〔二三〕 依稀 かすかに似たるさま。〔二四〕 橘奴跡 吳の丹陽太守李衡といふもの武陵の龍陽洲に甘橘千株を種ふ、死にのぞみて其の子をいまして曰く、吾が洲裏の千頭の本奴は誰かことに朝千匹を得べしと。荆州記にみゆ。これ橘奴の故事なり。詩は單に橘實を意味す。跡とは形迹をいふ。ただ如何なる形迹をいふか、或は酸甜の味をいふとす、或は青き色をなますとなす。〔二五〕 糠乾窄 糠は「ぬか」、乾は乾、乾等を作る、藎字の假借なりといへり。藎は藎き藎なり。窄は量小の意に用ひたり。〔二六〕 覓 心の迷へるをいふ。〔二七〕 膏粱客 あぶら・よきこめを食する富貴の人。〔二八〕 惡少年二句 本卷「澆瀆」詩の尾二句の句解をみよ。

【題義】 しもべをやつて蒼耳といふ草をつませたことをよんだ詩。大曆二年秋の作。

【詩意】 この江邊では秋分になつたが、林のなかでは惡氣がまだはげしい。はたけ男がいふには、「このごろの仕事はなんざしてはたらいてもとても晩のおかすをおそなへすることはできません。ただこの炎熱でも蓬や莠は焦げもせず、野生のやさいは泉石のあたりにかぶさつて生えてゐます。卷耳はまして風痺のやまひをなほすといひますから、童兒は時にはまあ摘んでみませう」と。それで自分はある星のあるうちからこの男をおひたててどこへでも勝手に遠くまでいつてつんでこいというてやつた。正午ごろには彼は筐をはふりだして、摘んできた草を洗つたり剝いたりしてつみかさねてゐた。それから食膳には生と煮たのを半半にのぼせた。箸をつけるとすこしはからだの補ひになる。瓜や薤などにちよつびりあしらふと桶をあしらうた様なくあひである。いま世がみだれて人民は上から誅求されることが急で糠や麥のしひなでさへ小量はかたべられぬ。それにたらふくふとはせ

んたいどんな心なのか、膏粱などくつてゐるものどもは迷ひこんでゐる。金持の家では臺所の肉がくさつて臭くなつてゐるのに、戦地では骸骨が白く横はつてゐるのである。自分は富貴である惡少年たちにつげる、「おまへたちは黄金を無益になげすめてはならぬぞ」と。」

甘林

甘林

捨舟越西岡。入林解我衣。
青刍適馬性。好鳥知人歸。
晨光映遠岫。夕露見日晞。
遲暮少寢食。清曠喜荆扉。
經過倦俗態。在野無所違。
試問甘藜藿。未肯羨輕肥。
喧靜不同科。出處各天機。
勿矜朱門是。陋此白屋非。

舟を捨てて西岡を越え、林に入りて我が衣を解く。
青刍馬性に適ふ、好鳥人の歸るを知る。
晨光遠岫に映ず、夕露日を見て晞く。
遲暮寢食少し、清曠荆扉を喜ぶ。
經過俗態に倦む、野に在りては違ふ所無し。
試みに問ふ藜藿を甘しとするやと、未だ肯て輕肥を羨まざる。
喧靜は科を同じくせず、出處各天機。
朱門の是なるを矜りて、此の白屋非なりと陋とする勿れ。」

明朝歩鄰里。長老可以依。
時危賦斂數。脫粟爲爾揮。
相攜行豆田。秋花靄菲菲。
子實不得喫。貨市送王畿。
盡添軍旅用。迫此公家威。
主人長跪問。戎馬何時稀。
我衰易悲傷。屈指數賊圍。
勸其死王命。慎莫遠奮飛。

明朝鄰里に歩す、長老以て依る可し。
時危くして賦斂數なり、脱粟爾が爲に揮はむと。
相攜へて豆田を行る、秋花靄として菲菲たり。
子實喫するを得ず、市に貨して王畿に送る。
盡く軍旅の用を添ふ、此の公家の威に迫らる。
主人長跪して問ふ、戎馬何時か稀ならむと。
我衰へて悲傷し易し、屈指すれば數賊に圍まる。
其に勸む王命に死せよ、慎みて遠く奮飛すること莫れと。」

【字解】「一」甘林。漢西の宅の柑林。「二」捨舟。漢水のわたりの舟をのりする。「三」青刍。青いまぐさ。「四」適馬性。上陸後は馬にのりて宅へかへり、馬に草をたべます。草は馬の好む所なり。「歸」詩の東帶還騎馬の句をおもひあはすべし。「五」遠岫。遠山。岫は穴のある山。「六」夕露。これは宿露ならん。前夕おきたるつゆ。「七」晞。晴かやく。「八」清曠。清くひろき境地。後漢の仲長統に卜居清曠あり。「九」荆扉。いばらを縛してつくれるとびら。「一〇」經過。富貴の家にたちよること。「一一」俗態。世間なみの人づきあひのさま。「一二」在野。林野に住居すること。「一三」無所違。自己の本性にたがはぬこと。「一四」試問。自ら問ふなり。「一五」甘藜藿。あかさ、まめの粗食をうましとする。「一六」未肯羨輕肥。此句より陋此白屋非までは上の間に自ら答ふるなり。輕肥とは輕裘肥馬なり。「一七」喧靜。にぎやかとしづかと。「一八」不同科。科は品、類なり。「一九」出處。進出と退き處ること。

出は喧、處は靜。【二〇】天機 自然の妙。【二一】矜 ほめる。【二二】朱門是 富貴の家に住むがよし。【二三】陋 みすばらしとする、いやしむ。【二四】白屋非 白屋は白茅をもつて葺きし貧しき家、非とは是に對す、あしきをいふ。【二五】明朝步郡里 此の一句は敘事にして地の文なり。【二六】長老可以依 此の句より三句、「脫粟」の句までは作者の長老にいふ辭なり。可、以依は可相依の意、「こちらにたよつてもよろしい」。【二七】賦斂 税金のわりつけ、とりこみ。【二八】粟 玄米。【二九】爲爾揮 爾は長老をさす。揮とは賑給のためにふるうてだしてやるをいふ。【三〇】相攜二句 敘事にして地の文。【三一】秋花 豆の花。【三二】藟 藟非藟はもやもやと多くあるさま。藟非はにほふさま。【三三】子實 豆のみ。以下四句と「戎馬」一句とは長老の辭なり。【三四】貨市 市にうりにやる。【三五】送王畿 王畿は長安の近地をいふ。朝廷をさすなり。【三六】公家 官家、朝廷府縣官はみな公家なり。【三七】主人長跪問 此の一句は敘事にして地の文。主人は長老をいふ。長跪は兩膝をつき脚掌を後方へやりて立つさま。問ふは作者にとふなり。【三八】戎馬 此の一句上の長老の辭のつづきなり。【三九】我衰 我は作者。【四〇】數賦園 數の字仇氏は晋スツにて「かぞふ」と訓じ、賦の園みがいづ解けるかをかぞへることとときたり。余は晋サク、上の賦斂數の數とおなじく「しばしば」の義とみる。數は賦に關するとは長安以來のことをいへるなり。【四一】勸其 其は長老をさす。【四二】死王命 以下次句まで作者の辭。王命とは天子の命、税をたすこと、征役にでることみな是なり。【四三】奮飛 とりのごとく飛び去るをいふ。

【題義】 瀼東から瀼西の柑林にかへつたことをよんだ詩。仇氏は朱門云云によりて城中からかへりしならんといへり。大曆二年秋の作。

【詩意】 自分は瀼水の岸で舟をのりすてて西の岡を越え、林のなかにはひつて自分の禮服をぬぐ。それから馬に青くさをたべさせると、馬はよろこんでたべる。またよい鳥も人が歸つてきたことを知るかの如くさへづつてゐる。あさ日の光が遠方の山にうつろふ。夕からかけての露は太陽がでるとまもなく乾いてしまふ。自分は晩年に於て寝ることも食べることも少く、ただこんなさつぱりとひろびろ

とした荆の扉の住居をよろこぶのである。富貴の家などへたちよつて世俗なみのつきあひをすることはない。かややつて林野にさへ居れば氣のむいたとほりである。自分は試みに我と我が身にたづねる。「汝は藜藿の様な粗食をうまいとおもうてゐるか」と。自分はこれに答へる。「自分はこれまで輕裘肥馬の生活を羨んだことはない。にぎやかと靜かとはもと種類のちがつたものだ。世のなかへ出るも退くもそれはめいめいの自然の妙用といふものだ。朱門の富貴が必ずよいとほり、白屋の貧賤が必ずわるいとしてけなしてはならぬものである」と。翌朝自分は近所をあるいて長老にであうた。自分は長老にいうた。「長老はわたしをたよるがよろしい。今時世が危くて税金のとりたてがたびたびである。こまるならわたしがおまへのために玄米をだしてやらう」と。それから二人で手をたづさへて豆はたけをめぐると、秋の豆の花がたくさんさきにほうてゐる。長老がいふに、「この豆は實になつてもわたくしはそれをたべることができぬ。これは市へだして錢にかへ、京師の方へ送つてやり、みんな軍の御用だすけにするのである、さ様にせいとの朝廷からの權威によぎなくされてゐるのである」と。そこでこのあるじ（長老）は膝立ちして自分にまた問ふ。「いつたい戰亂はいつすくなくなるのでありませうか」と。自分は老衰になつてちきものがなくなると。指をりかぞへると自分もたびたび賊に圍まれてゐる。そんなわけだから自分は長老をなだめた。「おまへはお上の御命令なら、そのために死力をつくせ。きをつけてここを離れて遠方へ逃げだす様なことをしてはならぬぞよ」と。

暇日小園散病將種秋菜督勒耕牛兼書觸目

暇日小園に病を散す、將に秋菜を種るむとして耕牛を督勒し、兼ねて觸目を書す

不愛入州府。畏人嫌我真。州府に入ること愛せざるは、人の我が真を嫌ふを畏る

及乎歸茅宇。旁舍未曾嗔。茅宇に歸るに及びて、旁舍未だ曾て嗔らす。「ればなり」

老病忌拘束。應接喪精神。老病拘束せらるるを忌む、應接すれば精神を喪ふ。

江邨意自放。林木心所欣。江邨意自放す、林木心の欣ぶ所。

秋耕屬地濕。山雨近甚勻。秋耕地の濕ふに屬す、山雨近ごろ甚だ勻し。

冬菁飯之半。牛力晚來新。冬菁は飯の半ばなり、牛力晚來新なり。

深耕種數畝。未甚後四鄰。深耕種うるること數畝、未だ甚だしく四鄰に後れず。

嘉蔬既不一。名數頗具陳。嘉蔬既に一ならず、名數頗る具陳す。

荆巫非苦寒。採擷接青春。荆巫苦寒に非ず、採擷青春に接せむ。

飛來雙白鶴。暮啄泥中芹。飛來の雙白鶴、暮に啄む泥中の芹。

雄者左翻垂。損傷已露筋。雄者左翻垂る、損傷已に筋を露す。

一步再流血。尙驚矰繳勤。一步再び血を流す、尙ほ驚く矰繳の勤めらるるに。

三步六號叫。志屈悲哀頻。三步六たび號叫す、志屈して悲哀頻りなり。

鸞鳳不相待。側頸訴高旻。鸞鳳相待たず、頸を側てて高旻に訴ふ。

杖藜俯沙渚。爲汝鼻酸辛。杖を杖いて沙渚に俯す、汝が爲に鼻酸辛なり。

【字解】 〔一〕小園 漢西宅の小園。〔二〕散病 病氣を退散させる。養生のためにするをいふ。〔三〕督勒 勸もむさへつけてさせること。或は勸の字に作る。〔四〕州府 州府の城をいふ。〔五〕眞 天眞・本眞、心のありのまま。〔六〕茅宇 漢西宅の茅屋。

〔七〕應接 他人と應對すること。〔八〕哀精神 元氣がなくなる。〔九〕江邨 漢西の村。〔一〇〕自放 きままにする。〔一一〕勻 平均。〔一二〕冬菁 かぶら。〔一三〕飯之半 米飯の半分と匹敵す。〔一四〕牛力 牛耕の力。〔一五〕具陳 そろへてならべる。種種のものなうましないふ。〔一六〕刑巫 刑巫といふも巫族のこと。〔一七〕採擷 採も「とる」なり。〔一八〕接青春 接は接續、たべものを春まで連接させることが出来るをいふ。〔一九〕雙白鶴 この鶴は自己の境をたとへてのべたるもの。〔二〇〕矰繳 いぐるみ。〔二一〕不相待 こちちを待つてくれぬ。〔二二〕側頸 鶴がくびをよこにする。〔二三〕高旻 たかきそら。〔二四〕汝 鶴をさす。

【題義】 ひまなをり、小さな園内で病氣の保養をした。そのために秋の野菜をうるようとして牛耕を監督し、かねて目にふれたことをかきつけた。上述の意をのべた詩。大曆二年秋、漢西にての作。

【詩意】 自分が城内へはひらぬのは他人がじぶんの天眞のままなのを嫌ひはすまいかとおそれるためだ。ここに茅屋へかへりついてみると近所の人人はだれも自分に對しておこる様なものはをらぬ。自分分は年よりのうへ病氣で他から拘束されることは禁物だ、人と應對などしてゐると元氣がうせてしま

ふ。之に反して江ぞひの村にあれば勝手氣まままで林の木をみることはひごろうれしくおもふ所のものである。そこで秋の耕作をしようとするところやうどをりよく近ごろは雨が一樣にふつて地面がしめりのあるときである。かぶらは御飯の半分に匹敵するねうちのものだ。夕方になつて耕牛の力もあらたにでてきた。それで土地をふかいたがやしてかぶらを數百歩ばかりうゑつける。うゑかたは近所にくらべてひどくも後れてはぬ。その他いろいろよい野菜があるが、さまざまの名のものを可なりそろへてならべてうゑた。この巫山地方はひどい寒さのところではないから、この野菜をとつてたべてゐたら來年の春でできる食物とをつなぎあはせることはできるだらう。あすこへ一對の白い鶴が飛んできた。鶴は暮に泥のなかの芹を啄んでゐる。その雄は左の翮が垂れさがつて、きずをうけて筋があらはれてゐる。一あしあゆんでは二度も血を流し、そのうへまだ他人からせつせと「いぐるみ」を射かけられるのに驚いてゐる。また三あしあゆんでは六たびもなきさけんで、飛ばうとおもうてもとべずしきりになきかなしんでゐる。鸞鳳の様な鳥はこの鶴をみてはつたらかして待たずに飛んでいつた。だから鶴は頸をそばだてて高いそらに向つてなにか訴へてゐる。自分はおかざの杖をついて沙のなきさにうつむきながら、おまへ（鶴）といふもののためには鼻つまらせてかなしいおもひをするのである。」

雨

雨

山雨不作泥、江雲薄爲霧。
晴飛半嶺鶴、風亂平沙樹。
明滅洲景微、隱見巖姿露。
拘悶出門遊、曠絕經目趣。
消中日伏枕、臥久塵及屨。
豈無平肩輿、莫辯望鄉路。
兵戈浩未息、蛇虺反相顧。
悠悠邊月破、鬱鬱流年度。
針灸阻朋曹、糠粃對童孺。
一命須屈色、新知漸成故。
窮荒益自卑、飄泊欲誰訴。
疋羸愁應接、俄頃恐違迕。

山雨泥を作さず、江雲薄く霧を爲す。
晴には飛ぶ半嶺の鶴、風には亂る平沙の樹。
明滅洲景微なり、隱見巖姿露る。
拘せられて悶す出門の遊、曠絶なり經目の趣。
消中日に枕に伏す、臥久しくして塵屨に及ぶ。
豈に平肩輿無からむや、辯する莫し望郷の路。
兵戈浩として未だ息まず、蛇虺反つて相顧る。
悠悠邊月破る、鬱鬱流年度る。
針灸に朋曹阻る、糠粃童孺に對す。
一命須らく色を屈すべし、新知漸く故と成る。
窮荒益、自ら卑くす、飄泊誰にか訴へむと欲する。
疋羸應接を愁ふ、俄頃違迕せむことを恐る。」

浮俗何萬端。幽人有高步。
 龐公竟獨往。尚子終罕遇。
 宿留洞庭秋。天寒瀟湘素。
 杖策可入舟。送此齒髮暮。

浮俗何ぞ萬端なる、幽人高歩有り。
 龐公竟に獨往、尚子終に遇ふ罕なり。
 宿留せむ洞庭の秋、天寒くして瀟湘素し。
 杖策を杖き舟に入りて、此の齒髮の暮を送る可し。」

【字解】 〔一〕 不作泥。石地なればなり。〔二〕 洲。景は日光。〔三〕 拘。遊を拘せらるるにより悶ゆるをいふか。〔四〕 曠。ひさしく絶ゆ。〔五〕 題目。目を觸る處とは晴れしかりの眺望のさまをいふ。〔六〕 消中。病名、已にみゆ。〔七〕 平。肩輿。肩にてかつぐ輿。〔八〕 浩。はるかに、久しく。〔九〕 蛇。蛇もへび、まむしの類。〔一〇〕 邊。邊月とは邊境の月、この地の月をいふ。破とは滿月のち殘缺するをいふ。〔一一〕 響。さかんなる響。〔一二〕 流。流年。流れゆく年月が経過する。〔一三〕 針。病によつて之を用ふ。〔一四〕 簪。本卷の驅。髮子。摘。著耳。詩の句解をみよ。〔一五〕 童。こども。〔一六〕 命。命須眉色。一命は天子より初めて官を任ぜらるるをいふ。作者尙書の郎官となりしをさす。「杜陵」にはこの説を非なりとし一命は他人についていふとなせり。仇氏之に従ふ。然れども余は舊解を取る。眉色とは他人に對して顔色を屈すること。〔一七〕 新知漸成故。他人が自分を始めは新知としてめづらしがり、後に故いものとして棄つるをいふ。〔一八〕 窮。邊境不毛の地、要州をいふ。〔一九〕 自。上の一命の句を承く。〔二〇〕 欲。漸成故の句を承く。〔二一〕 冠。よわく、つかる。〔二二〕 應。人と應對する。〔二三〕 遠。他人の情意にたがひさからふ。〔二四〕 浮。輕薄な世俗。〔二五〕 高。高尙なあるきかた。〔二六〕 龐公。後漢の龐德公、城府に入らず、妻子を率ゐて襄陽の鹿門山に隱る。〔二七〕 獨往。江海之士、山谷之人、類。萬物一而獨往、と淮南子にみゆ。〔二八〕 尚子。後漢の尙長、字は子平、家事にたづまはらず、五嶽名山に遊び、終る所を知らず。〔二九〕 罕遇。世人已れと遇ふものまれなり。〔三〇〕 宿留。「漢書」郊祀志に天子宿留海上の語あり。これは武帝が海上に宿しとどまりて仙人を待つことをいへり。之によりて杜詩の此語を須待。等侯の義にとくものあり。されど須待。等侯は宿留の目的にして宿留そのものに非ず、宿留とは宿し留まる義にて可なり。〔三一〕 入舟。洞庭・瀟湘に泛びゆくなり。〔三二〕 齒髮暮。晩年をいふ。

【題義】 雨のときの感をのべたる詩。峽を出でて荆・湘の地に入らんと欲する意をいへり。大曆二年秋の作。

【詩意】 山の雨は泥とはならず、江の雲はうすく霧になる。晴れまには嶺のなかごろに鶴が飛ぶ。風が吹くと沙はらの樹木がさがさと鳴る。中洲のあたりをてらす日光は明るくなつたり消えたり、巖石の姿は見えたり隠れたり、こんなことで門外へ出てあそぶことが限られるので気がくさくさする。いくにちもはればれとした眺望をしたことがない。自分は消中の病で日日枕に伏してをり、ながなが臥してゐるので塵が履ほどあつくなつてゐる。肩輿がないわけでもないが、でてみても故郷をながめ得る路がわかるのでもない。久しく兵亂がやまぬのみか蛇や虺がたづねてきてくれる。いたづらに長長と邊境の月の缺けるのをみ、さかんに多く流れる年がすぎ去つてゆく。針や灸をしてもらひながらともだちとはへだたり、糠や麥くすをたべながら子供等とうちむかうてゐる。天子の一命の官を辱くしながら他人にはこちらの顔色を屈しなればならず、新知己と一時は喜ばれてもやがて故いものとして棄てられる。邊鄙な荒れた土地でますます自分を卑くしてゆかねばならぬ、この飄泊の生活に於てだれに自分の心中を訴へようか。からだがよくつかれてゐるから人と應對するのはうれば

しい。ちよつとした時にでも相手の心にさからひはせぬかと氣遣はれるのである。』世間の俗人はどうしてあの様にさまざまのゆきかたをするか。それとちがつて幽人は高尙なあるきかたをする。龐公は結局ひとりでそのゆくべき處へ往つてしまつた。尙子平はあくまで自己と遇ふものがなかつた。(じぶんはそんな人をしたふ)。だから自分はここを去つて洞庭湖の秋に宿し留まりたいとおもふ、そらが寒く瀟湘の川の水が白くなつてくる。策をついて舟のなかへはひり、この晩年を送るがよろしいとおもふ。』

溪上

溪上

峡内淹留客、溪邊四五家。

峡内淹留の客、溪邊四五の家。

古苔生進窄地、秋竹隱疎花。

古苔生「窄」地に生ず、秋竹に疎花隠る。

塞俗人無井、山田飯有沙。

塞俗人井無く、山田飯に沙有り。

西江使船至、時復問京華。

西江使船至る、時に復た京華を問ふ。

【字解】「一」 峡。三峽。「二」 溪。瀟水。「三」 進地。進字にせまる。ちぢまるの義あれど、一本に窄に作れるの優れるに如かず。窄地はせまき地。「四」 疎花。野生のまばらなる花。「五」 塞俗。とりである地の風俗、夔州の俗。「六」 西江。夔州の大江、西とは京師よりいふ。

【題義】瀟水のほとりの秋の景情をのべた詩。大暦二年秋の作。

【詩意】峡内で長逗留をしてゐる自分。溪川のほとりの四五軒の家。せまい土地に古い苔が生えてゐる。秋の竹のかけにまばらな花がさいてゐる。ここのならはして人民には井がなく、山田であるからごはんには沙がある。江邊にはみやこの使者ののつた船がくると、時としてはまた京師の様子をたづねてみる。

樹間

樹間

岑寂雙柑樹、婆娑一院香。

岑寂たり雙柑樹、婆娑として一院香し。

交柯低几杖、垂實礙衣裳。

交柯几杖に低れ、垂實衣裳を礙ぐ。

滿歲如松碧、同時待菊黃。

滿歲松の碧なるが如く、同時菊の黄なるを待つ。

幾回露葉露、乘月坐胡牀。

幾回か葉露に露されて、月に乘じて胡牀に坐せしぞ。

【字解】「一」 岑寂。さびしきさま。「二」 雙柑樹。二本のみかんの木、庭中にあるもの。「三」 婆娑。舞ふ貌、枝葉のうごくさま。「四」 一院香。奥庭全體がかんばし。「五」 滿歲。年ちう。「六」 胡牀。しやうぎ。

【題義】二本のみかんの樹の間といふことをよんだ詩。作時は詳ならず。仇氏は朱氏によりて夔州の

詩中に收む。

【詩意】二本のみかんの樹がひつそりたつてゐる。その枝葉がうごくときは奥庭全體がかんばしい。この樹の交はつた柯は脇息や杖のところまでたれさがつてゐるし、垂下した實は衣裳にひつかかるくらゐである。この樹の葉は一年ちう青くて松の碧である様だし、その實はきばんで時を同じくして菊の花がきはむのを待つてゐる様だ。自分は何んどのこの樹の葉からしたたる露にぬれつつ、月のあかりをりにしやうぎにこしかけたかわからぬ。

白露

白露

白露團（一）甘子（二）。清晨散馬蹄（三）。

白露甘子に團なり、清晨馬蹄を散す。

圃開連石樹（四）。船渡入江溪（五）。

圃は開く石に連る樹、船は渡る江に入る溪。

憑几看魚樂（六）。回鞭急鳥棲（七）。

几に憑りて魚樂を看る、鞭を回せば鳥棲急なり。

漸知秋實美（八）。幽徑恐多蹊（九）。

漸く知る秋實の美なるを、幽徑恐らくは蹊多からむ。

【字解】

【一】甘子。柑實。【二】散馬蹄。馬でぶらぶらゆく。作者陸路は馬により、溪は船にて渡る習慣なり。【三】圃開。圃は「はたけ」、溪東にあるもの。【四】連石樹。石山仰ふ樹木、石につらなりてみゆ。【五】入江溪。溪は瀧水、大江にそそぐ。【六】憑几。憑はよりかかる。【七】看魚樂。これは瀧東の園にてのこと。仇氏は東屯にゆきしこととす。但だ東屯なりや否や詳ならず。【八】

【題義】柑實についてよんだ詩。題の「白露」は首の二字を切りとりて用ふ。大曆二年秋、瀧西にての作。

【詩意】蜜柑の實に白露がまんまるにおいてゐる。この時あさはやく自分は馬でぶらぶらでかけた。はたけがあらはれて石に連つて生えた樹がみえてくる。水邊へくれば船で大江にそそぐ溪（瀧水）をわたる。さて脇息によつて魚が樂しんでゐる様子をながめ、さてかへらうと馬鞭をかへせばはや鳥はねぐらにかへらうといそいでゐる。だんだん圃中の秋の柑實がうまくなるのがわかる。かくれた徑にこ

とよると人のふみつけたこみちのできる恐れがある。

諸葛廟

諸葛廟

久遊巴子國（一）。屢入武侯祠（二）。

久しく遊ぶ巴子の國、屢入る武侯の祠。

竹日斜虛寢（三）。溪風滿薄帷（四）。

竹日虚寢に斜に、溪風薄帷に滿つ。

君臣當共濟（五）。賢聖亦同時（六）。

君臣共濟に當る、賢聖亦た時を同じくす。

白露 諸葛廟

翊戴歸先主并吞更出師。翊戴先主に歸す、并吞更に師を出す。

蟲蛇穿畫壁巫覡綴醉蛛絲。蟲蛇畫壁を穿つ、巫覡蛛絲に綴[醉]ふ。

歎憶吟梁父躬耕也未遲。歎ち憶ふ梁父を吟せしを、躬耕するも也た未だ遅からず。

【字解】【一】諸葛廟 卷十五(三二六頁)の「武侯廟」句解をみよ。【二】巴子國 ここは夔州をいふ。周の武王、殷を伐ちしとき巴人之を助けしにより後ち封じて巴子となす。古の巴國は東は魚復に至り、西は樊道に至り、北は漢中に接し、南は牂牁を擁む。夔州魚復縣は巴國の域内にあり。【三】竹日 竹林をてらす日光。【四】虛寂 人なき廟。【五】薄帷 うすきとばり。【六】共濟 共に天下をすくふ。【七】賢聖 賢臣聖君。【八】湖嶽 たすけいたたく。【九】先主 劉備。【一〇】并吞 中原の地方を合せんとする。【一一】出師 蜀の後主の建興五年、孔明魏を伐たんとして北に軍隊をいだす。卷十五(三二六頁)「武侯廟」詩をみよ。【一二】巫覡 女のみこ、男のみこ。【一三】醉蛛絲 原本に醉に作る、之に從ふ。綴は仇氏「杜臆」の改易によれるものなり。不都合といふべし。【一四】吟梁父 孔明が好みて梁父吟をなせしこと。已に屢見ゆ。

【題義】夔州にある諸葛孔明が廟にまゐりしことをよんだ詩。大曆二年の作か。

【詩意】自分ながらく巴子の國(夔州)に遊んで、たびたび諸葛武侯の祠にはひつてみる。いまみる竹林を照らす日光がだれも居らぬ廟へ斜にさしこみ、溪をわたつてくる風が薄いとばりに十分に吹いてゐる。孔明と其の主人先主(劉備)とは力をあはせて共に天下をすくふ事業にあたり、時を同じくして聖君賢臣が存在してゐた。孔明は身を先主に歸して之を戴きたすけ、北方を併吞するために晩年には更に軍隊を出しさへした。それが今は其の人をまつた廟内では、晝をかけた壁に蟲や蛇があなを明け、蛛のやじの懸つてゐるところで女巫男巫がおみきに酔うてゐる。このとき自分はふと孔明が平生梁父の吟を好んでなしたといふ話をおもひだす。あれをかんがへると自分などはここで身みづから耕作に従事したとてまだ遅くはない。

見螢火

螢火を見る

巫山秋夜螢火飛。巫山の秋夜に螢火飛ぶ。

疎簾巧入坐人衣。疎簾巧に入りて人衣に坐す。

忽驚屋裏琴書冷。忽ち驚く屋裏琴書の冷かなるに、

復亂簷邊星宿稀。復た亂る簷邊星宿の稀なるに。

卻遠井欄添箇箇。卻つて井欄を遠りて箇箇添はり、

偶經花藥弄輝輝。偶花藥を経て輝輝たるを弄す。

滄江白髮愁看汝。滄江白髮愁へて汝を見る、

來歲如今歸未歸。來歲如今歸るや未だ歸らざるや。

見螢火

【題義】 ほとるをみてよんだ詩。大曆二年秋の作。

【詩意】 巫山の秋の夜に螢火が飛ぶ。螢はまばらな簾からうまく室内へはひつてきて人の衣のうへにおちつく。さうかとおもふと屋中の琴や書物のつめたいのに急におどろいたものか、にはかにそとへとびだしてまたのきばのあたりにぼちぼちひかつてゐる星の光りにまぎれこんでしまふ。するとまた井の欄のまはりをとんで一箇一箇かすがふえ、或はふと庭樹の花葉のあたりをとほりながら得意らしくびかりびかりとしてゐる。自分は大江のそばで白髪をかかへて愁をおびながら汝を看る來年の今ごろには果して自分は故郷へかへれるやらかへれぬやら。

夜雨

夜雨

小雨夜復密。迴風吹早秋。

小雨夜復た密なり、迴風吹きて早く秋なり。

野涼侵閉戸。江滿帶維舟。

野涼閉戸を侵し、江滿維舟を帶ぶ。

通籍恨多病。爲郎忝薄遊。

通籍多病を恨む、郎と爲りて薄遊を忝くす。

天寒出巫峽。醉別仲宣樓。

天寒くして巫峽を出で、酔ひて別れむ仲宣が樓。

【字解】 〔一〕江滿 江水の量の十分になること。〔二〕維舟 繫舟に同じ。作者つれに出峽のため舟をつなぎ、客寓をさして雲舟といへり。〔三〕通籍 仕官のこと。已にみゆ。〔四〕爲郎 郎は檢校工部員外郎。〔五〕忝薄遊 薄遊はしばらく遊ぶなり。黃生が

注に浪遊ととき雨土に浪浪する意とみたり。それにては忝の字を解し得ず。薄遊の語は晉の夏侯湛が東方朔を禮序に本づく。序に朔がことなのべて、以爲濁世不可_レ以_レ富貴也、故薄遊以_レ取_レ位、といへり。この薄遊とは朔が避_レ世金馬門といへる如く朝廷に薄遊(ぶらつきながら)して下位をとりしことをいへるなり。作者郎に任ぜられつつ身は遠地に在るは朔が朝廷に薄遊するとおなじ。故に薄遊といふ。豐州に薄遊するにあらず、朝廷に於て薄遊するの意なり。〔六〕天寒 冬をいふ。〔七〕醉別 荆州に至らば更に荆州をばなれて故郷にかへらんとおもふなり。〔八〕仲宣樓 仲宣は魏の王粲が字、樓は荆州當陽縣にあり。卷十三(四〇頁)の句解をみよ。

【題義】 夜雨のをりの景情をのべた詩。大曆二年秋の作。

【詩意】 小さが夜になつてまたこまかにふり、吹きまはす風は早くも秋の節である。野らからくる涼しさは閉めてある戸を侵していきこみ、江水の量はつないである舟をのせたままいつばいになつてくる。自分は朝廷へ仕籍を通じてゐるが恨めしいことに多病である。そんな身で郎官となつて、かたじけなくも朝官であるがぶらぶらしてゐてもよいといふありがたいおもてなしをうけてゐる。そらが寒くなつたならば巫峽から出てしまひ、荆州について、そこでまた宴席で酔うて人人と仲宣樓から別れて故郷へかへりたいとおもふ。

更題

更に題す

只應踏初雪。騎馬發荆州。

只だ應に初雪を踏みて、馬に騎りて荆州を發すべし。

直怕巫山雨。眞傷白帝秋。

直だ怕る巫山の雨、眞に傷む白帝の秋。

羣公着玉佩。天子翠雲裘。
羣公着玉の佩、天子翠雲の裘。

同舍晨趨侍。胡爲淹此留。
同舍に趨侍す、胡爲れぞ淹しく此に留まるや。

【字解】(一) 着玉佩、禮記「玉藻篇に曰く、大夫佩水蒼玉、而純、(鄭玄曰く、純に作るべし)組紱、と。水蒼は玉色なり。(二) 翠雲裘、宋玉が風賦にみゆ。翠羽をあつめてつくりし裘なり。(三) 同舍、同舍の郎官、同僚。(四) 趨侍、殿中へ趨進し天子に侍す。

【題義】前篇「夜雨」の詩をつくりしのち、更にまたかきつけた詩。

【詩意】自分は初雪をふんでひたすらに馬にのつて荆州から出發すべきである。巫山の雨はおそれるところのものであり、白帝城の秋はほんにいたましい。(みやこのことを想像すると)多くの高官のひとたちは蒼玉を佩び、天子は翠雲の裘をおつけになり、同僚たちはあさはやくごてんへでて君のおそばにはんべるのである。それに自分はなんでこんなところにひさしく逗留してをるのであるか。

舍弟觀、歸藍田、迎新婦、送示、二首

舍弟觀、藍田に歸りて新婦を迎ふ、送りて示す 二首

汝去迎妻子。高秋念卻回。
汝去りて妻子を迎ふ、高秋卻回せむことを念ふ。

即今螢已亂。好與雁同來。
即今螢已に亂る、好し雁と同じく來れ。

東望西江永。南遊北戸開。
東望すれば西江永し、南遊北戸開かれむ。

卜居期靜處。會有故人杯。
卜居靜處を期す、會有故人の杯有らむ。

【字解】(一) 舍弟觀、卷十八にみゆ。觀さきに夔州に來りしなり。(二) 藍田、長安の南の縣の名。(三) 念卻回、仇氏は弟が念ふととく、余は作者が念ふとみる。卻回は長安につきしのちこちへたちかへるをいふ。(四) 西江水、西江は蜀の江をいふ。(五) 南遊、觀が南方に來遊するをいふ。(六) 北戸、北向きの戸、荆州はあつき故に北に戸口を設くるなり。(七) 靜處、閑靜なるばしよ。仇氏は作者荆州に居を卜する意ありといへり。(八) 故人、荆州における舊知の人人。

【題義】家弟觀が藍田縣へかへつて新婦を迎へるときにそれを送り且つ之にみせた詩。大曆二年夏の作ならん。

【詩意】汝はここから妻子を迎へにゆく、自分は今から秋になつたらおまへがもどつてくることを念うてゐる。いまは螢がはやみだれとんでゐる、どうか雁といつしよにこちらへかへつて來るやうに。自分は東のかたおまへのゆくてをみやると大江の水が永くながれてゆく、おまへが南へやつてくるときは北むきの戸をあけて待つてゐよう。じぶんのすむところは靜かな處をと待ちまうけてゐる。そこにはきつとじぶんばかりでなく舊知の人人の歡迎の酒杯もあることであらう。

(一)

(二)

楚塞難爲路。藍田莫滯留。
楚塞には路を爲し難し、藍田に滯留する莫かれ。

舍弟觀歸藍田迎新婦送示二首

衣裳判白露。鞍馬信清秋。衣裳白露に判す、鞍馬清秋に信す。

滿峽重江水。開帆八月舟。滿峽重江の水、開帆八月の舟。

此時同一醉。應在仲宣樓。此の時間じく一醉するは、應に仲宣が樓に在るなるべし。

【字解】【一】楚塞。楚地の關塞、湖北地方はむかしの楚地なり。【二】蘇爲路。一種の特例用法なり。蘇爲水・蘇爲情等の語法あり。其のものが其のものたるを得ざるをいふ。こは險路をいふ。楚塞は路が險なるゆゑに他の路は之に比しては險路とはなり得ざるなり。海を渡るものには蘇爲水とは海水は多量なるゆゑ、他の水は之に對してはとも水とはなりがたし、水たるの資格なしとの義となる。他は類推すべし。【三】衣裳二句。觀の歸途についていふ。【四】判白露。判は拵なり。已にみゆ。「棄て身になる」の意。白露にいくら衣裳をぬらさうとかつてにせよといふ心になるをいふ。「まかす」といふほどの意とみて可なり。【五】鞍馬。觀ののる馬。【六】滿峽。水のみてる峽。【七】重江水。顧注に云ふ、北江・中江・大江の水みな峽中にあつまる故に之を重江といふ。と。重とは立體的に水がかさなるをいふ。此の句と次の句とは自己についていふ。【八】此時。會館のその時をさす。【九】仲宣樓。已にみゆ。

【詩意】楚塞の路は險阻で他の路はいふに足らぬほどのものではあるが、おまへは藍田などに滞在してゐてはならぬ。いくら衣裳が白露にぬれやうとかまふことはない、清秋になつたら鞍馬にまかせてもどつてくるがいい。自分はをりかさなつて峽中いつばいになれる江水に乗じて八月にここから出帆するであらう。さうしておまへといつしよに酔ふのはそれは荆州の仲宣樓に於てすることになるであらう。

別李秘書始興寺所居 李秘書が始興寺の所居に別る

不見秘書心若失。秘書を見ざれば心失。へるが若し、

及見秘書失心疾。秘書を見るに及べば心疾を失ふ。

安爲動主理信然。安は動の主たりとは理は信に然り、

我獨覺子神充實。我獨り覺ゆ子が神充實するを。」

重聞西方止觀經。重ねて聞く西方の止觀經、

老身古寺風泠泠。老身古寺に風泠泠たり。

妻兒待米且歸去。妻兒米を待たむ且つ歸り去らむ、

他日杖藜來細聽。他日藜を杖いて來りて細かに聽かむ。」

【一】西方止觀經。西方は印度をいふ。止觀經は摩訶止觀なるべし。黃希曰く、摩訶止觀凡十卷、陳隋の間に國師天台の智者の説く所なりと。明の楊慎が曰く、佛經に云ふ、止は能く樂を捨て、觀は能く苦を離れしむ、又云ふ、止は能く心を修め、能く食愛を斷たしめ、觀は能く慧を修め、能く無明を斷たしむ、と。止は「定まりてのち靜」なるが如く、觀は「慮りてのち得る」がごとし、と。(譯者曰く、定靜・慮得は「中庸」の語)。作者、秘書に就きて佛教の止觀の理をききしなり。【二】風泠泠。泠泠はつめたきさま。宋玉が風賦に清泠泠とみゆ。

【題義】李秘書(排行第十五の人)が始興寺の住居に別る詩。大曆二年の作なるべし。

別李秘書始興寺所居

【字解】【一】李秘書。二人あり、一は李十五、一は李八、これなり。黃鶴が注に此詩は李十五に別るものなるべしといへり。作者已に十五に「奉寄李十五文巖」二首、「贈李十五丈別」詩あり。李八に關しては卷十七に「贈李八秘書別」三十韻、及び次の篇「送李八秘書赴杜相公幕」詩あり。併せ看よ。【二】始興寺。夔州にある寺とみゆ。【三】安爲動主。安靜は活動の主たり。佛經の經理なるべし。【四】子。李秘書をさす。

【詩意】 自分は秘書を見ないと氣ぬけがした様であり、秘書を見ると心に病氣があつても病氣がなく
なつてしまふ。あなたは「安靜は活動の主人だ」といはれるがなるほど道理はさうであらう。自分は
自分の知つてゐる人人のうちであなただけは精神充實してゐる様におもはれるのである。ここへ来て
二度ふりに西方の止觀經の道理をきいてゐると、このふる寺で老の吾が身につめたい風が吹く。だが、
家のことをおもひだすと妻や兒どもは米を待つてゐるだらうから自分はしばらくたちかへりませう。い
づれ日をあらためてあかざの杖をついてまゐりまたくはしくうけたまはりませう。

送李八秘書赴杜相公幕 【原注】相公朝謁今赴後期也。

李八秘書が杜相公の幕に赴くを送る 【原注】相公朝謁す、今後期に赴くなり。

青簾白舫益州來。 青簾白舫益州より來る、
巫峽秋濤天地迴。 巫峽の秋濤天地迴る。
石出倒聽楓葉下。 石出でて倒に聽く楓葉の下るを、
櫓搖背指菊花開。 櫓搖きて背に指さす菊花の開くを。
貪趨相府今晨發。 相府に趨くを貪りて今晨發す、

【字解】 〔一〕 李八秘書 前篇の
句解と卷十七「贈李八秘書別」三十韻
詩とを併せて看よ。 〔二〕 杜相公 杜
鴻漸。平章事を以て山劍副元帥を領
す、故に相公といふ。 〔三〕 相公朝
謁 大曆二年六月戊申、劍南節度使
杜鴻漸入朝す。時に李秘書を詳して

恐失佳期後命催。 恐る佳期を失ひて後命の催さむことを。

南極一星朝北斗。 南極の一星北斗に朝す、

五雲多處是三台。 五雲多き處是れ三台。

幕に入らしむ。 〔一〕 赴後期 後期
とは期限におくるをいふ。後期に
赴くとは期限におくれたから、おそ
まきながら追ひつく爲にゆくこと。
〔二〕 青簾白舫 青すたれなかけ、白

くぬりたる船、官船なり。 〔六〕 益州 成都をいふ。 〔七〕 天地迴 なみの勢さかんにして天地も之がために回轉するかとうたがは
る。 〔八〕 倒聽 石上におつるおとを下から仰ぎてきくをいふ。 〔九〕 背指 水流はやきにより今岸傍にみしもの忽ちに背後となる、
故に背方に之を指す。 〔一〇〕 相府 相公の幕府。 〔一一〕 失佳期 即ち原注の後期なり。 〔一二〕 後命 のちの命令、早く來れとの二
度めの命令をいふ。 〔一三〕 南極一星 李秘書をたとへていふ。 〔一四〕 朝北斗 北斗星は長安城をたとへていふ。 〔一五〕 五雲 五色
のくも。 〔一六〕 三台 上台・中台・下台、星座の名、北斗星の傍にあり。三台は三公の象、杜相公の位をさす。

【題義】 李秘書（排行第八の人）が宰相杜鴻漸公の幕府へと、おくればせながら赴くのを送つた詩。
大曆二年九月の作ならん。

【詩意】 青簾白舫の官船が益州から來て峽をくだらうとする。巫峽の秋の濤は壯大で天地も爲めに回
轉させられるほどである。旅人は石が横さまに突きでてゐるから楓葉がおちるのを下から倒に聽き、
櫓をうごかしてすぎるときは今前面に咲いてゐたとおもふ菊花をにはかに背面に指すことであらう。
あなたはこんな船旅をされるのだが、早く幕府におひつかうとてけさ出發される。それは期限をあや
まつてまた催促の命令がきはせぬかと氣づかはれてのことである。あなたの北行は南極星が北斗星に

朝する様なものだ。北斗のそばの三台は五色の雲が多く横はつてゐる。そこが宰相の居られるところだ。

巫峽敝廬奉贈侍御四舅別之禮朗

巫峽の敝廬にて、侍御四舅が別れて禮朗に之くに贈り奉る

江城秋日落。山鬼閉門中。江城秋日落つ、山鬼閉門の中。

行李淹吾舅。誅茅問老翁。行李吾が舅淹し、誅茅老翁を問ふ。

赤眉猶世亂。青眼只途窮。赤眉猶は世亂、青眼只だ途窮。

傳語桃源客。人今出處同。傳語す桃源の客、人は今出處同じ。

【字解】 〔一〕 巫峽敝廬 漢西の宅をいふ。〔二〕 侍御四舅 侍御史の官にて母方のをちなる排行第四の人、崔某なり。〔三〕 禮朗 湖南にある州の名、禮州は岳州府に屬し、朗州は常德府なり。即ち武陵の桃源の在る所なり。〔四〕 山鬼 屈原の九歌に「山鬼」あり、山すみの男のことをいふ、借用して自己を比す。〔五〕 誅茅 かやを刈りて屋を結ぶこと、漢西の居宅をさす。誅茅宋玉之宅と庾信が小園賦にみゆ。〔六〕 赤眉 後漢の光武の時の賊軍、崔杼の亂に比す。〔七〕 青眼 途窮 竝に阮籍が故事。已にみゆ。こゝは蓋し他人が自己を青眼を以て迎へてくれることをいふ。〔八〕 人今 人とは自己をさす。〔九〕 出處同 出處は進出と退處と、自己の出處は桃源の人が棄の亂世を避けしとおなじ。自己も隱退してなるをいふ。

【題義】 巫峽のあばらやで排行第四の母かたのをち侍御史崔某君が禮州・朗州へゆかれるのに贈つた詩。大曆二年秋、漢西にての作。

【詩意】 江ぞひの城に秋の日が落ちて、山鬼同様な自分は門を閉めてゐる。そのときしばらく使者としてここに滞留してをられた吾が舅は茅屋にすんでゐるこのおやちを訪問してくれられた。いま世のなかはまだ赤眉の賊の様なものがあつて亂れてをるし、自分は他人から必ずしも白眼で迎へられず、青眼で迎へられてゐるがそれでゆくさきがつまつてゐる。あなたは桃源へゆかれたならばその人人にことづてをしてくださいなれよ、「自分の今はその出處のさまは諸君と同じことである」と。

孟氏

孟氏

孟氏好兄弟。養親惟小園。孟氏は好兄弟、親を養ふ惟だ小園。

承顏胼手足。坐客強盤飧。顔を承けて手足胼なり、客を坐せしめて強ひて盤飧せしむ。

負米夕葵外。讀書秋樹根。米を負ふ夕葵の外、書を読む秋樹の根。

卜隣近舍。訓子學誰門。卜隣近舍を慚づ、訓子誰が門にか學ばむや。

【字解】 〔一〕 孟氏 詩中にみゆる孟氏の十二・十四兄弟をいふ。卷二十一に、七月一日過孟十二會曹・十四主簿兄弟詩あり、又た孟

巫峽敝廬奉贈侍御四舅別之禮朗 孟氏

倉曹領酒漿二物云云詩「登孟十二倉曹赴東京選」詩「孟孟倉曹將書寫土妻蒼莊」詩等あり。【二】承頌 親の顔色をうけその氣に在る様にする。【三】耕 皮の堅くなること、「たこ」をでかす。【四】負米 子路貧しき時親のために米を千里の外に負ふ。孔子家語・韓詩外傳等にみゆ。【五】夕葵外 夕膳に葵を供するほかに。【六】ト隣情近舎、調子學誰門 仇氏は自己が隣をトして孟氏の近くにすむははづかし、孟氏の門を會きては子を調ふるに他にだれの門にもまなぶべきものなし、とときたり。此の説余は取らず。鄭見次の如し、ト隣とは孟氏が作者のとなりにすみしをいふ。「左傳」に云ふ、非宅是ト、惟隣是ト、と。近舎とは孟氏の家が自己の舎に近きをいふ。調子云云は孟氏がその子を調ふるについて杜家の風を學ばんとて近くに來り住みしも我が家はさほどの家にあらざればだれの家の風をまなばんとおもはるるぞと謙遜していふなり。

【題義】孟氏の兄弟の孝友をのべた詩。大曆二年秋の作。

【詩意】孟氏はいい御兄弟であつて、ただちひさな園で親を養うてをられる。親のごきげんをそこなはぬ様にしてはたらいで手足に「たこ」をでかし、お客を迎へて坐らせては無理にも食事の御馳走をする。また親の夕の膳に葵のおかずをおそなへするほかに昔の子路の様子に米を遠くまで負ふほどの力を盡し、秋の樹木の根にやすんで書物をよんだりしてゐる。あなたがたが隣をトして自分の家のちかくをえらんで住まはれたことは自分にはづかしいとおもふ。あなたがたはわたしの近所へこられたところで子を調ふるにつけて誰の家門から學ばうとなされるのであるか。(わたしの子は愚でなにもわたしの方からおまなびになることはありませんまい。)

吾宗 【原注】衛倉曹崇簡。

吾宗 【原注】衛の倉曹崇簡。

吾宗老孫子。質朴古人風。

吾が宗の老孫子、質朴古人の風。

耕鑿安時論。衣冠與世同。

耕鑿時論に安んじ、衣冠世と同じ。

在家常早起。憂國願年豐。

家に在りては常に早く起き、國を憂へて年の豊なるを願ふ。

語及君臣際。經書滿腹中。

語りて君臣の際に及ばば、經書腹中に滿つ。

【字解】【一】吾宗 同宗、同じ祖先からでたもの、崇簡も作者も共に襄陽の杜氏より出づ。卷十八に「寄從孫崇簡」詩ありたり。

【二】孫子 姪孫、いとこの子ないふ。【三】耕鑿 田を耕し、井をうがつ。「莊子」に、耕田而食、鑿井而飲、とみゆ。【四】安時論 時論とは同時の世論なり。仇氏云ふ、時論、崇簡を目して耕鑿中の人となす、彼亦之に安んず、と。【五】願年豐 倉曹參軍なれば米の多きをねがふなり。【六】滿腹中 後漢の鄭隆は腹中の書を讀し、邊讓(孝先)は邊孝先、腹便便、五經簡、といはる、みな經書腹中に滿つるものなり。

【題義】自己の同宗たる杜崇簡がことをのべたり。黃鶴は之を大曆元年におく、仇氏は二年の作とす。

【詩意】自分と同宗の老いたる姪孫(崇簡)は質朴で古人の風がある。世論は彼を耕鑿してたべてゐる人物といふが、彼もその評に安んじてをり、しかし衣冠は世間なみに一般と同じやうなものをつけてゐる。彼は家にゐるときはいつも早く起き、國家のことをうれへては年がらの豊作であることをねがうてをる。もし話が君臣關係のことに及ぶと、彼の腹の中は經書でみたされてゐることが知られ、

まことにただし道理をのべる。

奉酬薛十二丈判官見贈

薛十二丈判官が贈らるるに酬い奉る

忽忽峽中睡。悲風方一醒。

忽忽として峽中に睡る、悲風方に一醒す。

西來有好鳥。爲我下青冥。

西來好鳥有り、我が爲に青冥より下る。

羽毛淨白雪。慘澹飛雲汀。

羽毛白雪淨く、慘澹雲汀に飛ぶ。

既蒙主人顧。舉翮唳孤亭。

既に主人の顧を蒙る、翮を舉げて孤亭に唳く。

持以比佳士。及此慰揚舲。

持して以て佳士に比す、此の揚舲を慰むるに及ぶ。

清文動哀玉。見道發新硎。

清文哀玉動く、見道新硎より發す。

欲學鷗夷子。待勒燕山銘。

學ばむと欲す鷗夷子、勒せむと待つ燕山の銘。

誰重斬邪劍。致君君未聽。

誰か重んぜむ斬邪の劍、君を致すも君未だ聽かず。

志在麒麟閣。無心雲母屏。

志は麒麟閣に在り、雲母の屏に心無し。

卓氏近新寡。豪家朱門局。

卓氏近ごろ新に寡なり、豪家朱門局す。

相如才調逸。銀漢會雙星。

相如才調逸なり、銀漢雙星會す。

客來洗粉黛。日暮拾流螢。

客來りて粉黛を洗ふ、日暮流螢を拾ふ。

不是無膏火。勸郎勤六經。

是れ膏火無きならず、郎に勸めて六經を勤めしむ。

老夫自汲澗。野水日泠泠。

老夫自ら澗に汲む、野水日に泠冷たり。

我嘆黑頭白。君看銀印青。

我は嘆す黒頭の白きを、君は看む銀印の青きを。

臥病識山鬼。爲農知地形。

臥病山鬼を識る、農と爲りて地形を知る。

誰矜坐錦帳。苦厭食魚腥。

誰か矜まむ錦帳に坐するを、苦だ厭ふ魚腥を食

東西南兩岸坼。橫水注滄溟。

東西南兩岸坼く、橫水滄溟に注ぐ。

碧色忽惆悵。風雷搜百靈。

碧色に忽ち惆悵す、風雷に百靈を搜む。

空中右有白虎。赤節引娉婷。

空中に白虎右有り、赤節娉婷を引く。

自云帝季女。嘔雨鳳凰翎。

自ら云ふ帝の季女なりと、雨を嘔く鳳凰の翎。

襄王薄行跡。莫學令威丁。

襄王行跡薄し、令威丁を學ぶ莫れと。

千秋一拭淚。夢覺有微馨。

千秋一たび涙を拭ふ、夢覺めて微馨有り。

人生相感動、金石兩青燹。

人生相感動す、金石兩に青燹たり。

丈人但安坐、休辯涓與涇。

丈人但だ安坐せよ、辯するを休めよ涓と涇と。」

龍蛇尙格鬪、灑血暗郊坰。

龍蛇尙は格鬪す、血を灑ぎて郊坰暗し。

吾聞聰明主、治國用輕刑。

吾聞く「聰明の主は、國を治むるに輕刑を用ふ。

銷兵鑄農器、今古歲方寧。

兵を銷して農器を鑄、今古歲方めて寧し」と。

天王日儉德、俊父始盈庭。

天王日、に儉德、俊父始めて庭に盈つ。

榮華貴少壯、豈食楚江萍。」

榮華少壯を貴ぶ、豈に食はむや楚江の萍。」

【字解】

【一】薛十二丈判官。其の人詳ならず。豐州に客寓せしものなるべし。【二】忽忽。うつとり。【三】好鳥。鶴の類をいふ。薛をたとへていふ。【四】推遷。ものがなほしきさま。高く飛ぶ能はざればなり。【五】雲汀。雲のよこたはるみぎは。【六】主人。地の主人ならば府の都督。州の刺史はみなこれなり。都にて薛を後援してくる人も亦主人といひ得べし。事實を知らざれば解し難し。【七】暖孤亭。暖は鶴のなかり、孤亭は薛の居處をいふ。【八】持以。持とはこの鳥を用つての意。【九】住士。よき人物、薛をいふ。【一〇】及此。此の云云にまにあふ。【一一】揚給。給は贖戸ある船、揚給は水上に船を揚げて出發せんとするをいふ。作者の出映の際なるをいふ。【一二】清文。薛の清らなる文章。【一三】勳哀玉。哀れな佩玉の音をさせる際なるをいふ。【一四】見道。道理を見めす。【一五】發新硯。硯はといし、刀刃若し新發。於硯は「莊子」にみゆ。といしから出したての機だとは刀刃のきれあちのよさをいへる語なり。こゝは文章の道を示すこと鮮明なるをいふ。【一六】烏夷子。越の范蠡が異名。蠡功成りて五湖に泛びて去り名を變す。高階勇退のさまをいふ。【一七】待物。ほりつけんとす。【一八】燕山銘。後漢の班固、寶璽に從ひて北征し、燕然山の銘を作りて意が

功を記す。【一九】新邪劍。邪侯の臣を斬る劍、朱雲が請へる尙方の劍のごときをいふ。卷十八の折衝行をみよ。【二〇】致君。君を堯舜の地位に致すをいふ。【二一】君未聽。君は時の天子。【二二】麒麟閣。閣に功名を畫かるをいふ。【二三】雲母屏。漢の元帝のとき趙飛燕、后となる。女弟趙昭儀之に雲母の屏、琉璃の屏風を遺る。雲母屏はきらら張りのついたてなり。婦人間中の用品なり。【二四】卓氏。漢の卓王孫の女文君、嫁してのち少くして寡となる。司馬相如琴歌を以て之を挑み遂に之を娶る。【二五】朱門扇。扇はとさす、門を閉ちて居るをいふ。【二六】相如。司馬相如、上にみゆ。【二七】才調逸。才能のひいでたること。上の琴歌にて卓文君を挑みしこととをさす。【二八】銀漢會雙星。雙星は牽牛星と織女星をいふ。會すとは卓氏と司馬相如とが結婚せし如く薛が新寡の富家の女と婚せしをいふ。【二九】客來。薛の家に客のくるとき。【三〇】洗粉黛。薛の新婦がおしろい、まゆすみを洗ひおとす。べたべた化粧などをなすりふりにかまはぬをいふ。暗に後漢の孟光が事を用ふ。【三一】拾遺盤。晉の車胤が螢をあつめてその光にて書を読みし事を暗に用ふ。【三二】香火。あぶらの火、燈火をいふ。【三三】勳郎。郎はわかき夫、薛をいふ。【三四】六經。易・書・詩・禮・春秋・樂等の經典。【三五】「欲學」より此の句までは薛が詩意を致したり。【三六】老夫。自己をいふ、此の句より「有微響」までは作者の自述なり。【三七】「秋水の音」。【三七】君看銀印青。上句の我嘆と此の句の君看は語をかへしのみ、黒頭白と銀印青とは共に自己についていふ。銀印青は「秋日聖府詠懷」詩の雲雨銀章澗の銀章澗の意、青はさびて青くなるをいふ。之を銀印青綬を引きて解くは謂れなき説なり。【三八】山鬼。山鬼は山男、前にみゆ。【三九】誰種。種は憐情なり。【四〇】錦帳。尙書郎は宿直するときは官より錦帳を供す。【四一】食魚鯉。鯉字は諸本原に作る、從ふべし。魚腥はなまきさきかな。南方の食なり。【四二】東西。西は南の誤字。東南とは作者の居宅よりみていへる方位。【四三】兩岸坊。兩岸とは糧唐の兩岸をいふならん。【四四】橫水。横溢せる水。【四五】碧色怨惆悵。不備の句。水の碧色をみて自己うちめしくおもしろいをいふ。【四六】搜百寶。百寶は諸神羣仙。搜はさがし求むるなり。【四七】右白虎。仇氏「禮記」の左青龍右白虎を引く、浦氏は右は右の誤なりとせり。浦氏に従ふ。【四八】赤節。あかきはた。【四九】錦綉。わかくうつくしき貌。【五〇】帝季女。帝は天帝。水經注にいふ、宋玉謂ふ、天帝の季女、名を姮妃と曰ふ、巫山の妻に封せらる、と。【五一】噴雨。噴は水を噴くこと。樂巴といふもの酒を噴きて雨となし、成都の火を滅せしとの話「神仙傳」にみゆ。【五二】風風側。側は側ばれなり。風風は秦の穆公の女弄玉が事を暗用す。【五三】襄王薄行跡。襄王は巫山の神女と會す。仇氏薄とは疎の義なりとす。行跡はあしあと。あ

しあつと疎なりとはめつたに來ぬこと、情の冷淡なるをいふ。【五】合感丁 丁令威を倒用す。丁令威去りて千年にして鶴となりて遼東城の華表にかへる。已にみゆ。「自云」以下四句に於て、「帝季女」と、「襄王」二句は天女の語、「噴雨」一句は地の文なり。【六】有 復 天女と會せしことゆふ、別れて夢さめしものちにかなりあり。【七】人生相感 此の句以下薛にいふ語。主として男女間の情についていへるものならん。【八】金石兩青炎 青炎は青く深らかなることにて色をいふ語なり。班固が西都賦に琳琅青炎とみゆ。この青炎の二字は楚韻なり。杜甫と雖も免れず。句意はたゞ金石の如く堅きをいふなり。【九】文人 長者の稱、薛をさす。【一〇】渭與涇 渭水は清く涇水は濁る、かりて清濁をいふ。薛、作者に詩をよせて寡婦を娶りしことについて辯解せしとみゆるなり、よりていふ。【一一】龍蛇尙格闘二句 仇氏云ふ、時に吐蕃、鄆州に寇し、京師戒嚴す、故に云ふと。王師を龍に、吐蕃を蛇に比す。【一二】鄭別 長安の野外をいふ。【一三】歲方寧 一歳に於て人民の居はじめてやすらかなるを得るをいふ。【一四】天王 一に文王に作る、文王とは文德ある天子。【一五】俊父 すぐれたもの、賢しきもの。【一六】登庭 庭は王庭。【一七】楚江津 楚の昭王、江を渡るに一物あり、大さき斗の如く圓くして赤し。之を取りて孔子に問ふ、曰く、此、萍實なり、と。「孔子家語」にみゆ。作者靈州に客居してかかるものを食す。

【題義】判官薛某が詩を贈つてくれたのにこたへた詩。黃鶴注に大曆二年秋東屯にての作とせり。東屯か漢西かは明かならず。此の篇杜詩難解の作の一なり。鄙見によつて解く。

【詩意】自分はうとうとと峽中に睡つてゐたところが、悲しげな風が吹いてきてはじめて夢をさました。みると西の方から好い鳥がきて自分のために青冥からおりてきた。その羽や毛は白い雪の様にさよらかだが雲のゐる汀になしげに飛んでゐる。やがてその鳥は主人からめをかけられるやうになつたので、翮をあげて一つの亭のところまで鳴きたてた。此の鳥を以てあるいい人物にたとへてみる。

それでやつと自分の今の出船の用意をして峽を下りかけてゐるころもちを慰めることができる。あなたの清らかな文章はあはれな玉がなりだした様であり、道理をはつきり示してゐることは刀がいとぎだされたばかりといふ様に鮮明である。あなたのいふ所をきくと、軍務に従つて燕然山の銘を石にほりつけることを待ち、功成つたあとは五湖に泛び去つた鴟夷子でもまなばうとする。また當世には邪佞の臣を斬る剣を重んずるものはない。君を堯舜に致さうとしても君は其の志あることをまだきいてはくたさぬ。自分の志は麒麟閣上に畫かれることに在つて、めめしく雲母の屏障の中にこもつてゐる様な心はまたぬ、等ともいうてをられる。(なほまた文面によると)このごろ卓文君があらたにやもめになつて豪家で朱門ふかくとちこめられてゐた、そこへ才調のすぐれた司馬相如がきてとうとう文君を挑んで天の河の牛女二星の様に會合をしてみました。新婦は賢婦人でお客がきたときにはおしろいや眉すみを洗ひおとし、日のくれには螢を拾ひあつめる、それは燈の膏がないためでなく、わかひ夫に六經を勉強してよませるためである。と、かやうのはなしである。老夫はここで自分で岩間に水を汲む、野らの水は日に日に冷冷となつてゐる。わたくしは黒髪が白くなつたことをなげく、そのうへあなたはわたくしの銀印が青さびになつたことをみられるだらう。わたくしは病にふして山鬼を知り、百姓をして地形をこころえた。自分はみやこにをれば錦帳のうちに坐することのできる郎官であることを誰が氣の毒におもうてくれようか。自分は南でのくさい魚をたべる生活はひ

どくきらひになつた。」自分の宅の東南では兩崖がさけてゐる、そこから十分にあふれた水がひろうみへとながれそそぐ。この水の碧の色をみて自分は忽ちものがなくなつた。なせかといへばにはかにそこに風雷がおこつて、自分はそのなかにさまさまの神靈をさがしもとめた。すると空中には白虎がをり、赤い節がうつくしい天女をみちびいてゆく。その天女のいふに、「自分は天帝の季つこのむすめである」と。さうしてのつてゐる鳳凰の羽に霧の雨をふきかけてゐる。彼の女はまたいふ、「自分のあひての楚の襄王はあれからめつたにあしあとをみせぬ。おまへは千年たつてやつと一度家へかへる様な遠東の丁令威のまねをしてはならぬ」と。かういうて彼の女は千年めにいちどつもる恨をならべたかのように涙をぬぐうた。それは夢であつたが、夢がさめてからもあたりにかすかなかをりがまたのこつてゐた。(自分にもこんな夢をみたことがあつた)。人生といふものは意氣相感動するものであつて、その際には彼我が堅き交情は金石のごとくともに青くかがやいてゐる。だから丈人もただおちつておすわりなさい。渭水が清んでゐるか涇水が濁つてゐるか、そんなことをかれこれ辯ずるにはおよばぬのである。」いま天下には龍蛇がまだたかかうたがひに血をそそぎ、みやこの野外はくらくとざされてゐる。自分は聞くに、聰明なる人主は國を治めるに軽い刑罰を用ひ、武器をとかして農具を鑄る、それではじめて古今とも歳居の安寧を得るのである、と。いま天子はひびに儉徳をおまもりになり、俊賢の人物がやつと君のひろまへに満ちる様になつた。だから榮華を得ようとするなら少壯のうちだ。自分の様に楚江の萍などたべて南方に留滞してゐてはならぬ。はやく出でて明君に仕へるるがよろしい。」

寄狄明府博濟

狄明府博濟に寄す

梁公會孫我姨弟、
 不見十年官濟濟。
 大賢之後竟陵遲、
 浩蕩古今同一體。
 比看伯叔四十人、
 有才無命百寮底。
 今者兄弟一百人、
 幾人卓絕秉周禮。
 在汝更用文章爲、

寄狄明府博濟

【字解】 一 狄明府博濟 狄博濟は姓名。明府は縣令の敬稱、詩中に鳳泊岷廣間の語あれば蜀地の某縣の縣令たりしとみゆ。二 梁公 狄仁傑なり。武后の朝に天下を保持せし功あり。事は後にみゆ。仁傑は聖曆三年に卒し、中宗位に即くや司空を贈り、睿宗之を梁國公に封す。因つて梁公といふ。三 會孫 一子。四 姨弟 母の姉妹の子をいふ、作者よりいへば母方のいとこなり。五 十年 乾元元年より大曆二年までにて十年なり。六 濟濟

長兄白眉復天啓。長兄は白眉復た天啓なり。
 汝門請從曾翁說。汝が門請ふ曾翁より説かむ、
 太后當朝多巧詆。太后朝に當るとき巧詆多し。
 狄公執政在末年。狄公政を執る末年に在り、
 濁河終不汚清濟。濁河終に清濟を汚さず。
 國嗣初將付諸武。國嗣の初將諸武に付す、
 公獨廷諍守丹陛。公獨り廷諍して丹陛を守る。
 禁中決策請房陵。禁中策を決して房陵を請ふ、
 前朝長老皆流涕。前朝の長老皆涕を流す。
 太宗社稷一朝正。太宗の社稷一朝に正し、
 漢官威儀重昭洗。漢官の威儀重ねて昭洗す。
 時危始識不世才。時危くして始めて識る不世の才、
 誰謂茶苦甘如薺。誰か茶を苦しと謂ふ甘きこと薺の如し。

威儀多き貌、高官の様子なり。語は詩經にみゆ。【七】大賢。梁公をさす。【八】後。子孫。【九】跋。次節にひくくなる。表微をいふ。【一〇】浩蕩。大なる貌、時間の長きをいふ。【一一】同一體。かはらざるをいふ。【一二】伯叔。伯叔父の列にあたるもの。【一三】兄弟。いとこあひまでをふくむ兄弟。【一四】乘周禮。左傳に、魯嗣乘周禮、未可動也、とみゆ。周の禮をとり守り行ふをいふ。ここは蓋し唐の王朝に立ちて王禮を行ふをいふ。【一五】汝。博濟。【一六】更用文章爲夏。爲能用。文章の意、文章をよく用ふる人なりとの意。【一七】長兄。博濟の第一の兄、名は不詳。【一八】白眉。すぐれしをいふ。蜀の馬良、字は季常、兄弟五人、並に才名あり、誰に曰く、馬氏五常、(常の字のつくもの五人)、白眉最良、と。馬良は眉に白き毛ありしといふ。【一九】天啓。天之をひらく、天賦に本づくをいふ。【二〇】汝門。門は家門。【二一】曾翁。曾祖父、即ち梁公。【二二】太后當朝。明天武后、朝政に當り、唐の國號を周と改めたり。【二三】多巧詆。詆の字、もと計に作る、楊慎その韻字に在らざるを以て詆と改む。外部の者が武后をそしりたるをいふ。巧の字をそしは武后の爲に輪曲にいひしものなり、本來そしるたれが無いのにうまくこれあげてそしつた、とつくろひて言ひなしたるなり。實際は武后は唐の天下を奪ひしものなれば、唐よりいはずを奪ひしものなれば、唐よりいはず

汝曹又宜列鼎食。汝が曹又た宜しく鼎を列して食し、
 身使門戶多旌檠。身門戸をして旌檠多からしむべし。
 胡爲飄泊岷漢間。胡爲れぞ岷漢の間に飄泊して、
 干謁侯王頗歷抵。侯王に干謁して頗る歴抵するや。
 況乃山高水有波。況んや乃ち山高くして水に波有り、
 秋風蕭蕭露泥泥。秋風蕭蕭露泥泥たり。
 虎之饑下巉岫。虎の饑うる巉岫より下り、
 蛟之橫出清泚。蛟の横なる清泚より出づるをや。
 早歸來。早く歸り來れ、
 黃土汚衣眼易眯。黃土衣を汚し眼眯はされ易し。

餘惡といふべし。【二四】狄公。仁傑。【二五】末年。武后の末年。【二六】濁河。清濟。にこれる黃河、すめる濟水、濟水は山東兗州に出づ。【二七】國嗣。唐國をつぎしもの、周をさす。【二八】初將。周初の武將。【二九】諸武。多くの武氏一門のもの。【三〇】公。梁公。【三一】延壽。朝廷で諍諍する。【三二】丹陛。殿中御座のあかぬりのきざし。【三三】禁中。朝廷のうち。【三四】決策。はかりごとをさめる。【三五】請房陵。房陵は中宗をいふ。武后唐を承めて周とし、中宗を廢して廢陵王となし之を房州に通し、武三思(后の姪)を

以て太子となさんと欲す。仁傑しばしば諫め且つ曰く、子母と姑姪といづれが親しき、もし三思を立てなば前には姑を附（木主を合祭すること）せずと。后、悔悟し、即日中宗を迎へて宮に還らしむ。と。【三六】漢官威儀 漢は借りて唐をいふ。【三七】明暹 暹羅の側用、けがれをあらひさり光明を復するをいふ。【三八】不世才 不世出の才、三十年ごとくあらぬにきつと出るとはきまらぬほどの人。【三九】誰謂茶苦甘如蜜 誰謂茶苦 其甘如蜜、と詩經に鄭風各風篇にみゆ。茶は「にがなし、蜜は「なづなし。梁公が親善をいとほざりしをいふ。【四〇】列御食 罪を多くならべて煮炊きして食するは美食するなり。【四一】旌榮 旌はほた、何かをそれによりて表彰す。榮は赤黒の黼をつけた載なり。三品以上の官は門に榮戟を列す。【四二】紙漢 岷山・江漢の水、蜀地にあり。【四三】干闥 求むる所あつて調する。【四四】侯王 地方の長官などないふ。【四五】歷抵 抵の字もと派に作る。錢氏抵に改む、諸本之に依る。抵の字是なり。歷抵とは一一その門に至り調するをいふ。【四六】泥泥 露の濡ふ貌。【四七】曉島 たかきいはほ。【四八】清批 批は水清し。

【題義】 秋仁傑の曾孫で蜀の某縣の縣令であつた博濟に寄せた詩。大曆二年夔州にての作。

【詩意】 あなたは秋梁公の曾孫でわたくしの母方のいとこであるが、十年のながいあひだにあなたが威儀をそなへたりつばな朝官となられたのをみうけぬのである。梁公の様な大賢人の子孫たる者がつひにかく衰微してをるとは、ひろく古今をみわたすといつもかはらぬすがたでなげかほしいことである。このごろ伯叔の列にあるもの四十人ほどのありさまをみるに、才はあるがよい運命をもたず多くのやくにんの下積になつてゐる。また今はいとこども百人ほどのうちで幾人がすぐれて朝廷に立つて禮をとりまもるものがあらうぞ。あなたはそのうへによく文章をはたらかす人であり、いちばんの兄さんは馬氏の白眉の様に天賦の才能をもつてをられる。（それにやつぱりおちぶれてをられるのだ）。あ

なたの家のことを曾祖父さまからいうてみるならば、則天太后が朝政にあたられたときはよそから非難するものが多かつた。その末年になつて秋梁公が政權をお執りになつたが、濁つた黄河はどうしても清んだ濟水をけがすことはできなかつた。（秋公をわるものなかまにいれることはできなかつた。）當時周のおこりはじめで武將の職をいろいろの武氏一門の人に付與しようとしたが、秋公は朝廷でひとりでそのことについて諫めて丹陛から身動きもされなかつた。それから禁中ではかりごとをきめて房陵に遷されてゐた中宗をみやこへ請ひ迎へ位に復し奉つた。これによつて前朝の長老たちは皆感涙をながした。これで太宗の建てられた社稷は一朝にして正しくなり、漢官の威儀は汚れをきよめられてふたたび光明をはなつ様になつた。時世が危くなつてはじめて不世出の人才といふものが出てくる、公の如きはそれで、公は如何なる艱苦をも甘しとされたのである。「詩經」に「だれがにがなを苦いといふぞ、にがなは甘くてなづなの様だ」というてあるが公の氣持はそんなものであつたのだ。かかる梁公の子孫であつてみれば、あなたがたは鼎をつらねて御馳走をたべ、自身にはおのが門戸に旌榮をたくさんならべて建てるほどのいい地位にのぼるが至當なのであるのに、あなたはなんで岷漢の間にさまようて地方の長官などの門を歴訪して面會をしてたのみごとなどしてをられるのであるか。そればかりではない。ここは山が高く水には波があり、秋風はさびしく吹いて露はしとどにおく、虎の腹をへらしたやつは高い巖から下りてくる、蛟のきままなやつは清らかな水から出てくる、

といふありさまである。こんなところに居るのは無用のことである。早くおかへりなさい、黄い塵土は衣をきたなくするし、眼はごみにはひりこまれてまどはされやすい。」

同元使君春陵行

元使君が春陵行に同ず

覽道州元使君結春陵行兼賊退後示官吏作二首志之曰、當天子分憂之地、效漢官良吏之目、今盜賊未息、知民疾苦、得結輩十數公、落落然參錯天下、爲邦伯、萬物吐氣、天下小安、可待矣、不意復見比興體制、微婉頓挫之詞、感而有詩、增諸卷軸、簡知我者、不必寄元。

道州の元使君結が春陵行兼び賊退後示官吏二首を覽て、之を志して曰く、天子分憂の地に當り、漢官良吏の目に效ふ。今盜賊未だ息まず。民の疾苦を知るもの結が輩十數公を得て、落落然として天下に參錯せしめ邦伯と爲さば、萬物氣を吐き、天下小しく安からむこと待つ可し。意はざりき復た比興の體制、微婉頓挫の詞を見むとは。感じて詩有り、諸を卷軸に増し、我を知る者に簡す、必ずしも元に寄せず。

【字解】【一】同。詩を和して作るをいふ。【二】元使君。道州刺史元結、使君は刺史の敬稱。元結、河南の人、後魏の常山王趙が十五代の孫なり。字は次山、年十七、學に志し元結秀に事ふ。天寶十二載進士に擧げらる。肅宗の時、史思明河陽を攻む、縣南明、結を

帝に薦む。結、時議三篇を上る。のち諸官を劾、泌陽に屯して十五城を全くせし功を以て監察御史裏行となる。又山南東道の來城が府に參謀たり。代宗立つや辭して武昌の美上に歸り、著作郎を授けらる。益一書を著す。元子・浪士・漫郎・覺叟等と號す。久しくして道州刺史を拜す。(刺史の時の、こと後に掲ぐる詩にみゆ)。又容管經略使に進む。母の喪にあひ歸りて京都に還り卒す。年五十。禮部侍郎を贈らる。(唐書本傳節錄)。道州は湖南永州府に屬す。【三】春陵行。元結作る所の詩、後にみゆ。【四】賊退後示官吏作。元結作る所の詩、後にみゆ。【五】志之。志は誌なり。【六】天子分憂。天子の憂を分擔するをいふ、地方官の職をいふ。【七】效。ならむ。【八】漢官良吏之目。漢官良吏とは漢代の循良の吏をいふ、目ば名目、前史に其の名列せらる。【九】落落然。散布の貌。【一〇】參錯。あちこちとまじへおくこと。【一一】邦伯。一地方の長官。【一二】吐氣。生氣をばきたす。【一三】比興體制。詩をいふ。【一四】微婉頓挫。微婉はおくふかくしなやか。頓挫は激揚した力を急に停止させること。【一五】增諸卷軸。自分の卷軸に加へて保存する。【一六】簡。よせること。【一七】知我者。自分の本心を知るもの。

遭亂髮盡白、轉衰病相嬰。

亂に遭ひて髮盡く白し、轉た衰へて病相嬰る。

沈縣盜賊際、狼狽江漢行。

沈縣たり盜賊の際、狼狽して江漢に行く。

歎時藥力薄、爲客羸瘵成。

時を歎じて藥力薄く、客と爲りて羸瘵成れり。」

吾人詩家秀、博采世上名。

吾人は詩家の秀にては、博く采る世上の名。

粲粲元道州、前聖畏後生。

粲粲たり元道州、前聖後生を畏る。

觀乎春陵作、歎見俊哲情。

春陵の作を觀て、歎ち見る俊哲の情。

同元使君春陵行

復覽賊退篇。結也實國楨。

復た賊退の篇を覽るに、結や實に國楨なり。

賈誼昔流慟。匡衡嘗引經。

賈誼昔流慟す、匡衡嘗て經を引く。

道州憂黎庶。詞氣浩縱橫。

道州黎庶を憂ふ、詞氣浩として縱橫なり。

兩章對秋月。一字借華星。

兩章秋月に對す、一字華星と借なり。

致君唐虞際。淳朴憶大庭。

君を唐虞の際に致さむ、淳朴大庭を憶ふ。

何時降璽書。用爾爲丹青。

何時の時か璽書を降して、爾を用ひて丹青と爲さむ。

獄訟永衰息。豈惟偃甲兵。

獄訟永く衰息せむ、豈に惟甲兵を偃せしむるのみならむや。

悽惻念誅求。薄斂近休明。

悽惻誅求を念ふ、薄斂は休明に近し。

乃知正人意。不苟飛長纓。

乃ち知る正人の意、苟くも長纓を飛ばさざるを。

涼颺振南嶽。之子龍若驚。

涼颺南嶽に振ふ、之子龍驚くが若し。

色沮金印大。興含滄浪清。

色は沮す金印の大なるに、興は含む滄浪の清さを。

我多長卿病。日夕思朝廷。

我長卿が病多し、日夕朝廷を思ふ。

肺枯渴太甚。漂泊公孫城。

肺枯れて渴すること太甚なり、漂泊す公孫城。

呼兒具紙筆。隱几臨軒楹。

兒を呼びて紙筆を具へしめ、几に隱りて軒楹に臨む。

作詩呻吟內。墨淡字敲傾。

詩を作る呻吟の内、墨淡くして字敲傾す。

感彼危苦詞。庶幾知者聽。

感ず彼が危苦の詞、庶幾はくは知者の聽かむことを。

【字解】 【一】沈。病にしづむさま。 【二】江。蜀地をいふ。 【三】蕪。つかれやむこと。肺勞の疾をいふ。 【四】博采。世上名。世上の著名なるものを博く採取して參考にする。 【五】榮。潔明の貌。 【六】元道州。結をいふ。 【七】前聖。過去の聖人、孔子をいふ。 【八】長後生。論語に、後生可畏、とあり。後進のものも畏敬すべしといふなり。 【九】春陵。春陵行をいふ。 【一〇】賊退篇。賊退示官吏詩をさす。 【一一】國楨。詩經に、文王篇に、王國克生、維則之楨、とあり、楨は幹なり、區別すれば楨を築くとき、剛旁に建つる木が幹、楨にわたす木が楨なり。國家の用心幹となること。 【一二】賈誼。漢の文帝の時治安策を上り、痛哭すべきもの三、云云といへり。 【一三】匡衡。漢の文帝の時、衡、しばしば疏を上り、政を議するに經書に附會して説をたてたり。 【一四】道州。結をさす。 【一五】黎庶。人民。 【一六】浩。大なる貌。 【一七】兩章。春陵行と賊退示官吏詩の二篇。 【一八】對秋月。高朗なるを比す。 【一九】借華星。文彩下に垂るるに比す。 【二〇】唐虞。堯舜をいふ。 【二一】淳朴。まじりけなくかさりけなし、さちのまま。 【二二】大庭。古代王者の名、神農氏の別號なりといふ。「莊子」に、昔者成氏大庭氏、結繩而用之、若此時、則至治也、とみゆ。 【二三】璽書。璽書は天子の印を捺したる文書。漢の時地方の吏、治績あるものには璽書を降して之を勉勵せしむ。 【二四】用爾。爾とは結をさす。 【二五】爲丹青。丹青とは公卿をいふ。鹽鐵論にみゆ。已にみゆ。 【二六】偃。ふせて用ひざるをいふ。 【二七】念誅求。元結が人民が官吏から誅求せらるることについてしんばいする。 【二八】薄斂。とりたてを少くすること。 【二九】休明。治平の世をいふ。 【三〇】乃知。知とは作者が知るなり。 【三一】正人。正直の人。 【三二】飛長纓。ながき冠のひしをひるがへす。役人のさま。 【三三】南嶽。衡山をいふ、湖南にあり。 【三四】之子。此子なり、元結をさす。 【三五】龍若驚。老子に、龍若驚、とみゆ。人は榮辱にあたりていましむべきをいふ。 【三六】色沮。顔色はばむ、進まぬかほつきする、こと。 【三七】金印大。大きな金印をもらふ。金印の斗大

の如くなるを取りて肘後に繋げん、とは首の周頤が語なり。【元】興、遊興なり。【三】滄浪清、滄浪のすめる水に舟をうかべて去ること。元結の引、羊自割、船等の句をさしていふ。【四】長脚病、長脚は漢の司馬相如が字、相如は清湯の病あり。【五】日夕、朝夕の意。【六】公孫城、白帝城をいふ、公孫述の築く所。【七】隠几、隠息による。【八】軒檻、のき、はしら。【九】呻吟、うごめく。【十】鼓傾、かたむく、まがる。【十一】危苦調、意中のくるしめることば、元結が作ないふ。【十二】知者、序文の知、我者なり。

【題義】道州刺史元結が「春陵行」に和してつくつた詩。自分は元結が「春陵行」と「賊退後示二官吏」作との二首を覽てそのことについてかきしるす。元結は地方長官として天子の憂を分擔する地位にあたり、むかし漢代の良吏などの名目にならつて行をした。今日盜賊はまだやまぬ、若し民のつらさをよく知つてゐるもの元結の様な役人を十數人も得てそれを天下のあちらこちらにまかせて散らばらして長官としておいたならば萬物も生氣を吐き、天下もすこしは安泰になるであらうことは期待し得る。そのみではない、彼がそのことを詩につくつて微婉頓挫の詞を見せてくれたことは意外のことである。自分はそれでこのことについて感じてこの詩をつくつて巻軸につけ加へた。さうして之を自分の知己によせるのである。必ずしも元結本人に寄せなくともいいつもりである。大曆二年夔州にての作。

【詩意】自分は騷亂にあうて髪はすつかり白くなつたし、だんだん老衰するのに病氣にまとはれてゐる。盜賊のはびこつてゐるときに病はおもひ、うろたへながら江漢の地方にさまよつた。時世をなげくためか藥の効能も弱く、旅人となつてゐるうちにすつかり肺勞になりきつた。我我は詩家中ですぐれたものに於ては世上の著名の作家の作品を探つて參考とするものであるが、元道州の樂樂として明漸なすがたはどうだ。むかしの聖人が「後生長るべし」というたこともおもひあはされる。「春陵作」を觀てみると忽ち俊哲の情がうかがはれる。また「賊退」の詩篇をみると元結はじつに國家の用心棒である。むかし賈誼は天下の事について流涕慟哭したし、匡衡は經書を引いて政治を論じた。元結はそんなものだ。彼は人民を憂へてそのことばつきは大にして縦横である。この二篇の作はその高朗なること秋月と對すべく、その一字一字は雲間にかがやく華やかな星の光といつしよである。結は君を堯舜の際に致さんとし、大庭氏時代の様な淳朴な時代をうみだしたいとおもつてゐる。いつになつたら天子から璽書をくだしたまはつておまへを公卿とすることができようか。さうなれば詔獄は永久に息んでしまふ、武器だけふせてかたづけるとどまらぬ。結はまた心をいためながら人民が誅求されることをしんばいしてゐる。人民に對してとりたてを薄くしてやることはすなはち治平の世に近いといふべきである。これで見ると正人君子（結の様な）の心は役人になつたからとて長い冠のひもを伊達にひるがへさせてゐるものでないことがわかる。いますすしい風が衡山のあたりに振うてゐる、このとき彼は寵辱に對しても驚くが如くいましめ、金印の大なるに對してもすすまぬ顔つきをし、かへつて滄浪の水の清きに泛びたいとの興をいだいてゐる。自分は司馬相如の様な病が多く、

朝夕朝廷の事をおもてゐる。肺は枯れてのどはひどくかわき、こんな白帝城にぶらついてゐる。自分はおまへの詩をみたので、こどもを呼んで紙や筆をそなへさせ、南軒のはしらのところへでて脇息によりかかり、うなりながらこの詩を作ると、墨はうすく文字はまがつてしまつた。自分はおまへの心中危苦の詞に感じてこの詩を作り、どうか知己の人にきいてもらひたいとおもふのである。」

【附録】

春陵行

春陵行

元

結

癸卯歲、漫叟授道州刺史、道州舊四萬餘戶、經賊已來不滿四千、大半不勝賦稅、到官未五十日、承諸使徵求符牒二百餘封、皆曰、失其限者罪至貶削、於戲若悉應其命、則州縣破亂、刺史欲焉逃罪、若不應命、又即獲罪戾、必不免也、吾將守官靜以安人、待罪而已、此州是春陵故地、故作春陵行、以達下情。

癸卯の歲、漫叟道州刺史を授けらる。道州は舊四萬餘戶、賊を經し已來四千に満たず、大半

賦税に勝へず、官に到りて未だ五十日ならざるに、諸使の徵求の符牒二百餘封を承く。皆曰く、其の限を失はむ者は罪貶削に至らむと。於戲若し悉く其の命に應せば、則ち州縣破亂せむ、刺史焉くにか罪を逃れむと欲する、若し命に應せずんば、又た即ち罪戾を獲む、必ず免れざるなり。吾將に官を守り靜以て人を安んじ、罪を待たむとする而已。此の州は是れ春陵の故地なり、故に春陵行を作り、以て下情を達す。

【字解】(一) 春陵、道州の意に用ふ。春陵は漢代の地名にして今永州府寧遠縣西北に其の故城ありしもの、道州の東にあたる。漢の長沙の定王の子、賢といふもの此に封ぜらる。(二) 癸卯歲、代宗の廣德元年なり。(三) 諸使、刺史の上司なり、節度使共の他。(四) 徵求符牒、人民から税金を徵收する切手やかきつけ。(五) 失其限、徵稅の期限をあやまるもの、日限までに税なとりたて得ぬもの。(六) 貶削、官職をおとし又は削り去る。(七) 達下情、下たる人民の情を上に通達するなり。

軍國多所須、切責在有司。軍國須つ所多し、切責は有司に在り。

有司臨郡縣、刑法竟競欲施。有司郡縣に臨む、刑法竟競「競」ひて施さむと欲す。

供給豈不憂、徵斂又可悲。供給豈に憂へざらむや、徵斂又た悲む可し。

州小經亂亡、遺民實困疲。州小にして亂亡を經、遺民實に困疲す。

大鄉無十家、大族命單贏。大郷にも十家無し、大族も命單贏なり。

朝飧是草根。暮食乃樹皮。
 出言氣欲絕。意速行步遲。
 追呼尚不忍。況乃鞭扑之。
 郵亭傳急符。來往跡相追。
 更無寬大恩。但有迫促期。
 欲命鬻兒女。言發恐亂隨。
 悉使索其家。而又無生資。
 聽彼道路言。怨傷誰復知。
 去冬山賊來。殺奪幾無遺。
 所願見王官。撫養以惠慈。
 奈何重驅逐。不使存活爲。
 安人天子命。符節我所持。
 州縣忽亂亡。得罪復是誰。

朝飧は是れ草根、暮食は乃ち樹皮。
 言を出せば氣絶えむと欲す、意速かなるも行歩遅し。
 追呼するだも尚忍びず、況んや乃ち之を鞭扑するをや。
 郵亭急符を傳ふ、來往跡相追ふ。
 更に寛大の恩無く、但だ迫促の期有り。
 命じて兒女を鬻がしめむと欲す、言發せば恐らくは
 悉く其の家を索めしむるも、而も又た生資無し。
 彼の道路の言を聽くに、怨傷誰か復た知らむ。
 去冬山賊來る、殺奪幾んど遺無し。
 願ふ所は王官の、撫養するに惠慈を以てするを見む。
 奈何ぞ重ねて驅逐して、存活を爲さしめざると。
 人を安んずるは天子の命なり、符節は我が持する所
 州縣忽ち亂亡せば、罪を得るは復た是れ誰ぞ。一なり。

通緩違詔令。蒙責固所宜。
 前賢重守分。惡以禍福移。
 亦云貴守官。不愛能適時。
 顧惟屏弱者。正直當不虧。
 何人采國風。吾欲獻此辭。

【字解】 〔一〕軍國、軍事の際の國。〔二〕須、需用。〔三〕切責、最してちかかな責任。〔四〕有司、かかりの役。〔五〕竟、計有功が唐詩記事に據に作る、從ふべし。〔六〕供給、軍需の物をそなへる。〔七〕徵、徵金をとりたてること。〔八〕命、命は生命、軍は軍薄、人數すくなきなり、贏はつかれやせる。〔九〕出言、ものをいふ。〔一〇〕郵亭、飛脚やど。〔一一〕急符、いそぎの徵稅の切手。〔一二〕跡相追、跡が前後つづくをいふ。〔一三〕追促、せきたててさいそくする。〔一四〕言發、言とは刺史が上司からの命令のことを口にだすをいふ。〔一五〕亂隨、人民の騷亂がそれについておこる。〔一六〕生資、いきるしとて。〔一七〕道路言、人民がみちでいふこと。〔一八〕去冬山賊來、以下、不使存活爲の句まで人民の言なり。〔一九〕王官、天子から命ぜられた官吏。〔二〇〕符節、徵稅徵兵等のための切手、わりふ。〔二一〕得罪、人民を治撫する能はざる罪を得。〔二二〕復是誰、自己に外ならぬ。〔二三〕通緩、通は納稅からのがれしめゆるすこと、緩は納稅期を日のべしてやること。〔二四〕守分、治民の官吏たる職分を守る。〔二五〕守官、官吏の職責を守る。〔二六〕能適時、時世むきにすること。時世むきにするには人民より重く税をとりたてることなり。〔二七〕屏弱者、よわきもの、自己の官卑く力小なるをいふ。〔二八〕采國風、古代採詩の官ありて國國のうたとりあつて朝廷へだしたといひつたふ。〔二九〕此辭、この詩篇をいふ。

【題義】 春陵すなはち道州のことについてよんだうた。代宗の廣德元年癸卯の歲に漫叟(元

結の號)は道州刺史を授けられた。道州はもと四萬戸餘りあつたが賊亂をへてこのかたは四千にたりなくなり、その大半は税金をわりつけるにたへぬものである。自分は着任して五十日にならぬうちに上司から税金徴收の切手・かきつけ二百餘通を申しつけられた。上司たちどれも「若し期限内に税金をあつめなければおまへは貶削の罪になるであらう」というてゐる。ああ、若しみんなこの命令どほりにしたら州や縣は亂破してしまふであらう。さうなつたら刺史はどこに罪をのがれるか、のがれ場所がないではないか。またもし命令に應せぬとしたらまたすぐに罪とがを得る、きつとそれはのがれられぬ。どうせさうなのなら、自分としては官職を守つて、安靜を以て人民をおちつかせて、自己の罰せられるのを待たうとするだけのことだ。この道州はむかしの春陵の地だ、それで「春陵行」といふ詩をつくつて下民の情を上たるものに通達するのである。

【詩意】軍事の際の國家には需用のものが多し。そのもつともてぢかな責任はかかりの役人に在る。かかりの役人が郡縣に臨む態度は命令をきかぬものに對しては競うて刑法を加へようとするのである。こちらは軍需を供給することについてしんばいせぬわけではないが、人民からとりたてをするには悲しむべきことである。」道州は小さな州であるうへに亂亡を経過したのでこのつてゐる人民はじつに困りつかれてゐるのである。大きな郷でも十軒あるかなしであり、大家族

であつたものでもいまは人すくなでつかれてゐるといふ運命である。朝のたべものは草の根、暮のたべものは樹の皮だ。言葉をだすさへ息氣が絶えさうで、氣だけははやつてゐるがあるきつきはおそい。こんなあはれな人民はあとから聲をかけてよぶさへも忍びぬくらのものだ、それらはどうして之を鞭や棒でぶてるものか。上司から飛脚やどを経て急用の徴稅切手が傳へられる、その使者の往來は前後あしあと相追ふのありさまだ。すこしも民に對して寛大の恩はなく、ただただいつまでに日が迫つてゐるから早くせよと催促するだけである。甚しきは錢がなければ命令で兒女でも賣りとばさせようといふほどの意氣ごみだ。こんなことをわたしの口から言葉にしたら最後すぐにも騷亂がおこるにきまつてゐる。いくら民家のあらゆるものをさがして一切つくさせたところで、それではまたいきてゆくもどがなくするのである。」人民たちが道路でいかなることを言うてゐるか、それをきくとどんなに彼等が怨み傷んでゐるか、その實情を知るものがあるまい。彼等はこんなことをいふ、「去年の冬、山賊がやつてきて、人を殺したり物を奪うたりして、いまはほとんどなんにもこつてゐない。どうぞお役人さまが慈悲を以て我我を撫で養ふ様にしていただきたい。それになんでふたたび我我を驅逐していきのこることさへもさせてはくださらぬか」と。(もつともなことだ。)人民を安らかに治めよといふのが天子の御命令だ。稅兵徴發の切手わりふは自分が所持してゐる。州縣が亂亡したときに罪を得るものは誰だ、かくいふ自

分にほかならぬ。自分は詔や命令にそむいて税金を日延べもしてやるし、免除もしてやる。これ以上で上司から責められることはもとより當然なことだ。覺悟のまへだ。むかしの賢人は職分を守ることを重んじた。自分は何んで自分一身に禍がくるとか福がくるとかいふことでこの志を移しかへることができようぞ。自分はここに自己の官職を守ることを貴ぶのだ。時世むきにうまく税金を多くとりたてて上司の氣に入る様にするとはきはらひだ。願みれば自分がかよわいものだ、上司に對して無力ではあるが、正直といふ點だけは缺かないと確信する。だれかが古代の様に諸國の國ぶりの詩でも採るなら自分は此の詩を獻じようとおもふ。」

賊退示官吏

元 結

癸卯歲、西原賊入道州、焚掠幾盡而去、明年賊又攻永破郡、不犯此州邊鄙而退、豈力能制敵與、蓋蒙其傷憐而已、諸使何爲忍苦徵斂、故作詩一篇、以示官吏。

癸卯の歲、西原の賊道州に入り、焚掠幾んど盡して去る。明年賊又た永を攻め郡を破る、此

の州の邊鄙を犯さずして退く。豈に力能く敵を制せむ與、蓋し其の傷憐を蒙りし而已。諸使何爲れぞ苦んで徵斂するに忍ぶや。故に詩一篇を作り、以て官吏に示す。

【字解】 (一) 癸卯歲 巳にみゆ。(二) 西原賊入道州 「唐書」西原蠻傳に云ふ、西原の種落蠻侯、夏永等内寇し道州を陥れ、賊に據ること五十餘日、桂管經略使邢濟擊ちて之を平らぐ、餘衆復た道州を圍む、刺史元結固く守りて下らず、と。(三) 焚掠 家をやき物品をかすめとる。(四) 明年 廣德二年。(五) 攻永破郡 永は永州、郡は郡州、道州の北、及び西北にある州。(六) 不犯此州邊鄙而退 顏真卿が撰せる元結墓誌に云ふ、武昌の美口に家すること餘餘、上(代宗)君が貧に居るを以て家より起して道州刺史となす。州は西原の賊の陥るる所となり、人は十に一なく、戸は糠に干に滿つ。君、車より下りて古人の政を行ふ、二年の間、歸るもの萬餘家、賊も亦畏れを懷きて敢て來り犯さず。既に代を受く、百姓間に詣り、生祠を立てんと請ふ、と。以て元結の治績を見るべし。

昔歲逢太平。山林二十年。

昔歲逢太平に逢ふ、山林二十年。

泉源在庭戶。洞壑當門前。

泉源庭戶に在り、洞壑門前に當る。

井稅有常期。日晏猶得眠。

井稅常期有り、日晏くして猶ほ眠ることを得たり。

忽然遭世變。數歲親戎旂。

忽然世變に遭ふ、數歲戎旂を親らす。

今來典斯郡。山夷又紛然。

今來斯郡を典る、山夷又た紛然たり。

城小賊不屠。人貧傷可憐。

城小にして賊屠らず、人貧にして傷みて憐む可しとす。

是以陷隣境。此州獨見全。
是を以て隣境を陥れしも、此の州獨り全くせらる。

使臣將王命。豈不如賊焉。
使臣王命を將ふ、豈に賊にだも如かざらむや。」

今彼徵斂者。迫之如火煎。
今彼の徵斂の者、之に迫ること火の煎するが如し。

誰能絶人命。以作時世賢。
誰か能く人命を絶ちて、以て時世の賢と作さむや。

思欲委符節。引竿自刺船。
符節を委てて、竿を引きて自ら船を刺し、

將家就魚菱。窮歸老江湖邊。
家を將て魚菱に就き、江湖の邊に窮歸老せむと思

【字解】「一」井稅。井字形の田地の稅、單に田稅の義。「二」世變。安・史の亂をいふ。「三」數歲親戎旃。肅宗朝以來軍

務にたづまはりしをいふ。「同元使君春殿行」詩の韻が略傳參照。旃は反物のまなを掛けたるはた。「四」斯郡。道州。「五」山

東。西原蠻。「六」隣境。永州邵州。「七」使臣。上司をさす。「八」將王命。天子の命を行ふ。「九」時世賢。前篇の「適時」

とあるもおなじ、時世むきの賢人、孟子の謂はゆる今之良臣、古之民賊、といへると同意。「一〇」委符節。委はうちすてること。

【題義】賊が退いたとき官吏に示した詩。癸卯（廣徳元年）の歲に西原の賊が道州にいたりこみ、

ほとんどあらゆるものを焚いたり奪うたりして去つた。翌二年に賊は又永州を攻め邵州を破つた

が、この道州の邊鄙は犯すことなしに退卻した。これは自分の力がこの敵を制したわけではない、

賊の方からさのどくがつてくれたおかげである。賊でさへこんなであるのに、なんで上司の人た

ちはひどいとりたててをすることをむりにするのか。それで自分はこの詩一篇をつくつて官吏にみ

せた。

【詩意】むかしは太平の御代で自分は山林生活を二十年もした。そのときは泉水は庭戸のそばに

あり、洞壑は門前にあたつてよこたはり、田地の税金ををさめるにはきまつた時期があり、日が

たけるまで眠つてゐることができた。それが急に世のなかの變事にあうて若干年のあひだ軍事を

みづからすることになつた。」このたびこの道州をつかさどると、山の夷どもが紛然とやつてき

た。しかし小さな城であるのに賊は之を屠らず、人民が貧乏なので彼等も心をいためてきのだ

とおもうた。そのため彼等は隣境の永・邵等の地は、陥れたがこの州だけは安全にしておいて

くれた。地方へ使者となつてでてゐる上司は天子の命を奉行するのがその職務だ、それに彼等は

どうして賊にだも劣つてよいものか、彼の税をとりたてる者のさまをみると彼等は人民に迫るこ

とは火がいたりつけるほどである。人民の生命まで絶つてそれで時世の賢人とはばれようなどとは

できるものではない。そんなことなら自分はあづかつてゐる切手やわりふをうちすてて、竹竿を

ひきよせて船を刺し、家ちうをひきつれて魚や菱のある場所に就き、江湖のあたりにひきこんで

隠居しようとおもふのである。」

秋日夔府詠懷奉寄鄭監審李賓客之芳一百韻

秋日夔府の詠懷、鄭監審・李賓客之芳に寄せ奉る。一百韻

絕塞烏蠻北。孤城白帝邊。飄零仍百里。消渴已三年。

雄劍鳴匣匣。羣書滿繫船。亂離心不展。衰謝日蕭然。

筋力妻孥問。菁華歲月遷。登臨多物色。陶冶賴詩篇。

峽東滄江起。巖排古樹圓。拂雲蠶楚氣。朝海蹴吳天。

煮井爲鹽速。燒畝度地偏。有時驚疊嶂。何處覓平川。

鷓鴣雙雙舞。獼猴壘壘懸。

絶塞烏蠻の北、孤城白帝の邊。飄零仍は百里、消渴已に三年。

雄劍鳴りて匣を開く、羣書滿ちて船を繫ぐ。

亂離心展びず、衰謝日に蕭然たり。

筋力妻孥問ふ、菁華歲月遷る。

登臨物色多し、陶冶詩篇に賴る。

峽は滄江を束ねて起り、巖は古樹を排して圓なり。

雲を拂ひて楚氣蠶たり、海に朝して吳天を蹴る。偏なり。

井を煮て鹽を爲ること速かに、畝を燒きて地を度ること。

時有つてか疊嶂に驚く、何の處にか平川を覓めむ。

鷓鴣雙雙として舞ふ、獼猴壘壘として懸る。

碧蘿長似帶。錦石小如錢。春草何曾歇。寒花亦可憐。

獵人吹戍火。野店引山泉。喚起搔頭急。扶行幾屐穿。

兩京猶薄產。四海絕隨肩。幕府初交辟。郎官幸備員。

瓜時猶旅寓。萍泛苦夤緣。藥餌虛狼藉。秋風灑靜便。

開襟驅瘴癘。明目掃雲煙。高宴諸侯禮。佳人上客前。

哀箏傷老大。華屋艷神仙。南內開元曲。當時弟子傳。

碧蘿長くして帶に似たり、錦石小にして錢の如し。

春草何ぞ曾て歇まむ、寒花亦た憐む可し。

獵人戍火を吹く、野店山泉を引く。

喚起せられて頭を搔くこと急に、扶行幾屐をか穿つ。

兩京猶は薄産、四海隨肩絶ゆ。

幕府初め交辟す、郎官幸に員に備はる。

瓜時猶は旅寓、萍泛夤緣に苦しむ。

藥餌虚しく狼藉たり、秋風灑便なるに灑ぐ。

襟を開く瘴癘の驅らるるに、明目す雲煙の掃はるるに。

高宴諸侯の禮、佳人上客の前。

哀箏老大を傷ましむ、華屋神仙艷なり。

南内開元の曲、當時弟子傳ふ。

〔原注〕都督柏中丞庭。開元梨園弟子李仙奴歌。

秋日夔府詠懷奉寄鄭監李賓客一百韻

二五九

法歌聲變轉。滿座涕滂沱。

法歌聲變轉、滿座涕滂沱たり。

弔影夔州僻。回腸杜曲煎。

影を弔す夔州の僻なるに、回腸杜曲に煎る。

即今龍廐水。

即今龍廐の水、

莫帶犬戎羶。

犬戎の羶を帯びざる莫からむや。

耿賈扶王室。蕭曹拱御筵。

耿賈王室を扶け、蕭曹御筵に拱す。

乘威滅蜂蠆。戮力効鷹鷂。

威に乗じて蜂蠆を滅す、力を戮せて鷹鷂に効ふ。

舊物森猶在。凶徒惡未悛。

舊物森として猶ほ在り、凶徒惡未だ悛めず。

國須行戰伐。人憶止戈鉞。

國須らく戰伐を行ふべし、人は憶ふ戈鉞を止めむことを。

奴僕何知禮。恩榮錯與權。

奴僕何ぞ禮を知らむ、恩榮錯つて權を與ふ。

胡星一彗孛。黔首遂拘繫。

胡星一たび彗孛す、黔首遂に拘繫せらる。

哀痛絲綸切。煩苛法令獨。

哀痛絲綸切なり、煩苛法令獨かる。

業成陳始王。兆喜出於敗。

業成始王を陳す、兆喜敗より出づ。

宮禁經綸密。台階翊戴全。

宮禁經綸密なり、台階翊戴全し。

熊羆載呂望。鴻雁美周宣。

熊羆呂望を載す、鴻雁周宣を美す。

側聽中興主。長吟不世賢。

側に聽く中興の主、長吟す不世の賢。

音微一柱數。道里下牢千。

音微一柱數す、道里下牢千なり。

鄭李光時論。

鄭李時論に光る、

文章竝我先。

文章竝に我が先なり。

陰何尚清省。沈宋欵聯翩。

陰何尚ほ清省、沈宋欵ち聯翩たり。

律比崑崙竹。音知燥濕絃。

律は比す崑崙の竹、音は知る燥濕の絃。

風流俱善價。愜當久忘筌。

風流俱に善價、愜當久しく筌を忘る。

置驛常如此。登龍蓋有焉。

置驛常に此の如し、登龍蓋し焉有り。

雖云隔禮數。不敢墜周旋。

禮數を隔つと云ふと雖も、敢て周旋を墜さず。

高視收人表。虛心味道玄。

高視人表を收め、虚心道玄を味ふ。

馬來皆汗血。鶴唳必青田。

馬來る皆汗血、鶴唳く必ず青田。

羽翼商山起。蓬萊漢閣連。

羽翼商山より起る、蓬萊漢閣に連る。

管寧紗帽淨。江令錦袍鮮。
東郡時題壁。南湖日扣舷。
遠遊凌絕境。佳句染華牋。
每欲孤飛去。徒爲百慮牽。
生涯已寥落。國步尚迍邐。
衾枕成蕪沒。池塘作棄捐。

〔原注〕平生多病。卜築
遠。俱指兩京故里。

別離憂怛怛。伏臘涕漣漣。
露菊斑豐鎬。秋蔬影澗瀦。
共誰論昔事。幾處有新阡。
富貴空回首。喧爭懶著鞭。
兵戈塵漠漠。江漢月娟娟。
局促看秋燕。蕭疎聽晚蟬。

管寧紗帽淨く、江令錦袍鮮かなり。
東郡時に壁に題す、南湖日に舷を扣く。
遠遊絶境を凌ぎ、佳句華牋に染む。
毎に孤飛し去らむと欲す、徒らに百慮に牽かるるを爲す。
生涯已に寥落たり、國歩尚ほ迍邐なり。
衾枕に蕪没を成し、池塘棄捐を作す。

別離に憂へて怛怛たり、伏臘に涕漣漣たり。
露菊豐鎬に斑に、秋蔬澗瀦に影せむ。
誰と共に昔事を論せむ、幾處にか新阡有る。
富貴空しく首を回らす、喧争鞭を著くるに懶し。
兵戈に塵漠漠たり、江漢に月娟娟たり。
局促秋燕を看る、蕭疎晚蟬を聽く。

雕蟲蒙記憶。烹鯉問沈綿。

雕蟲記憶を蒙る、烹鯉沈綿を問はる。

卜羨君平杖。偷存子敬甌。

卜は羨む君平が杖、偷は存す子敬が甌。

囊虛把釵釧。米盡拆花鈿。

囊虚しくして釵釧を把り、米盡きて花鈿を拆く。

甘子陰涼葉。茅齋八九椽。

甘子涼葉に陰す、茅齋八九の椽。

陣圖沙北岸。市暨瀼西嶺。

陣圖沙北の岸、市暨瀼西の嶺。

〔原注〕映人目。市并泊船處。曰市暨。
江水橫通。山谷。方人謂之。市暨。

羈絆心常折。棲遲病即痊。

羈絆心常に折る、棲遲病即ち痊えむとす。

紫收眠嶺芋。白種陸池蓮。

紫は收む眠嶺の芋、白は種う陸池の蓮。

色好梨勝頰。穠多栗過拳。

色好くして梨頰に勝り、穠多にして栗拳に過ぐ。

勅廚惟一味。求飽或三鱸。

廚に勅する惟だ一味、飽を求む或は三鱸。

俗異隣鮫室。朋來坐馬韉。

俗異に鮫室に隣る、朋來るは馬韉に坐す。

縛柴門窄窄。通竹溜涓涓。

柴を縛して門窄窄たり、竹を通じて溜涓涓たり。

塹抵公畦稜。

塹は抵る公畦の稜。

秋日夔府詠懷奉寄鄭廣文李賓客一百韻

邨依野廟塙(二九七)

邨は依る野廟の塙。

缺籬將棘拒。倒石賴藤纏。
 借問頻朝謁。何如穩醉眠。
 誰云行不逮。自覺坐能堅。
 霧雨銀章澀。馨香粉署妍。
 紫鸞無近遠。黃雀任翻翩。
 困學遠從衆。明公各勉旃。
 聲華夾宸極。早晚到星躔。
 懇諫留匡鼎。諸儒引服虔。
 不過輸鯁直。會是正陶甄。
 宵旰憂虞軫。黎元疾苦駢。
 雲臺終日畫。青簡爲誰編。
 行路難何有。招尋興已專。

缺籬棘を將て拒ぎ、倒石藤に頼りて纏はしむ。借問頻りに朝謁するは、穩かに醉眠するに何如。誰か云ふ行くこと逮はずと、自ら覺ゆ坐能く堅きを。霧雨に銀章澀る、馨香に粉署妍なり。紫鸞近遠無し、黃雀翻翩たるに任す。困學從來に遠ふ、明公各旃を勉めよ。聲華宸極を夾む、早晚星躔に到らむ。懇諫匡鼎を留む、諸儒服虔を引かむとす。鯁直を輸すに過ぎず、會す是れ陶甄を正さむ。宵旰憂虞軫く、黎元疾苦駢す。雲臺終日畫く、青簡誰が爲にか編せむ。行路難何か有らむ、招尋興已に專なり。

由來具飛楫。暫擬控鳴弦。
 身許雙峰寺。門求七祖禪。
 落帆追宿昔。衣褐向眞詮。
 安石名高晉。昭王客赴燕。
 途中非阮籍。查上似張騫。
 披拂豁雲寧。在淹留景不延。
 風期終破浪。水怪莫飛涎。
 他日辭神女。傷春怯杜鵑。
 淡交隨聚散。澤國遠迴旋。
 本自依迦葉。何曾藉偃佺。
 罇峰生轉眄。橘井尙高褰。
 東走窮歸鶴。南征盡跼鳶。

由來飛楫を具ふ、暫く擬す鳴弦を控かむと。身は許す雙峰寺、門は求む七祖の禪。落帆宿昔を追ひ、衣褐眞詮に向はむ。安石名晉に高し、昭王客燕に赴く。途中阮籍に非ず、查上張騫に似たり。披拂雲寧ぞ在らむや、淹留景延からず。風期終に浪を破らむ、水怪涎を飛ばすこと莫からむ。他日神女を辭せむ、傷春杜鵑を怯む。淡交聚散に隨ふ、澤國遠りて迴旋せむ。本自ら迦葉に依る、何ぞ曾て偃佺に藉らむ。罇峰轉眄に生せむ、橘井尙は高く褰く。東走窮歸鶴を窮め、南征跼鳶を盡くさむ。

晚聞多妙教。卒踐塞前愆。

晚聞妙教多し、卒踐前愆を塞がむ。

顧愷丹青列。頭陀琬琰鐫。

顧愷丹青列す、頭陀琬琰鐫る。

衆香深黯黯。幾地肅芊芊。

衆香深くして黯黯たり、幾地か肅として芊芊たる。

勇猛爲心極。清羸任體孱。

勇猛を心の極と爲す、清羸體の孱きに任す。

金篋空刮眼。鏡象未離銓。

金篋空しく眼を刮るも、鏡象未だ銓を離れず。

【字解】

【一】 鄭靈春 卷十六、八哀「鄭公處」詩の原注に「鄭は江陵に謫せられしことをいひ、本篇の原注にも鄭在江陵」とあれば其の荆州に在ること必せり。靈は秘書少監、かつて此の官となり今は謫せられてあるなり。【二】 李賓客之芳 李之芳は廣德元年に御史大夫を兼ねて吐蕃に使し、留めらるること二年にして歸ることを得、禮部侍郎に拜せられ、太子賓客に改めらる。本篇の原注によれば時に之芳は夷陵州(今の湖北宜昌府)に在りたり。【三】 絕塞 夔州をさす。【四】 鳥壘 卷十七、二四五頁の句解をみよ。【五】 孤城 夔州の城をさす。【六】 白帝 白帝城。【七】 仍百里 雲安より夔州まで百三十里、遠去する能はずして依然百里の距離の地に留まるをいふ。【八】 消渴 病名。【九】 已三年 永泰元年、大曆元年、二年にて三年。【一〇】 雄劍鳴開匣 開匣雄劍鳴と同じ、壯心已まざるをいふ。【一一】 羣書滿紫船 羣書滿に同じ、夔州を去るの用意あるをいふ。【一二】 衰謝 氣力のおとろへ減ずること。【一三】 蕭然 さびしきさま。【一四】 妻孥 妻子。【一五】 菁華 草木の春光をいふ。【一六】 物色 景物の色。【一七】 陶治 性靈を陶冶する、こころをきたへる。【一八】 映東滄江起 起の主語は映、映開せまし、故に東といふ、滄江は大江。【一九】 巖排古樹圓 圓の主語は巖、排は排列すること。【二〇】 拂雲 拂の主語は古樹、雲を拂ふとは高く侵すをいふ。【二一】 飄颻氣 飄は土雨のふること、そのごとく楚地の惡氣が巖樹のうへにふる。【二二】 朝海 朝の主語は省かれたる江水。【二三】 驟吳天 吳天に向つて急走するをいふ。驟の主語は映勢なり。【二四】 煮井 蜀地には鹽井多し。【二五】 燒畝 律木を燒きたててうゑつけをする、こと。【二六】 渡取備

個 度地とおなじ、偏僻の場所まですつかり火耕するをいふ。【二七】 疊嶂 かきなれる山。【二八】 平川 平にながれてある川、平地をいふなり。【二九】 澗澗 なしどり。【三〇】 懸巖 さる。【三一】 疊疊 かきなれる山。【三二】 碧巖 緑のひめかつら。【三三】 錦石 うつくしい石。【三四】 何曾歌 やむことなし、常に暖氣あればなり。【三五】 寒花 秋冬さく花。【三六】 吹成火 屯戌の場所火を吹く、それをかりて用ふるなり。【三七】 野店 ぬなかの茶屋。【三八】 引山泉 井なければなり。【三九】 喚起 鳥の聲によびおこされる。【四〇】 蓋頭笠 急に頭をかきつつおきる。【四一】 扶行 杖にたすけられてある。【四二】 幾履穿 いくつかのあしだをばきつぶす。晋の阮孚が語に未知一生、能著幾兩屐、とあり。【四三】 兩京 長安、洛陽。【四四】 海産 すゝしの財産。田宅をいふ。【四五】 應眉 年長の朋友、「禮記」に五年以長、期眉鬢之、とあり、五年の年長者には一步さがつてしたがふ。【四六】 幕府 成都の嚴武が幕府。【四七】 交辟 こもこも召す。【四八】 郎官 工部員外郎をいふ。【四九】 備員 人員にそなはる。【五〇】 瓜時 更代の時期、瓜のできるときに成人が更代する、事は「左傳」にみゆ。【五一】 洋泛 うき草のごとくういてある。【五二】 雲綠 まとはれるをいふ。【五三】 藥餌 くすりと滋養物。【五四】 灑掃使 作者は風の吹くことを「灑ぐ」といふ慣例なり、靜便は灑掃使が還得、靜者便の語に本づく。閑靜を便利としてある境遇をいふ。【五五】 明日 めをみひらく。【五六】 掃雲煙 上句の驅瘴瘴及び此の句は秋風の吹きし結果なり。【五七】 高宴 高堂の宴。【五八】 諸侯禮 諸侯は都督をさす。【五九】 佳人 美人。【六〇】 上客 上等の賓客。【六一】 老大 自己の年老。【六二】 華屋 都督のうつくしきいへ。【六三】 神仙 美人をたとへいふ。【六四】 南内 長安の興慶宮のこと。【六五】 開元曲 玄宗の開元時代の歌曲。【六六】 弟子傳 作者の原注にみゆるごとく、この宴にて作者は梨園弟子李仙奴が歌をききたるなり。開元二年に玄宗は梨園に於て自ら女人に法曲を教へたり、之を皇帝の梨園の弟子と號せり。【六七】 法歌 即ち法曲、標準として定められし曲をいふ。【六八】 滌浚 ながるる貌。【六九】 形影 我と我が影を形ふ、さびしきさま。晋の李密が陳情表に形影相弔とみゆ。【七〇】 杜曲前 杜曲は長安の作者の故居、之をおもつて腸がにくりかへる。【七一】 龍脫水 天子のおうまや門の水、作者の原注によれば龍脫は門の名と見ゆ、水は渭水なり。「通鑑」の注に云ふ、唐の禁苑の南門は宮城の玄武門にあたり、北は渭水に枕む。苑内に飛龍・辟鱗・風苑等の六殿あり、と。【七二】 莫帶 莫は莫不の義。【七三】 大戎覆 覆は羊くさきにほひ、吐蕃侵入の餘臭あるをいふ。【七四】 歌買 歌奪・買復、後漢の光武が名將。【七五】 蕭曹 漢の蕭何、曹參、歌買・蕭曹は肅宗即位當時の將相をさす。【七六】 拱 拱、この拱

は捕するをいふならん。【七】 蟻 蟻はち、さそり、悪人をさす。【八】 戮力 力をあはせ。【九】 鷹鷂 共に「たか」。武勇の將をたとふ。「左傳」に、見無難於君者、鷹鷂之逐也。【一〇】 舊物 舊時の文物。【一一】 森 ちらなる貌。【一二】 内徒 叛臣等をさす。仇氏曰く、李懷玉の侯希逸を逐ひ、僕固懷恩の吐蕃の兵を誘ふが如き是なり。【一三】 校 改なり。【一四】 賊伐 征伐をいふ。【一五】 戈鋌 鋌は小矛。【一六】 奴僕 宦者程元振をさす。【一七】 錯與權 錯は誤なり。【一八】 胡星 星のこと。又宛頭ともいふ。【一九】 星字 字も亦星なり、星名るときは「ははきぼし」、動詞なるときは星妖の耀ふことを終とも字ともいふ。安史等の禍源をさしていふ。【二〇】 對首 人民。【二一】 拘擥 ひきつけられる、軍需征敵に困しめらるるをいふ、語は西征賦にみゆ。【二二】 哀痛 漢の武帝、末年に輪臺の地を棄て哀痛の詔を下す、今借用す。【二三】 絲綸切 絲綸は詔をいふ、「禮記」衣篇に、王言如絲、其出如綸、とみゆ。詔は出た先きざきでふとくなるをいふ。【二四】 煩苛 うるさくからさ。【二五】 法令 綱鑑はへらし除くこと。代宗の永泰元年正月、制を下して己を罪す、二年十一月大赦して改元し、什政稅一の法を停む、これ哀痛切煩苛の事なり。【二六】 業成 王業のできあがること。【二七】 陳始王 始王とは中興の主といふが如き意ならんか。「詩」の序に「七月、陳王業也とあり、代宗が王業を成せし人としてうたはるるをいふ。【二八】 先喜出於政 周の文王出でて獲りして太公望に遇ふ、出遊前の卜辭に非難非難の語あり、今の「史記」は文異れり。後漢の根固が「達旨」に引ける所は非難非難とあり、杜詩の本づく所なり。事實は代宗が吐蕃に攻められて陝州へ逃れしことを文王の遊獵を借りてつくりひていへるなり。先喜とは太公望の如き賢臣を得べしとのうらかたの喜び。政は憂。【二九】 宮禁 宮中をいふ。【三〇】 經綸 政治上の計畫をたてること。【三一】 古階 三公、宰相の位をいふ。天の三台星の三階、上階は天子、中階は諸侯公卿、下階は士庶人にあたる。こゝは三台上階をいふ。【三二】 朝覲 天子をたすけ、いただく。【三三】 熊羆 熊羆呂望 上にみゆ、呂望は太公望、羆とは文王が車にのせてかへりしをいふ。【三四】 鴻雁 鴻雁周宣「詩」に鴻雁の詩篇あり、序に鴻雁美宣王也とあり、周の宣王の中興をほめた詩なり。代宗諸臣を従へて陝より京に還りしことをいへり。【三五】 劍 劍 わきから入つてにさく。【三六】 中興主 代宗。【三七】 不世賢 不世出の賢、鄭・李をいふ。【三八】 音微 微音に同じ、美善、よきたより。【三九】 一柱 一柱は一柱、荆州にあり、已にみゆ。鄭の居處をさす。數はたよりのしばしば来るをいふ。【四〇】 遊里 里程。【四一】 下半千 下半は夷陵にある關の名、已にみゆ。千とは里程の千なるをいふ、李の居處と遠からざるをいふ。【四二】

光時論 世論のうへにかがやく。【四三】 自我先 自分より以上なり。【四四】 陰何 陳の陰鏗、梁の何遜、共にすぐれたる文學者。【四五】 尙清省 尙は今日なほの義。清省は清麗簡省。【四六】 沈宋 唐初の沈佺期、宋之間、律詩に名ある人。【四七】 聯翩 ならんでとぶさま。【四八】 律 詩律。【四九】 崑崙竹 崑崙、崑崙にして大夏の西、崑崙の陰に去りて竹を崑崙谷に取らしめ之を吹きて黃鐘の宮となすと、漢書律曆志にみゆ。【五〇】 燥濕 燥濕、空氣のかわくとしめるとにより絃音に變化あり。【五一】 善價 高價なるをいふ。【五二】 價當 辭理のよくなひあたること。【五三】 忘筌 筌は「うき」、魚を釣るに魚を得ては筌を忘る。精神を得て外形を忘るること。【五四】 置驛 漢の鄭當時、驛馬を長安の諸郊に置き、賓客を送迎す。此の句鄭當時をいふ。【五五】 登龍 後漢の李膺、人々に延接せらるるものあれば名づけて登龍門といふ、此の句李之芳をいふ。【五六】 隔塵 塵の階級へだたるをいふ、作者謙遜していふなり。【五七】 塵周旋 周旋はたちまはること、交際すること、塵とは之を失ふをいふ。【五八】 高視 二人の齋眼のたかきこと。【五九】 收入表 人の顔表たるものを收貯する。【六〇】 遺女 ふかきみち。【六一】 馬來 二人のもとに集る人物を馬にたとふ。【六二】 鶴 上の馬とおなじ。【六三】 青田 青田「永嘉郡記」に云ふ、青田を去る九里、涿沐溪中に雙白鶴あり、年年子を生み、長大ならざれば便ち去り、たゞ父母一雙を留む、神仙の美ふ所なり、と。青田は鶴の産地。【六四】 羽翼 羽翼、高麗の四皓、高山より出でて太子を輔く、高祖、戚夫人を召し指し示して曰く、彼れ、羽翼已に成れり、動かしがたし、と。句意は太子の羽翼として高山より起りしをいふ。李之芳、太子賓客となる、之と似たるをいふ。【六五】 蓬萊 漢開道「後漢書」に學者、東觀(時の太學)を稱して老氏の蓬室、道家の蓬萊となす、とみゆ。句意は鄭當時が居りし處は蓬萊仙宮のごとき漢の藏書閣と近く連れるをいふ。鄭當時、藏書少監たりしによりて之をいふ。羽翼蓬萊一聯は其だ無理なる句法といふべし。【六六】 管寧 管寧の句解をみよ。彼處の皂帽を紗帽として用ひたり。【六七】 江令 江令は陳の尙書令江總。總、太子より山水納袍を賜はり賦序を作りて其の美をいふ。錦袍とは袍の麗はしきこと錦の如くなるをいふ。李之芳の仕朝をいふ。【六八】 東郡 夷陵は夔州の東にあり、故に之を東郡といへり、此の句李についていふ。【六九】 南湖 仇氏之に注して即ち鄭當時の湖亭なりとせり。而して卷二十、「秋日寄題鄭監湖上亭」三首の注には黃鶴注を引きて湖を峽州(夷陵)に在るもの如くいひなせり。余は之と見を異にし湖は江陵に在りと考ふ。鄭當時が身江陵に在ること本詩の原注に明かなれば爾も亦江陵にありと推すべきなり。又清一統志に云ふ、南湖、在江陵縣南三里、唐鄭審諱江陵、構亭其上、杜甫

く。【三〇】陶穀 晉の張華が女史箴に既陶既穀とみゆ、注に、穀は陶人の瓦器を作るをいふとあり。陶も穀も陶器瓦器を作るをいふ、以て人民を化するにたとふ。此の句諸儒を承く。【三一】曾吁 天子未明に衣をつけ日たけて食をとる、政務に忙しきなり。【三二】憂虞 しのびのため心をうごかす。【三三】黎元 人民。【三四】疾苦 疾と苦とが一緒にある。【三五】雲臺 宮苑中の高き臺、後漢の明帝の永平三年、中興の功臣を雲臺に畫く。【三六】終日 終日畫く。【三七】青簡 青き竹の札、古人紙の代りに用ふ。【三八】爲誰 鄭李の外には誰がために之を編せん。【三九】行路難 人生の行路のかたきこと。樂府の題に「行路難」あり。【四〇】招尋 「文選」の招隱詩を解きて、劉良は隱者を招尋すといへり。隱者をたづぬるをいふなり。【四一】具飛 早くばしるがちなそなふ。いつにても發船せんとするなり。【四二】控鳴弦 弓づるをひきて音をださす、盜賊などにそなへる。「自園州」劉妻子「御社」蜀山行詩の第三首の押弓落弦、控弦の句（卷十三、四九頁）をおもひあはすべし。【四三】雙峰寺 廣東韶州の南華寺をいふ。清一統志に云ふ、曲江縣南六十里にあり、と。曲江縣東南五十里に曹溪あり、六十里に南華山あり、溪の上流は南華山にして山上に南華寺あり、六祖慧能の居りし所。浦氏は曹溪には雙峰はあれども雙峰寺はなしとして、雙峰寺は道信の住せし韶州の雙峰山東山寺なりとす。【四四】七祖 禪宗達磨を初祖とす、達磨其の法を慧可に傳ふ、是を二祖とす。慧可は之を僧璨に傳ふ、是を三祖とす。璨之を道信に傳ふ、是を四祖とす。信は之を弘忍に傳ふ、是を五祖とす。弘忍は之を慧能に傳ふ、是を六祖とす。慧能、俗姓は盧氏、其の先は范陽の人、のち新州國恩寺に化す、憲宗の元和十年詔して大聖禪師と諡す。柳宗元「曹溪第六祖馬大師禪師碑」を撰す。柳河東集卷六に見ゆ。七祖については弘忍は大通に傳へ、大通は大無に傳ふ、是を北宗の六祖七祖とす。或は弘忍より統をひける神秀、普寂、神會に於て六・七祖を求め、神會を南宗の第七祖となさんとす。神會は上元元年卒す、作者同時の人なり。同時の人その當時に於て必ずしも七祖とは定められず、作者六祖に慧能あるを知り別に其の新制を求めんと欲するの意ならざるべし。浦氏は曰く、臨濟祖系を致ふるに慧能よりして下には南嶽懷讓を第一世とし而かも七祖の稱を擧げず。實は七祖なり。讓は天寶三年に示寂す。其の嗣は江西の遺一、俗稱馬祖なり、南嶽の龔公山に居る。正に作者作詩の時に當る。而して南嶽は廬山の在る所なり、下に嶺峰生轉阿といへるは正に此を指すなるべし。其の本師を推して言を立つ、故に之を尊びて七祖といふ。七祖を求むとは即ち是れ馬祖に依らんとするなり、と。これは懷讓を七祖とみる考なり。【四五】落帆 帆をおろして泊すること。何遜が詩句に落帆依暝浦とみゆ。【四六】追宿 蓋し壯年南

方の舟遊を追はんとするなり。【三七】衣褐 粗衣に甘んずるをいふ。【三六】向眞 詮は擗言なり、眞にかなへる言、眞詮は佛法なす。【三七】安石 晉の謝安が字、注にみゆる如く以て鄭に比す。【三八】昭王 燕の昭王、郭隗を用ひ黄金を臺上に置きて天下の賢士を招く。注にみゆる如く以て李に比す、李は皇族のわかれなり。【三九】寄赴 賢士、李がもとに集るをいふ。【四〇】阮籍 阮籍途窮の故事、已にみゆ。【四一】張琴 張琴張琴の故事、已にみゆ。上二句自己を比す。【四二】披紳 披紳にては、こゝにては義をなさず、一本に紳を帯に作る、従ふべし。披紳とは帯をからりとおしひらくをいふ。「世説」に、晉の衛瓘、樂廣を見て曰く、雲霧を披きて青天を踏るが若し、と。これ雲霧の散するをたとふ。【四三】景不延 景は日影、延は延長、早く雲を去るべきをいふ。【四四】風期 風をまつこと。【四五】破浪 南史に、宗慤が曰く、願乘長風、破萬里浪と。湖海に泛びてをいふ。【四六】水怪 水中の怪物。【四七】莫飛 飛は龍のよだれ。よだれを飛ばさぬは害をなさざるをいふ。【四八】他日 將來の異日。【四九】神女 巫山を去るべきをいふ。【五〇】傷春 杜鵑なきて春心を傷ましめらるるを恐るるをいふ。【五一】淡交 朋友の交りをいふ。「禮記」に君子之交、淡若水、とみゆ。【五二】澤國 南方江湖の地方。【五三】遺遺 周圓をめぐりてたちまはる。【五四】趨葉 釋迦牟尼の弟子、摩竭陀國の人、天竺二十五祖の首。【五五】藉位 藉は「よる」、假位は仙人、槐山の探藥父なり、松の實を食ひ、體に數すの毛を生じ、飛行するに走馬を逐ふ、と。【五六】嶺峰 廬山の香爐峰。【五七】生轉阿 目をむきかへるひまに生ず、すぐにも得るをいふ。【五八】橋井 湖南郴州にあり、仙人蘇耽、遺言して橋井水を飲みて夜を徹す法を教へし故事。已にみゆ。【五九】高臺 たかくかがぐ。朱注に云ふ、井は馬嶺山上にあり、故に高臺といふと。【六〇】歸鶴 仇注に丁令威遼東の鶴の故事を用ふといへり。【六一】遊路 跼蹐の地をもさばめつくすをいふ。跼蹐は後漢の馬援が故事。援、交趾を撃たんとするときその官屬に謂ひて曰く、我、浪泊、西里（南方地名）の間に在りしとき、下は浪、上は霧、毒氣蒸蒸、仰ぎ視れば飛禽跼蹐（跼蹐は蹙つる貌）として水中に墮ちき、と。【六二】妙數 佛數をいふ。妙數の説を爲すによると。【六三】卒徒 つひに前言をふみ行ふ。【六四】遠前 意。既往の過失に對する責をふさぐ。佛語に懺悔あり、懺者 懺ニ 其前愆、悔者 悔ニ 其後過、といへり。【六五】願檀 願檀丹青列宋の願檀之がつて建康（今の江寧府、南京）の瓦官寺に於て維摩詰の像を畫く。【六六】頭陀 頭陀は寺の名、鄂州（今の湖北武昌府）にありしもの、瓊瑛は美玉、寺碑の文字をたとふ、錦は「ほる」なり。齊の王子、字は簡棲、琅邪臨沂の人、頭陀寺の碑文をつくる、

文詞巧麗、世の重んずる所となる。梁の天監四年卒す。碑文は齊の時に作りしもの、全文「文選」に存す、「文選」注に云ふ、碑題して「齊國錄事參軍琅邪王昶」といふ。【二六〇】 衆香二句 寺についていふ。【二七〇】 鬚鬚 くらき鬚、鬚きこめらるるをいふ。【二七一】 幾地 どれだけの場所か、の意。【二七二】 蕭蕭 蕭はしづかなるさま、辛辛は草のさかんなる貌。【二七三】 勇猛 「物象解」に「大勇猛を發す」の語あり。【二七四】 清蕭 やせぎす。【二七五】 屏 弱なり。【二七六】 金匱空割眼 「涅槃經」に云ふ、目盲の人、目を治むるための故に良醫に造るがごとし、良醫即ち金匱を以て其の眼膜を刮る、と。【二七七】 鏡象 「圓覺經」に云ふ、諸の如來心、中に顯現すること鏡中の象の如し、と。【二七八】 未離餘 餘は衝なり、度なり。二句、朱注に云ふ、金匱、眼膜を刮り去る可しと雖も、而も鏡象を執つて以て實となさば、則ち猶未だ餘量の間を離れざるなり、と。愚案するに、金匱刮膜は高僧が妙理を説ききかせて作者の迷妄を除くたとへ、鏡象云は鏡中の象に似たる現象世界を以て實在の世界とみとむるならば、そはなほ詮議の途中にあるものにて眞の悟道に非ず、といふ意味をいへるなるべし。

【題義】 秋の日に夔州府でおもひをのべて秘書少監鄭審・太子賓客李之芳に寄せた詩。韻の數は百、全篇二百句、一千字。時に審は荊州（江陵）に在り、之芳は夷陵（宜昌）に居た。大曆二年秋の作。

【詩意】 この絶塞は烏壘の北にあたり、この孤城は白帝城のほとりにある。自分は雲安からここへうつたが矢張り今もここまで百里あまりのところでおちぶれてをり、はや三年のあひだ消渴の病にかかつてゐる。壯心の躍りたつことは雄劍が匣のふたをあけて鳴りだすごとく、羣書を滿載した船をつなぎとめていつでも出かけようとまぢかまへてゐる。騷亂にばかりあうてゐるから心はのびず、老衰のため氣力は減じて日に日にさびしいありさまである。妻子も自分の筋力いかに氣づかうて様子をたづねるし、いつのまにか春げしきを送つてとしつきがうつり去る。そのあひだ山水に登臨してみる

とさまざまの景色があり、それをみて詩篇によつて性靈を陶冶してゐる。」（先づここの風景をいふならば）大江を東ぬる如くせめつけて峽勢が湧き起つてをり、巖のうへには古い樹木が排列されてゐてその巖は圓かによこたはつてゐる。巖上の古木は高く雲を拂うて、この地の惡氣はそのうへに土ふることくふつてくるし、江水は海に朝して峽勢は吳地の天を蹴る様に走り去る。井水を煮れば早速鹽ができるし、火耕をしてはすみつこのところまであまさずひらいてゐる。時としてはよくもこんな山山がつみかさなつたものだと驚くばかり、どこにだつて平らな川などもとめようとしても有りはしない。をしどりは一對一對になつて舞ひ、彌猴はかさなりあうて樹にぶらさがつてゐる。みどりのひめかつらは帯の様に長くひつかかり、錦紋の小石は錢の様に小さくちらばつてゐる。春の草は年中つきることはなく生えるし、秋からかけての寒天の花またかあいらしい。獵をする男は屯戍のあたりで火を吹きたて、野らの休息茶屋では山の泉を引つばつて飲んでゐる。鳥のこゑに喚びおこされて頭をかきかき起きでる、杖にすがつてゐるいて幾個の足駄をはきつふしたか。兩京（長安・洛陽）にはすこしの田宅がまだあるが、天下にはひとあしさがつておともする様な先輩はみななくなつた。初めに幕府からよばれて官途に出て、幸に郎官の員にそなはることになつた。もう更代時期がきてゐるのにまだたびすまひをして、あちこちとひつばられてうき草の様にぶわぶわしてゐる。藥品だの滋養物だのがいたづらにとりちらされてゐるをり、隱居にあつらへむきの秋のすす風が吹いてきた。これで瘴

瘴の氣がおひのけられたので襟もとをひらき、雲煙のもやもやがとれたので目をあけてみはる。そのころ土地の諸侯（都督）がさかんな宴會をしてくれ上客の前に美人がでてきた。彼等がかきならす哀れな箏のねは自分の老大の心をいたませたが、りつばなおさしきに神仙の様な美人が艶なすがたをあらはした。それは昔の興慶宮でお教へになつた開元の御代の曲を當時梨園の弟子（李仙奴）が傳へて演じたのである。さすがに法曲の歌聲はふしぎに變化があり、一座のものはそれをきいてみな涙を流した。』自分は夔州のかたるなかでひとり影法師を弔うてゐるが、故郷の杜曲のことをおもつて腸はめぐつてにえくりかへる様だ。いまでは龍廐門の水は犬戎（吐蕃）のくさみを帯びてゐぬであらうか。耿弇・賈復の様な武將が王室を扶け、蕭何・曹參の様な文臣が御筵をかかへ守り、威勢に乗じて蜂蟄の悪人をほろぼし、力をあはせて鷹鷂の様に鳥や雀を逐ひまくり、むかしの文物ながらにのこつてはゐるのだが、凶徒はいまだにその悪をあらためない。國家はわるものに對しては征伐をせねばならぬが、人民はいくさごとを止めてもらひたいとおもうてゐる。奴僕からなりあがつた様なものがないで禮義を知るものか、それに朝廷は彼等に恩榮を施しあやまつて權力を興へてしまつた。原來兵亂の象である胡星（昴星）がひとたび妖氣をまとうてから、天下の人民がつひに兵役財賦のきづなしばられてしまつたのである。いまの天子（代宗）は哀痛の情切なるみことのりを下され、煩苛な法令をおのぞきあそばされた。これはちかごろでの王業をなしとげたまうたはじめの王として陳べうた

はれてよろしい。また都からそとへお出ましになつたがそれは周の女王がかりにでかけた様なもので賢臣を得らるべきよろこばしい兆がトにあらはれてゐる。宮中の御經綸もこまかなものであり、大臣宰相等も完全に君をいただいておたすけまをしてゐる。臣下は後車にのせられた呂望のごとく、君は一鴻雁の詩ではめられた周の宣王の様であらせられる。』かかる中興の君がおはすことをかけて大きくとも、一方に不世出の賢人がゐて地方で長くうたをうたうてゐるのをきく。（それは鄭李の二君だ）。鄭君の居る荊州の一柱觀の方面からはよきたよりがたびたびくる。李君の居る夷陵とはここは里程がたつた千里しかない。二君は今の世評のうへでかがやいてゐる人人でどちらも自分よりは文章はうはてである。二君の作をみれば今日なほむかしの陰鏗・何遜の清省なる風が存在してゐるが如く、二君を見れば我が唐初の沈佺期・宋之間がつづいてでたかの看がある。二君の詩律は崑崙の竹でつくつた律管の調子にたぐふべく、二君は絃音が氣の燥濕によつてちがふことまで心得てゐる。二君の風流はともに高價を有し、其の文章の辭理のよくなうてゐることはその外形をはなれて精神をつかんでゐるといふてよろしい。むかし漢の鄭當時は驛馬を買つて賓客を送迎したといふが鄭君はいまそのとほりである。後漢の李膺はこれに應接してもらへると人が龍門に登つた様だといふたが李君はいまその事實がある。自分は二君とは身分のうへから禮の階級はへだたつてゐるが、二君との交際失はぬつもりだ。二君は着眼を高くして人の師表たるべきほどの人物を收容し、心を慮しくして道の奥ふ

かきところを味うてをられる。だから二君のところへ来る馬はどれも汗血の名馬であるし、なきたつる鶴はきつと青田の名鶴である。李君は高山の四皓の様に太子の羽翼となるために高山から起つた。鄭君はかつてそのゐたところは蓬萊山の様な漢の藏書閣と近かつた。鄭君がいま江陵に居るのはむかし管寧がきよらかな紗帽をかぶつて遼東に居た様なものである。李君は太子賓客となつてゐてむかしの陳の尙書令江總が時の太子から錦袍を賜はつた様にうつくしい袍をいただいてゐる。李君は吾が東郡(夷陵)で時あつてか詩を壁にかきつけ、鄭君は江陵の南湖に在つて日日に艇をたたいてくらしめてゐる。二君は典に乗すれば遠く遊んでかけはなれた場所まででかけ、佳句をつくつて之をうつくしい體にかきつける。』自分はいつもあるあなたがたの方へひとり飛んでゆかうとおもうてゐるがいたづらにさまさまの心ばいにひきつけられてゐる。國家のあゆみでさへまだゆきなやんでゐるときだ。自分の生涯の如きはとづくにおちぶれたさまになつてゐる。ここで病んで余枕に伏してゐるために兩京の田はまつたく荒れはてたものになり、平生多少意を用ひて築いた庭園の池塘もすつかりうちすてである。親類たちと別れてゐるについてはいつもしんばいをし、伏日るとき臘節のときたえずなみだながれでる。長安の豊水・鎬水のあたりには露をふくんだ菊がまだらに咲いてゐるだらう、洛陽の澗水・瀼水のあたりには秋の野菜が影さしてゐるだらう。しかし昔のことを誰と共にかたりあはうか、また定めし人も亡くなつたであらうが新墓はどれだけのところにできたであらうか。いくら首をふり

むけてみても富貴などがくるわけはないし、またくるとしたところが小人どもとがやがや利益を争うて先鞭をつけるなどはじやまくさいことだ。兵亂のために塵埃はひろく横はつてゐる。この江漢の地方では月のみうつくしく照る。脊ぐくまりながら秋の燕がたち去るのを看、しみじみと夕蟬のなくのをじつときく。こんな生活をしてゐる今の自分だ。それをあなたがたはわたくしがわかい時から詩賦に雕蟲の技をもてあそんだことを御記憶くださつて、お手紙を寄せてちかごろの病状をおたづねくださった。』わたくしは賣卜して百錢を得て杖頭にぶらさげたといふ嚴君平を羨んでゐるものだ。わたくしの貧乏さは王獻之の様に泥棒から青毛せんをとることだけはゆるされる程度である。財布がからになれば妻のかんざしや腕環をとつて錢にかへ、米がなくなればまた花かんざしをひきさいてその代にする。八九本のたる木のひろがりの茅ぶきの書齋を設けて、あついとときは庭の柑子の樹の涼しい葉かげにやすむ。孔明の八陣圖は江北の沙岸にあるし、船着場は瀘西の高岸のところにある。まへに官職で身體をつながれてゐたころはいつも心がくだけてゐたが、このごろの閉居で病氣がすぐにもなほりさうにおもへる。はたけいぢりをして、岷嶺の柴の芋をとりいれ、吳の陸家の池の白蓮のたねをまいた。梨の實は紅くて少女の頬にもまさり、栗は豊富にとれて大きさは拳以上である。時として満腹しようとするときははうなぎを三本ほど用ふこともあるが、通常は臺所へはおかずは一品といひつけてある。異様な風俗で、隣りには胡商(?)が居る。友だちがたづねてくるには船からあがれば馬の

鞍に坐してくる。門は柴をしばつてこしらへたせまつこいものであり、水を引くには竹をわたして、そこからたまり水がたくたくしただつてゐる。塹は官田の岸までつづき、村は野廟のあき地によりそつてゐる。籬の缺けたところは、棘で補うて人やけものはひるのをふせぎ、石の倒れさうなのは藤蔓をからみつかせてもたせておく。』試みにたづねるが、役人になつてしきりに參朝謁見などするのは、かうやつて穩かに酔うたり眠つたりしてゐるのとどちらがいいか。あるきつきが遅くて他人におひつけぬなどとだれがいふか。あるきつきはおそくともこれできちんとすわることだけはたしかである。中央の郎署は香の氣にはひ、粉壁うつくしくあらうが、自分は霧雨のうちにゐて銀印にも青さびがでてゐる。そら高く翔ける紫鷺は遠近のわかちもあるまいが、自分の様な黄雀はただきままにちよこちよこ飛ぶだけである。自分は衆人にはそむいて困苦して勉學してをるが、明德ある諸公は官途へてせいせいはたらくことをつとめられるがいい。二君の如きはそのかがやく名聲は帝位をはさみ、いつしか三台の位にまでのぼられるであらう。朝廷はいま懇切に諫める匡鼎(李)を中央にとどめおかれし、また服虔(鄭)の如き儒者たちを引きよせようとしてをられる。官に仕へることは諫にあたつては君に剛直を致すことよりほかはない。儒臣となつては必ず天下を知らぬまに陶冶感化せしめるであらう。天子は宵衣旰食してしんばいの念をうごかされ、人民は困苦疾病同時にうけてをるが、雲臺のうへでは終日畫筆をふるうて丞がかるべき人を待つてゐる、歴史的功業をのせる紙頁も諸君のことを

記載するのではなくて誰のためにあみ綴るのであるか。』自分は今は行路の難などは眼中にない、はや隠者でも尋ねてあるかうといふ興味だけに専一になつてゐる。もとから快船の楫はすつかりそなへてあるし、弓づるを鳴らして盜難の豫防でもしてでかけようとまちかまへてゐる。我が身は雙峰寺でもたづねることにきめてゐるし、教の門は七祖の禪宗を求めようとおもふ。少壯時代のあとを追うて江湖に泊り舟の帆をおろし、粗衣をきながら佛法の眞理に向はうとおもふ。鄭君は晉に名の高い謝安石の様だし、李君は燕の昭王の如く多くの賓客がそのある處に赴きあつまる。自分は楮を泛べてゐるこゝと張鷟の様だが、今や行く途のゆきづまつた阮籍とはわけがちがふ。自分のゆくてには青天が開かれて雲なんぞは在りえない。ここにとどこほつてゐる時間も決して長くはない。自分は長風の吹くのを待ちうけてあくまで萬里の浪を破らう、自分の前には水中の怪物も涎を飛ばすことはない。杜鵬がなきたてて春の心を傷ましめられるのはたまらなくこはい、後日きつと自分はここの神女廟からたち去るつもりだ。ここで交つた人人とはつどふも散るも因縁次第として、自分は江湖の地方をめぐつてたちまはらうと思ふ。』自分は本來大迦葉の教により、佛教にたよるものであつて僞佞の様な神仙の教によつたことではないのだ。これから出だせばみるみるうちに香爐峰があらはれるだらう。蘇耽の桶井も高いところにはあらはれてゐる。東に走つては遼東の歸鶴をきほめ、南にゆきては馬援が鷹が曇るのために墮ちてきたといふ地方までゆきつくさう。自分は晩年に多く佛教の妙理をきいた。その説くと

ころの教をふみおこなうて過去のあやまちの責をふさがうと思ふのだ。武昌へゆけば頭陀寺の碑にりつばな文字がほりつけてある、建康へゆけば願愷之の畫がならんでゐる。そのあたりの寺寺ではたぐさんの香が焚かれてくらくたてこめてあるであらう。さだめしいろいろのところでは碧の草が芊芊としていつてゐるであらう。自分はやせぎすでからだがよわいののはしかたがないが、つまりは行をするには大勇猛心を發すのが大切なことだ。これまで高僧から妙理を説ききかされて、お經にあるごとく金の鉢で眼の膜を刮つた様にすこしは迷妄がはれかけてはゐるのだが、いかにせん、まだ鏡中の物象の様な現象の世界をみて實在の世界と考へてゐる様なことで眞の悟道の境地には達してゐないのである。(だからひとつ大勇猛心をおこさうとおもふのである。)

寄劉峽州伯華使君四十韻

劉峽州伯華使君に寄す 四十韻

峽内多雲雨。秋來尙鬱蒸。
 遠山朝白帝。深水謁夷陵。
 遲暮嗟爲客。西南喜得朋。

哀猿更起坐。落雁失飛騰。

伏枕思瓊樹。臨軒對玉繩。

青松寒不落。碧海闊逾澄。

昔歲文爲理。治羣公價盡增。

家聲同令聞。時論以儒稱。

太后當朝肅。多才接迹昇。

翠虛捎颺颺。丹極上鯤鵬。

宴引春壺酒。恩分夏簟冰。

雕章五色筆。紫殿九華燈。

學竝盧王敏。書偕褚薛能。

老兄眞不墜。小子獨無承。

近有風流作。聊從月窟峽。

放蹄知赤驥。振翅服蒼鷹。

哀猿更起坐、落雁飛騰を失す。

伏枕瓊樹を思ふ、臨軒玉繩に對す。

青松寒くして落ちず、碧海闊くして澄みゆ。

昔歲文爲理〔治〕を爲す、羣公價盡く増す。

家聲令聞を同じくす、時論儒を以て稱す。

太后當朝肅たり、多才迹を接して昇る。

翠虚に颺颺たれ、丹極に鯤鵬上る。

宴には引く春壺の酒、恩は分つ夏簟の冰。

雕章五色の筆、紫殿九華の燈。

學は竝ぶ盧王の敏、書は偕なり褚薛の能。

老兄眞に墜さず、小子獨り承くる無し。

近有風流の作有り、聊か月窟〔峽〕より徴せらる。

放蹄赤驥を知る、振翅蒼鷹に服す。

卷軸來何晚。襟懷庶可憑。
會期吟諷數。益破旅愁凝。
雕刻初誰料。纖毫欲自矜。
神融躡飛動。戰勝洗侵陵。
妙取筌蹄棄。高宜百萬層。
白頭遺恨在。青竹幾人登。
回首追談笑。勞歌踟寢興。
年華紛已矣。世故莽相仍。
刺史諸侯貴。郎官列宿應。
潘生雲閣遠。黃霸璽書增。
乳贖號攀石。饑驅訴落藤。
藥囊親道士。灰劫問胡僧。
憑久烏皮拆。簪稀白帽稜。

卷軸來る何ぞ晚き、襟懷庶はくは憑る可けむ。
會す吟諷の數なるを期す、益、旅愁の凝れるを破らむ。
雕刻初めより誰か料らむ、纖毫も自ら矜らむと欲す。
神融けて飛動を躡む、戰勝ちて侵陵を洗はむ。
妙は筌蹄を棄つるに取る、高は宜しく百萬層なるべし。
白頭遺恨在り、青竹幾人か登る。
回首談笑を追ふ、勞歌寢興に踟す。
年華紛として已んぬ、世故莽として相仍る。
刺史諸侯貴し、郎官列宿に應ず。
潘生雲閣遠し、黃霸璽書増す。
乳贖號びて石を攀ぶ、饑驅訴へて藤より落つ。
藥囊道士に親み、灰劫胡僧に問ふ。
憑ること久しくして烏皮拆く、簪すること稀にして白帽稜あり。

林居看蟻穴。野食待魚罾。
筋力交彫喪。飄零免戰兢。
皆肯爲百里宰。正似六安丞。
姪女縈新裹。丹砂冷舊秤。
但求椿壽永。莫慮杞天崩。
鍊骨調情性。張兵撓棘矜。
養生終自惜。伐叛必全懲。
政術甘疎誕。詞場愧服膺。
展懷詩誦魯。割愛酒如澠。

林居蟻穴を看る、野食魚罾を待つ。
筋力交、彫喪す、飄零戰兢たるを免れむや。
皆肯て百里の宰と爲らむや、正に六安の丞に似たり。
姪女新裹縈る、丹砂舊秤冷かなり。
但だ求む椿壽の永きを、慮る莫し杞天の崩るるを。
骨を鍊りて情性を調へ、兵を張りて棘矜を撓ましむ。
養生終に自ら惜む、叛を伐つ必ず全懲せむ。
政術疎誕を甘んず、詞場服膺せらるるを愧づ。
懷を展べて詩魯を誦す、愛を割く酒澠の如くなるに。

咄咄寧書字。冥冥欲避矰。
江湖多白鳥。天地有青蠅。

咄咄寧そ字を書せむや、冥冥矰を避けむと欲す。
江湖白鳥多し、天地青蠅有り。

【字解】「二」劉峽州伯華使君。峽州の刺史劉伯華なり。峽州は今の湖北宜昌府、使君は刺史に對する敬稱。伯華は字ならん、名は

寄劉峽州伯華使君四十韻

詳ならず。劉允濟が子孫とみゆ。允濟が事は後の關係下にいだす。【三】 峽内 三峽のうち。【四】 夷陵 即ち峽州、劉伯華の居る處。【五】 遲暮 晩年。【六】 西南冥得朋 西南とは都よりさして西南、蜀地をいふ。朋は伯華をさす。西南得朋は「易」にみゆ。【七】 猿 雁 自己の境遇をたとふ。【八】 瓊樹 崑崙山にある玉樹、伯華の人物の美をたとふ。【九】 玉繩 星、卷十八(一四四頁)をみよ。【一〇】 青松 碧海 仇注に青松は其の勁節を比し、碧海は其の寛量を比すといへるも、恐らくは鏡湖にとどまるならん。【一一】 文爲 理は治なり。朝廷、文徳を以て政治をなせしをいふ。【一二】 翠公 當時の顯官。【一三】 家聲 一家の名聲。【一四】 同令聞 令聞はよきこと、ひやうばん。作者の祖父杜審言が伯華の祖父劉允濟と同じくよきひやうばんありしをいふ。允濟は博學にして善く文をつづり、垂拱四年に明堂賦を上り武后に褒美せられ著作郎に拜せらる。杜審言亦武后の朝に膳部員外郎となる。來俊臣が貶せらるるや二人共に中宗の朝に修文館學士となる。【一五】 以備稱 儒者としてたてたへた。【一六】 太后 則天武后。【一七】 當朝 嚴肅に朝政にあたる。【一八】 接逢昇 つぎつぎとくつついて官位に升る。【一九】 翠成 青空、青天の義、朝廷をさす。【二〇】 捐題 怪物が撃たれる。時の權臣來俊臣が撃たれしをいふ。【二一】 丹梯 丹梯・紫極・宸極等の語はみな宮廷をいふ。【二二】 上殿 魏馬は大魚大鳥、莊子にみゆ、允濟・審言等をいふ。胡震亨は劉憲が事蹟を引ききて伯華の祖は憲なるべしといへるも諸家多く允濟ならんといへり。審言が子杜升、人を殺して其の座に殺さるるや允濟、升を祭る文を作りし等の關係あるによりて考ふれば允濟説當を得るに似たり。故に之に従ふ。【二三】 五色筆 江淹が故事。【二四】 九華燈 一基に九個つけし燈。【二五】 盧王 盧照隣・王勃、初唐四傑中の人。【二六】 緒辭 緒達良・薛稷、唐初の書の名家。【二七】 老兄 伯華をさす。【二八】 不離 家聲をおとさす。【二九】 小子 自己をいふ、父祖に對する稱。【三〇】 無承 父祖の業を繼承するなし。【三一】 近有風流作 聊從月窟微 舊解はみな劉詩に就きていふとなす。恐らくは非なり。劉詩として聊の字微の字をいかに解かんとするや。作者の詩として見るべきなり。月窟は劉延年詩句に月窟來賓とみゆ。注に窟は窟なりとあり。月窟は崑崙と併稱せられ西極の仙境とせらる。巫峽を比していふならん。又窟を峽に作れるによれば月峽とは明月峽にして重慶府巴縣東北にある峽なり。夔州よりは上流にあたる。巫峽(巫峽は夔州よりはすこしく下流)にしても月峽にしても近地の峽をあげて自己の居處を示せるなり。【三二】 微 伯華から求められしこと。【三三】 放語 二句 伯華の力量をいふ。收語二字は赤驥にかゝる、放語とは馬蹄を放じてかけるなり。【三四】 知赤驥 赤驥は周の穆王の駿馬、知は作者が知る。【三五】 誤題 是れを訂正す、たかの

とぶさま、此の二字若塵へかかる。【三六】 服若塵 若塵はたか、服は作者が屈服する。【三七】 卷翰 伯華の詩の卷きもの、自己の詩をさきにやりしにより先方の答詩を待つなり。【三八】 襟懷 襟懷 ころ。【三九】 運 たる。【四〇】 會期 會は必。【四一】 願 以下四句は彼我の競争をいへり。【四二】 初誰料 これを意料のうちにおかざるをいふ。【四三】 自矜 矜は誇なり。【四四】 神融 精神造化と融合す。【四五】 騁飛動 活動の極に立つをいふ。【四六】 戰勝 あひてにかつこと。【四七】 洗侵陵 あひてからすこしも侵されし(侵) があることなき様にする。【四八】 妙取 以下四句は到底伯華に若かざるべきことをいふ。妙取とは最妙は云云なることをとりえとするの意。【四九】 笠跡 笠跡 莊子に、笠者、所_レ以取_レ魚、得_レ魚而忘_レ笠、蹄者、所_レ以取_レ兔、得_レ兔而忘_レ蹄、とみゆ。笠はうけ、蹄は兔のひづめをひつかけるわな。笠跡を棄つとは字句の形骸を去りて精神を發する目的を達することとたふ。【五〇】 高俗流を超越するたかき。品格の高遠なるをいふ。妙取二句は制作の理想にして伯華之に近く、自己は之に及ばずとするなり、故に下句あり。【五一】 白頭 自己の老境をいふ。【五二】 青竹 舊注にいふ、即ち青簡、汗簡なりと、書物の簡札をいふ。【五三】 幾人登 登の字記載されて史上にのぼるをいふ。【五四】 追談笑 追は追思する。【五五】 勞歌 歌吟を勞す、歌吟といふてまをかける。【五六】 調せぐくまる。【五七】 衰興 れたりおきたり。おちつかぬさま。【五八】 年華 年光、年月のこと。【五九】 紛已矣 諸事紛亂のうち経過了る。【六〇】 世故 世間の事故。【六一】 莽相仍 莽は多くてくらき貌、仍とはつぎつぎに來るをいふ。【六二】 刺史 諸侯貴諸侯の如く貴きをいふ。此の句劉をさす。【六三】 郎官列宿 後漢の明帝の館陶公主、子のために郎を求む、帝許さず、錢を賜ひて曰く、夫れ郎官は上列宿に應じ、出でて百里に幸たり、其の人に非ざれば民、其の殊を受く、と。郎官は天上の星と相應じ貴きものなるをいふ。此の句自己をさす。【六四】 潘生雲閣遠 晉の潘岳が秋興賦序に、余以_レ太尉掾、兼_レ虎賁中郎將、寓直_レ於散騎之省、高閣連_レ雲、陽景_レ照_レ曜、とみゆ。此の句上の郎官の句を承く、潘岳を以て自ら比す。潘序にては雲閣は散騎省の閣をさすとも、詩は借りて中央の郎官の署の閣にあてて用ふ。自己みや、に在らざるゆゑに遠といふ。仇注に劉の事とせるは誤。【六五】 黃鶴 漢の黃鶴、顯川太守として台名あり、宣帝鳳書を賜ふ、已にみゆ。此の句上の「刺史」の句を承く、劉をさす。増とは一回にとどまらざるをいふ。【六六】 乳蟹 乳虎の意、蟹は「爾雅」の注に、西海大秦國に出で、狗に似て力多く猛悪なりとあり。【六七】 鷹 鷹はムササビ。【六八】 道士 道教の教士、藥を採る。故に之と親しむ。【六九】 友劫 曹毗が「志怪」に云ふ、漢の武帝昆明池を穿つ、極めて深きに、悉く

寄劉峽州伯華使君四十韻

是れ灰塵にして復た土あるなし。以て東方朔に問ふ、胡曰く、臣愚以て之を知るに足らず、西域の僧に問ふべしと。後漢の明帝の時、外國の道人洛陽に来る。朔が言を憶ふものあり、試みに灰塵を以て之に問ふ。其の人曰く、經にいふ、天地大劫時に盡きんとすれば劫焼ありと、此は劫焼の餘なりと。劫は佛教にいふ非常に永き時間なり、一劫に火焼ありて物を焚きたる灰が劫灰なり、灰劫は灰の生ずるだけの劫の時間をいふ。【六九】胡僧 西域より來れる僧。【七〇】遷久 遷はよりかかるをいふ。【七一】鳥皮拆 鳥皮は鳥皮凡、熊革をかぶせたりたる脇息、拆とは革の破れしをいふ。【七二】管稀 冠帽をかぶるにはとめとして管をさす、管稀とはめつたにかんざしたることをいふ。【七三】白帽後 後には「かど」、かぶらぬ故に「かど」そのままにあり。【七四】蟻穴 ありづか。【七五】魚唇 唇はよつてあり。【七六】形喪 しほみうせる。【七七】免職 免は不免の意。職は職職職の略、恐懼戒慎の意、語は「詩經」にみゆ。【七八】皆爲百里宰 諸家誤あらんといふのみにて定説なし。皆の字或は昔に作り、或は昔(時字の古體)に作る。余は青の字の誤には非ざるかと考ふ。暫く之によりて解く。此の句は上の郎官列宿應より脈をひきてのぶ。百里の宰とは縣令をいふ、郎官なれば出でて縣令となり得るものなれどもあへてならざるなり。【七九】六安丞 後漢の桓譚、光武帝が職を用ふるを諫む、帝大に怒り、出でて六安郡の丞となす。六安は壽州安豐縣の南。作者郎官にして夔州に居るは桓譚が六安に在ると似たりといふなり。【八〇】純女 魏伯陽が「參同契」に云ふ、河上純女、靈而最神、得火則飛、不染垢塵と。又曰く、丹砂木精、得金乃并と。漢真人大丹訣に曰く、純女隱在丹砂中と。注に云ふ、純女とは汞なり、汞は水銀なり、水銀の異名を純女と呼びしなり。道家の鍊金丹にては水銀、鉛、汞(丹砂)などを火にかけて黄金や丹藥を造らんとす。故に純女を要す。【八一】藥新 藥は藥袋、藥とは身のまはりにはころころしてあるをいふ。【八二】丹砂 道家にては七十二石中の至尊のものとす。用は上に分ゆ。【八三】冷蒼 蒼とはかりにかけたものが久しく使用されずにあるをいふ。【八四】椿樹 大椿といふ樹が八千歳を春とし八千歳を秋とすること「莊子」にみゆ。【八五】紀天崩 紀は國の名、紀國に人あり、天地崩壊して身寄する所なからんことを憂ふ、と「列子」にみゆ。こゝは國家の亂亡をいふ。【八六】張長機 此の句及び下の「伐叛」の句はみな養生のうへについていへり。仇氏は劉が政治上に亂を懲らすべきをいふものとせるは、今取らず。張長とは、こちらが兵勢を盛に設くるなり、機とは秦末に陳涉韓彭を奮ひて兵を起す、叛の犯なり。叛軍のもつもの、機はたわます、堂堂たる陣勢を以てす、こゝの病勢をへ、こゝをいふ。【八七】伐叛必全 叛は外物の體を害するものをいふ。

我は養生によつてかかる害物を伐つて全くこらしめる。【八八】疎 疎、うとく、とりとめなし。【八九】服膺 むれにつける。語は「中庸」にみゆ。劉が自己を敬してその説に従ふをいふ。【九〇】展懷 作者が自己のおもひをのぶるをいふ。【九一】詩語 詩は一に頌に作る、同音字なり。語は吟詠、頌は頌揚と區別すれども偶然たる區別なし。いづれにても通ず。善とは「詩經」に各頌ありて善の君の徳をほめうたへり。作者今劉が刺史たるを以て之を諸侯に比し(前に刺史諸侯の句あり)諸侯のうちにては之を善侯に比したるなり。詩とは作者のこの篇をさす。仇氏劉が詩についていふといへるは今取らず。【九二】割愛 吾が愛するものを割きてすつ、作者の注にみゆる如く消渴の病あるによりて酒を止めしなり。【九三】酒如瀾 瀾は水の名、有酒如瀾、有肉如瀾、は「左傳」にみゆ。已にみゆ。【九四】咄咄 咄咄、晉の殷浩、廢せられて長安にあり、終日常に空に畫きて字を作る。揚州の吏人竊に視れば唯だ咄咄怪事の四字を作るのみ。【九五】冥冥 冥冥、弋者何、其焉と揚子法言にみゆ。増はいぐるみ。鳥をとる器。【九六】白鳥 同雲のたぐひをいふ。蚊蚋をいふとする説は此には關係なし。【九七】青蠅 あなばへ。「詩經」に「青蠅」の詩あり、青蠅が白きものを汚すを以て小人の君子を誣するものになとへたり。

【題義】 峽州(夷陵)の刺史である劉伯華に寄せた詩。大曆二年の作なるべし。

【詩意】 三峽の内には雲雨が多く、秋からかけてまたむしあつた。遠方の山山は白帝城に向つてくる、深い水は夷陵へと流れる。自分は晩年にあたつてなげかはしくもかかるところで旅人となつてゐるがうれしいことにはこの西南の蜀地でもだちを得た。自分はあはれな猿の様に起きたり坐つたりかはるがはるし、またそらから落ちた雁のごとくうへへとびあがることができなくなつた。それで病んで枕に伏しつづ玉樹にも比すべきあなたのことをおもひ、のきにさしかかつて天の玉繩星とうちむかうたりする。みれば青青とした松は寒空になつても葉がおちず、碧の海水(江水)はひろくていよいよ

よすみわたつてゐる。」昔は我が唐朝は文徳で天下を治め、いろいろのすぐれた人物がみな高い價を増してゐた。そのときあなたの家と自分の家との評判は同じ様によく、世間では儒者だとしてたへてゐた。則天太后が朝政に當らるるや嚴肅であつて、その時には才能の多くある人人はあひついで官位にのぼつた。彼の魍魎の様なわるものがあをぞらでうたれたときには、鯢鵬の様な我々の祖父たちも宮廷のうへにとのぼることができた。御宴の時には彼等は春の酒つばのさけを引きよせてのみ、おぼしめしによつて夏の簞で氷をお分けしていただいた。彼等は紫微の宮殿で九華の燈を點し、五色の筆を以てうるはしい文章をつづつた。彼等は學問は盧照隣・王勃の捷敏とならび、書蹟は褚遂良・薛稷の能書とならぶくらゐであつた。老兄は眞にその祖風を失墜せぬものであるが、小子だけは祖風を繼承することができぬ。」自分はちかごろ風流な詩をつくつたところがそれをあなたはこちからからもとめになつた。自分はあなたが自由に蹄をとばす赤驥であることを知つてをり、翅をねちらしてとぶ蒼鷹であることには敬服してゐるものである。わたくしの詩に對してあなたの詩卷はなせにかくもいつまでもこのぬのか、わたくしはそれがきたならばそれでここをなぐさめようとあてにしてゐるのである。わたくしはそれをたびたび諷吟しようと思つてまぢかまへ、それでいよいよ旅の愁のこりかたまつたのをうち破らうとかがへてゐるのである。詩人が詩を作るにだれが辭句を彫刻することをはじめからかかんがへるものか、すこしばかりのところでも得意のところがあればそれで自分でゐばらうとす

るのである。得意のところでは精神は萬化ととろけあひ、活動の絶頂に立つ。あくまで敵をうちまかして敵の侵してくるのを除き去らうとするのである。妙の極致は筌蹄を棄てて魚と兔とを得ることだ。品格の高いことは常人より百萬層もうへにでなければいけない。(と申すは理想であつて)この白頭の老人にとつてはさうはいかぬといふ遺憾が在る。あなたの様な人でなければ青史のうへにいくんのぼることができようぞ。」自分はふりかへつて往時あなたと談笑をともにしたことを追思し、歌吟をしながらせなかがかめて寝たり興きたりしてゐる。年の光は事のみだれにすぎ去つてしまひ、世間の事故は依然としてたくさんくつついてくる。あなたは刺史の官だから諸侯の様な貴さである。自分は郎官だから天上の列宿と應じたものだ。ただあなたは黃霸の様にたびたび天子から璽書を賜はるが、自分は潘岳の様なもので中央のやくしよとはかけはなれてゐる。」ここでは乳虎がほえながら石をよち、腹をへらしたむささびがものをいひながら藤づるからおちてゐる。自分は藥囊をたづさへては道士と親しみ、世界の壞生の理については胡僧にたづねたりする。あまりながくよりかかつてゐるために黒革をきせた脇息は皮がさけ、めつたに響をさしてかぶらぬから白い帽はかどめが正しくついてゐる。林間の住居をしては蟻の穴をみたり、野らの食物をとるためには魚のあみを待つてゐる。筋肉の力はだんだんなくなる。おちぶれた生活ではおづおづせざるを得ぬ。これでどうして郎官だからとて縣令などになれるものか、ちやうど六安の丞にながされた桓譚みた様なものである。」自分の

身のまはりには姪女（永、水銀）の新袋がとりかこみ、いつか以前にはかりにかけた丹砂がつめたく横はつてゐる。いまはただ大椿の様ながい壽命を得たいとおもうてゐるだけで、杞の國の天上が崩れておちようとそれをしんばいすることはない。骨を鍊つて情性をととのへ、堂堂の陣勢で棘をもちだす様な叛徒をへこませ、あくまで自愛して養生をして、叛軍はすつかりこらしめるつもりである。自分は政術に對しては疎誕であるがそんなことはなんともおもはぬ。文章の世界であなたがわたくしの言ふことを守つてきくなどといふことは、それに對しては愧づかしくおもふ。ここに政治についてはおかつてに自分のおもひをのべてあなたの徳をほめる。またちかごろは病のため川水の様になくほどの酒があつても、そのすきな酒はやめてのまぬことをおしらせする。國事に斷念してゐるから腹浩の様に咄咄怪事などいふ文字をかくことはしないし、ただくらいそらに遊んでいぐるみに射とめられぬやうにしたいとおもふ。江湖の方をみれば鷗や鷺や白い鳥がゐてそれを友としてあそぶことができる。他方にこの天地には青蠅といふいやなものがをる、どうして青蠅を避けて白鳥のなまじりをせずにおられようか。

秋清

秋清

高秋蘇肺氣、白髮自能梳。

高秋肺氣蘇す、白髮自ら能く梳づる。

藥餌憎加減、門庭悶掃除。

藥餌加減するを憎む、門庭掃除に悶ゆ。

杖藜還客拜、愛竹遺兒書。

杖藜還た客を拜す、竹を愛して兒をして書せしむ。

十月江平穩、輕舟進所如。

十月江平穩ならば、輕舟進めて如く所のままにせむ。

【字解】 一、秋清、清は清涼、すすしきなをいふ。二、高秋、高とは天の高きをいふ。三、蘇、よみがへる。四、悶掃除、病後ゆるみ癒接にもものうきなり。五、杖藜還客拜、拜、客還杖藜の意。客を拜するは來訪の客を送りだすとき拜送の禮をなすなり。六、遺兒書、竹の發生の年時を記せしむ。

【題義】 秋すすしくなりしときのことをよんだ詩。大曆二年秋の作。峽を出づる意物勃たるを見る。

【詩意】 天高い秋になつて肺のぐあひがよみがへつた様だ。それで白髪もじぶんひとり手どとかれる様になつた。藥や滋養物はひとりで加減するのがいやだし、門や庭の掃除はうるさい。お客がかへるときはやつぱり藜をついて送らねばならぬ。竹はかはいいから子供をやつて年月を記させておく。十月になつて江水が平穩になつたら輕舟を放つてきままにゆけるところまでやつてみよう。

秋峽

秋峽

江濤萬古峽、肺氣久衰翁。

江濤萬古の峽、肺氣久衰の翁。

不寐防巴虎。全生狎楚童。
 衣裳垂素髮。門巷落丹楓。
 常怪商山老。兼存翊贊功。

寐ねずして巴虎を防ぐ、生を全くして楚童に狎る。衣裳には素髮垂る、門巷に丹楓落つ。常に怪しむ商山の老、兼ねて翊贊の功を存せしを。

【字解】(一)秋。秋は星唐秋をいふ。(二)巴虎。土地の虎、夔州は古の巴國。(三)楚童。楚地のしもべ、信行、阿段の徒。
 (四)商山老。商山の四皓、しばしばみゆ、秋日夔府詠懷。詩の羽翼商山起の句解をみよ。(五)翊贊。たすける。

【題義】秋の瞿唐峽の生活について感のをふ。大曆二年の作。

【詩意】萬古江濤のわきたつてゐる峽。肺の病氣をもつてながなが衰へてゐる老人。自分は夜もねずに虎を防禦してゐるし、楚地のしもべなどに狎れ親しみながら生命を全うしてゐる。じぶんの衣裳にはしらがが垂れさがつてゐる。門のみちのあたりにはあかひもみちが落ちちつてゐる。自分はいつもふしぎにおもふのは昔商山の四人の老人はあんなに山に隠居の身でありながら兼ねてまた漢室の功業を翊贊するの功があつたことだ。

搖落

搖落

搖落巫山暮。寒江東北流。

搖落巫山暮る、寒江東北に流る。

煙塵多戰鼓。風浪少行舟。

煙塵戰鼓多く、風浪行舟少し。

鵝費羲之墨。貂餘季子裘。

鵝は費す羲之が墨、貂は餘す季子の裘。

長懷報明主。臥病復高秋。

長く懷ふ明主に報いむことを、臥病復た高秋なり。

【字解】(一)搖落。秋の木の葉の風にゆられおつること。(二)巫山。近地をあぐ。此の句ありとも巫山にての作にはあらず、夔州にての作なり。(三)煙塵。一句。趙注に云ふ、大曆二年九月、吐蕃雲州に寇し又邠州に寇し、郭子儀涇陽に屯す。又桂州の山獠反す。これ戰鼓多きなりと。(四)鵝。一句。山陰の道士、好鵝を愛ふ、王羲之鵝を愛して之を求む、道士、道徳經を寫さばすべて鵝らんといふ、羲之欣然寫し畢りて鵝を籠にして歸る、と。作者書を以て鵝に易ふるをいふ。(五)貂。貂餘一句。蘇秦が故事。季子は秦が字。已にみゆ。(六)長懷。長は常なり。

【題義】木の葉のおつるころの感のをふ。大曆二年秋の作。

【詩意】木の葉がおちて巫山のあたりがくれかかると、さむざらの江水は東北に流れてゆく。煙塵みなぎつて戦鼓のおとが多く、風浪が起つて行く舟はすくない。自分は王羲之の様に墨で字を書いてやつと鵝をもらひうける。皮ごろもは蘇秦がきふるした様な貂のころもがわづかにのこつてゐる。いつも明天子の御恩に報いたいとおもつてゐるのだが、病にふしながらまた秋になつてしまつた。

峽隘

峽隘

聞說江陵府。雲沙靜眇然。

聞說江陵府、雲沙靜にして眇然たり。

白魚如切玉。朱橋不論錢。白魚切玉の如く、朱橋錢を論せずと。
 水有遠湖樹。人今何處船。水に遠湖の樹有り、人は今何處の船ぞ。
 青山各在眼。卻望峽中天。青山各、眼に在り、卻つて望まむ峽中の天。

【字解】 一、峽。隘はせまし、せまくして居りがたきをいふ。二、江陵府。荆州をいふ。三、雲沙。雲の横はる平沙、江岸のひろきをいふ。四、遠湖樹。遠き湖水のほとりの樹。南湖その他をいふならん。五、人今。書注に人を作者自身をいふとするは疑ひがたし。仇氏は弟觀をいふとなせり。しかし觀なるや、友人鄭審の如きをさすものなるや、文面のみにては詳ならず。自己の意中の人たることは明なり。六、青山二句。此の二句の解も書説首肯しがたし。余は歸見によりてとく。七、各在眼。彼我各一の眼裏に青山存す。八、卻望峽中天。峽中天は我の居る所、卻とは彼は彼の地にある青山を望まず、かへつてこちらの我のある青山（即ち峽中の山）を望むならんとの意。我の彼を望むはもとよりのことなり、先方がこちらを思ふならんとなまで深く推測せしが本篇の情に深きところなりと余は考ふるなり。

【題義】 峽中せまくして居りがたきを歎じたる詩。大曆二年秋の作。

【詩意】 きくところによると、江陵府は眇然とはるかに雲沙が靜によこたはつてをり、白魚は玉を切つたごとく、あかい橋は錢を論せずやすいところである、と。水についてかんがへると彼處には遠湖の樹があるといふが、自分のおもうてゐるあの男は今ごろはどこの船に乗りつつあるのやら。彼も我もめいめい青山をみてるが、自分のもとより彼のゐる方の青山をながめやるけれども、彼はまたかへつて自分のゐるこちらの峽中の天をながめてゐることであらう。

杜少陵詩集 卷二十

秋日寄題鄭監湖上亭三首 秋日鄭監が湖上の亭に寄題す 三首

碧草違春意。沅湘萬里秋。碧草春意に違ふ、沅湘萬里秋なり。
 池要山簡馬。月淨庾公樓。池は要ふ山簡の馬、月は淨し庾公が樓。
 磨滅餘篇翰。平生一釣舟。磨滅餘篇翰を餘す、平生一釣舟。
 高唐寒浪滅。髣髴識昭丘。高唐寒浪滅す、髣髴昭丘を識る。

【字解】 一、鄭監。秘書少監鄭審、今は請せられて荆州江陵に在るなり。二、湖上亭。南湖のほとりの亭、黃鶴が南湖を峽州（夷陵）に在りとする説の非なること前に已に辨ぜり。三、碧草違春意。仇注に云ふ、草非。春意、楚地皆秋矣、と。これは草、春意を失ひて秋草となりたりとの意なるべし。愚案するに違春意とは何ぞや。春の意は草を以て春のみ碧なるべきものとす、しかるに今草は秋なるに尙且つ碧なり、これを春の意に違ふといふなり。換言すれば草は春の意に背きて秋にかかはらず依然として碧なるをいふ。即ち「秋日題鄭監湖上亭」詩の「春草何曾歇」と同意。四、沅湘。沅水は湖南辰州府西南五里にあり、源は四川の播州に出づ。湘水は長沙府の西にあり、城を環りて下り沅州に至りて沅水と合し、衆流を會して洞庭湖に達す。二水は荆州と水路のつづきなるによりてひろくかけいでいへり。五、池要。要は道、「むかふる」なり。六、山簡馬。晉家池と共に已に屢々解せり。七、庾公樓。晉の庾亮、武昌に在

り、諸佐吏股活の徒、秋夜に乗じて共に南樓に登る、俄にして覺えず亮至る、諸人將に起ちて之を避けんとす、亮徐るに曰く、諸君住すべし、老子此の處に於て興復た淺からず、と。便ち胡床に據りて浩等と談詠夕を竟ふ。諸家山簡・庾亮を共に鄭監に比すとす。余は山簡は荊州の武官の長をさすならんと考ふ、庾亮は鄭審をさすなるべし。【八】唐詩餘論。諸家明解なし。余は古詩の鑿書懷袖中、三處字不減、の意を用ひしもの考ふ。古詩は不減を以て書を受護せしことないへるが、この詩は唐詩を以て愛撫をいへるなり。鄭監は鄭の作者に寄せし詩篇をいふ。【九】一釣舟。自己つれに釣舟を具ふるをいふ。【一〇】高唐。高唐觀なり。眞の高唐觀は雲夢に在りしならんといふ。これは通俗の説によりて巫山縣西北に在るものをさす。【一一】寒浪減。さむざらの浪すくなくなる。【一二】雙龍おぼろに。【一三】昭丘。楚の昭王の墓の在る所、荊州當陽縣東南七十里にあり。彼地の名所をあぐ。

【題義】 秋の日に秘書少監鄭審が荊州の南湖のほとりの亭に寄せ題した詩。大曆二年秋の作。

【詩意】 荊州はここと萬里をへだてた沅水・湘水へかけて秋であつて、春の意にはそむくが草は依然として碧である。こんなところゆるあなた池では長官の山簡の馬をむかへるであらう。また庾樓に比すべきあなたの樓には月の光がきよらかであるであらう。自分はあなたからもらつた詩篇をもつてゐるが、それは愛撫のあまりもはやすりへつてなくなるほどである。しかしいつも自分は一の釣舟を用意してゐる。高唐のあたりでさむざらの浪が減つてきた。で、峽を下つてあなたの方へ出むかぬ今からはやおぼろにあなたの方の昭丘がわかる様な氣がする。

【二一】

新作湖邊宅、還聞賓客過

新に作る湖邊の宅、還た聞く賓客の過ぎるを。

【二二】

自須開竹逕、誰道避雲蘿。

自ら竹逕を開かむと須つ、誰か雲蘿に避くと道ふや。

官序潘生拙、才名賈傅多。

官序潘生拙なり、才名賈傅多し。

捨舟應下地、隣接意如何。

舟を捨てば應に地を下するなるべし、隣接せむとす意如何。

【字解】 【一】開竹逕。漢の壽陽が故事。湖、竹下に三徑を開き、ただ羊仲・求仲之に従ひて遊ぶ、と。【二】避雲蘿。避は人をさくるなり、雲蘿は雲のよこたはるひめかづら。【三】官序潘生拙。自己をいふ。「秋日聖府詠懷」詩の潘生雲閣連の句互置すべし。仇氏は「潘生を自喻とするは顧注已に其の非を辯せり」といへるも顧注卻つて非なり。【四】才名賈傅多。鄭をいふ。賈傅は漢の賈誼、洛陽の才子と稱せらる。のち長沙王の大傅に貶せらる。

【詩意】 あなたは新に湖邊の宅を作つたさうだ。またそこへお客がたくさんくるといふことを聞いた。あなたはみづから竹逕を開いて人を迎へようとしてをられるのだ。雲蘿のかげに人を避けるなどとはだれがいふのか。自分は潘岳の様に官途の仕序はつたないが、あなたは貶謫されても賈誼の様に才名が多い。自分は峽をくだつて舟をのりすてたならきつとそちらで土地を下して住むであらう。そのをりはあなたとなりあひにくつついてすまはうとおもふがあなたのおこころはどうであるか。

【三三】

暫阻蓬萊閣、終爲江海人。

暫く阻つ蓬萊の閣、終に江海の人と爲る。

揮金應物理、拖玉豈吾身。

揮金物理に應ず、拖玉豈に吾が身ならむや。

秋日寄題鄭監湖上亭三首

羹煮秋蓴滑。盃凝露菊新。
羹は煮る秋蓴の滑なるを、盃には凝る露菊の新なる。
賦詩分氣象。佳句莫頻頻。
賦詩氣象を分たば、佳句頻頻たらざる莫らむや。

【字解】 〔一〕 羹菜羹。蔬書の府をたとへいふ。『秋日夔府詠懷』詩の蓬萊漢閣連の句解（卷十九、二六九頁）をみよ。〔二〕 江海人。荆州の人たるをいふ。〔三〕 揮金。漢の疏廣・疏受、官を辭し郷にかけり天子の賜金を親族に賑はせしこと。〔四〕 應物。事理にかなふをいふ。張協の詩句に揮金樂當年ことみゆ。〔五〕 推玉。西征賦に推玉の語あり。玉佩をひくをいふ。〔六〕 豈吾身。仇氏は「吾」を鄭審に即してみたり。余は作者ならんと考ふ。本題三首、前二篇の第五第六句は鄭と自己とを分敘す、此亦然り。〔七〕 秋蓴。滑。暗に晉の張翰が故事を用ふ。〔八〕 露菊新。暗に陶淵明が詩意を用ふ。露菊は露をふくめる菊花、新とはその花を新に述べし酒をいふ。酒ゆふ上に露とあり。淵明が詩に云ふ、秋菊有佳色、露漙漙其英、漙漙此意愛物（忘愛物とは酒をさす）、遺我遺世情、と。〔九〕 分氣象。朱注に云ふ、氣象とは湖亭景物の氣象なり、と。分とは、こちらに分與するをいふなり。〔一〇〕 佳句。自己の佳句。〔一一〕 莫頻頻。浦注に云ふ、莫とは得母といふがこときなり、と。蓋し莫、不の意。莫の下に不を略せし形とみる。

【詩意】 あなたはしばらく蓬萊からとほざかつて江海の地方の人となられた。あなたが宴會などして金錢をつかつて他人に賑はすのは事理にかなつてゐる。わたくしはもとより玉佩などをひいてあるくにふさはしい身ではない。（だからあなたを他日おたづねするときに）羹には秋の蓴菜の滑かなのを煮、盃には露菊を泛べたての酒を湛へていただき、湖畔の景色をわたくしにも分與して詩をつくらせてもらふことができれば、頻頻と佳句がでてこぬわけもありますまい。

秋野五首

秋野五首

秋野日疏蕪。寒江動碧虛。

秋野日に疏蕪、寒江碧虛を動かす。

繫舟蠻井絡。卜宅楚邨墟。

舟を繫ぐ蠻の井絡、宅を卜す楚の邨墟。

棗熟從人打。葵荒欲自鋤。

棗熟して人の打つに従ふ、葵荒れて自ら鋤かむと欲す。

盤飧老夫食。分減及溪魚。

盤飧老夫の食、分減溪魚に及ばす。

【字解】

〔一〕 疏蕪。野色のさびしさ。〔二〕 動碧虛。碧虛はあかぞら、江水が水に映じたるそらなうごかす。〔三〕 蠻井絡。井絡は井宿の隅をいふ。晉天文志に東井與鬼秦雍州とあり、長安は東井宿にあたる。蜀の東部は井宿の隅にあたるにより井絡にあたる蠻土の意にて蠻井絡といひしものならんか。〔四〕 邨墟。墟は石垣などのあれし處。

【題義】

秋の田野についてのべた詩。大曆二年秋の作。

【詩意】 秋の田野はひびにさびしくなり、寒天の江水が水にひたされたあを空をうごかしてゐる。自分分は井宿の隅にあたる蠻土に舟を繫いで、楚地の村落に居宅を卜してゐる。棗の實が熟したのでそれは人が勝手に打つてとつてもかまはずにあるし、葵のところろに雜草が生えたので、それは自分で鋤かうとおもふ。自分の御膳の食物はすこしそれをへらして溪流にすんでゐる魚に分けてやる。

〔一〕

〔二〕

易識浮生理。難教一物違。 識り易し浮生の理、一物をして違はしめ難し。

水深魚極樂。林茂鳥知歸。 水深くして魚極めて樂しむ、林茂りて鳥歸るを知る。

衰老甘貧病。榮華有是非。 衰老貧病に甘んず、榮華是非有り。

秋風吹几杖。不厭北山薇。 秋風几杖を吹く、厭はず北山の薇。

【字解】 一、浮生理。浮生の語は「莊子」にみゆ。浮生の理とは生物存在の理なり。生物は其の生を遂ぐるを以て理にかなふものとす。二、一物違。違とは謂はゆる一夫不得其所の不得所にあたる。三、有是非。昨是今非なり、定在なきをいふ。四、几杖。以て老を示す。五、北山薇。暗に首陽の薇の意を取る。

【詩意】 生物界の道理は知り易い、どの生物も其の生活を遂げるのが目的だ。だから一物たりともそれが其の生活を遂げぬといふやうにあらしめてはならぬ。水が深ければ魚は樂みをきはめる、林が茂つてゐれば鳥は歸つてくることを知つてゐる。自分は衰老の身で貧と病とに甘んじてゐる、榮華などいふものはきのふあつてけふなき様にはかないものである、それで脇息や杖のあたりに秋の風が吹いてゐるが、北山の薇をとつてたべて平氣でくらししてゐる。

禮樂攻吾短。山林引興長。 禮樂吾が短を攻む、山林興を引くこと長し。

掉頭紗帽側。曝背竹書光。 頭を掉へば紗帽側き、背を曝せば竹書光る。

風落收松子。天寒割蜜房。 風落松子を收め、天寒に蜜房を割く。

稀疎小紅翠。駐展近微香。 稀疎なり小紅翠、展を駐めて微香に近づく。

【字解】 一、禮樂。禮義音楽、儒者の貴ぶもの。二、攻吾短。自己の短所、缺點を攻めつける。攻は玉を擊きものにて、こすりたてることなり。攻を治と訓するあり、治と訓するもやはりせめつけるをいふ。此の句を禮法の士に攻めらるるととく説は余の取らざる所なり。三、掉頭。行儀のわるきさま、讀書にうかざるなるべし。四、竹書。書物のこと、古代には竹簡に字をかきしによりかくいひしのみ。五、松子。まつのみ。六、蜜房。蜜をためた蜂の巢。七、稀疎。かそけきさま。八、小紅翠。小さな紅い花やみどりの草。九、展。あしだ。一〇、微香。草花のかすかなかり。

【詩意】 自分は禮樂といふもので自己の缺點を攻めつけ、山林によつてのんびりとした興味をもたされてゐる。頭をふると紗の帽子がまがるし、日光に背あふりしてゐるともつてゐる書物にひかりがさす。松の實が風に吹きおとされるとそれを拾つたり、寒ぞらの退屈さに蜂蜜の巢をわつてそれをなめたりする。それから紅や翠の小さな草花などが庭さきにかそけくにほうてゐる、そのあたりにちよつと近づいてあしだをとどめてながめたりする。

遠岸秋沙白。連山晚照紅。 遠岸秋沙白く、連山晚照紅なり。

潜鱗輸駭浪。歸翼會高風。潜鱗駭浪に輸る、歸翼高風に會す。

砧響家家發。樵聲箇箇同。砧響家家發す、樵聲箇箇同じ。

飛霜任青女。賜被隔南宮。飛霜青女に任す、賜被南宮を隔つ。

【字解】 〔一〕 輪鱗浪、南都賦に、川濱則筋風疾、長輪遠逝、の語あり。輪は流去の義とし、或は輪送の義とす。本詩の輪字の本づく所なり。輪鱗浪とは駭浪の赴くところまで身をまかせてゆくをいふ。今「いたる」と訓す。又「はこばれ」など訓するも可なり。〔二〕 會、ちやうどであふこと。〔三〕 樵聲、樵歌。或は云ふ、「柳青」とかけこみするなりと。〔四〕 青女、天神にして霜雪を主るもの、「淮南子」にみゆ。〔五〕 賜被、郎官には青練・白練の被、或は錦被を給す。〔六〕 南宮、後漢の樂府といふもの嘗て南宮に直して被なく、天子之に食を賜ひ帷被を給すと。借りて宮殿をさす。

【詩意】 遠方の江岸には秋の沙が白くみえ、連つた山山には夕ばえがあかあかとのこつてゐる。もぐつてゐたさかなは浪がわきたつのでその浪のまにまにからだをはこばせ、ねぐらに歸る鳥はちやうど高いところを吹く風にであうてはやくかへつてくる。砧のひびきは家家ごとにおこり、樵の聲はこゑごゑ皆おなじ調子である。いま自分は京師からはなれて宿直の被を賜はるべき縁もなく南宮の宮殿とはとほく隔つてゐる身である、秋の女神が霜をふらすならふすがよい。これも運命である。

〔五〕

〔五〕

身許麒麟畫。年衰駕鷲羣。身は許す麒麟に畫かるるに、年は衰ふ駕鷲の羣に。

大江秋易盛。空峽夜多聞。大江秋盛なり易し、空峽夜聞ゆるもの多し。

徑隱千重石。帆留一片雲。徑は千重の石に隠る、帆は一片の雲に留まる。

兒童解蠻語。不必作參軍。兒童蠻語を解す、必ずしも參軍と作らず。

【字解】 〔一〕 身許、心中身の畫かるるを許す。〔二〕 麒麟畫、漢の宣帝の甘露三年功臣を麒麟閣に畫かしむ。〔三〕 鷲羣、郎官の羣をいふ。一説に云ふ、鷲羣とあるも鷲羣といふ類にて閑居の身をいふと。〔四〕 易盛、盛とは風濤の盛壯をいふ。〔五〕 多聞、聞は所聞なり。風聲獸聲など。〔六〕 帆留一片雲、種種に讀み得る句なり。余は留字の主語を帆とし、一片雲を副詞とみたり。帆留は別詩の繫舟の意なり。一片雲とは消えのこれる晚雲なるべし。〔七〕 蠻語、參軍、晉の都康が故事、「世説」にみゆ。都康參軍とたり、上巳の日に詩を作りて曰く、鯉隔躍清池と。桓温問ふ、何物ぞ、と。答へて曰く、蠻、魚を名づけて鯉隔となす、と。温曰く、なんすれぞ蠻語をなすや、と。康曰く、千里公に投じ、始めて蠻府參軍を得たり、なんぞ蠻語せざるを得ん、と。

【詩意】 自分のからだは功名をたてて麒麟閣上にゑがかれるものところなきめてゐたのになみなみの官僚のなかで年は衰へてしまった。大江は秋になると風濤がさかんになりやすいし、さびしい峽中は夜になるとさまざまのおとがきこえる。陸上のみちは千重かさなれる石のあひだにかくれ、江上の帆はただひとひらのこつてゐる雲のもとにじつとしてゐる。子供等は必ずしも郝隆の様に蠻府參軍になるつもりもなからうがしせんと蠻語を解するまでになつてきてゐる。じぶんの逗留もながいものだ。

課小豎鋤斫舍北果林枝蔓荒穢淨訖移牀三首

小豎に課して舍北の果林を鋤斫せしむ。枝蔓荒穢淨し訖りて牀を移す 三首

病枕依茅棟。荒鉏淨果林。病枕茅棟に依る、荒鉏果林淨し。

背堂資僻遠。在野興清深。堂を背にするは僻遠なるに資る、野に在りて興清深なり。

山雉防求敵。江猿應獨吟。山雉求敵を防ぐ、江猿獨吟に應ず。

洩雲高不去。隱几亦無心。洩雲高くして去らず、几に隱る亦た無心。

【字解】(一) 鋤斫 すく、きる、鋤の字は下文の「荒穢」にかかり、斫の字は「枝蔓」にかかる。(二) 枝蔓荒穢 枝蔓は樹のえだ、枝幹にからみつきたる「つる」荒穢は雜草その他きたなきものをいふ。(三) 淨訖 きれいにし了る。(四) 移牀 いすを北園にもちだせしむ。「杜臆」に牀は藜牀なりとせり。藜牀はあかざを編みてつくれるいすならん。ただ果して藜牀なるや細牀なるや胡床なるや推測の限りに在らずと知るべし。(五) 荒鉏 鉏は鋤なり、但しこの語は「病枕」と對したれば名詞「スキ」の義に用ひしならん。荒鉏は荒穢を除き去るスキによりての義。(六) 背堂 堂の北に「でるをいふ」。(七) 山雉防求敵 仇注に、雉性善闘、見求敵則防、とありて雉が防ぐことといひなせるは恐らくは非なり。此の句は「山雉のごとく敵を求むることを防ぐをいひ、求敵は山雉がなすことなるも防ぐは作者がなすことなり。即ち敵を求めざるをいふ」。(八) 獨吟 仇注に獨吟は衆を指すとあり、是亦恐らくは非なり。獨吟は作者の吟することなり。(九) 洩雲 山より流れいづる雲、陶淵明が雲無心 以出岫などの意。(一〇) 隱几 脇息によりかかる。(一一) 亦無心 雲無心にして隱几の人もまた無心なり。

【題義】こものにわりあてて家の北にある果樹林の雜草やきたないものを鋤いたり枝や蔓を斫らせた。大曆二年秋の作。

【詩意】自分がかやぶきのむなぎに依つて病の枕にふしてゐたところ、鋤できたないものがとりのけられたので果樹林がきれいになつた。堂をうしろにしてながめるのは僻遠で人のゐないところをとりえとするのである。かやうにして田野に居れば興は清らかで深い。山の雉はよく敵を求めてたたかふものだが自分はそのまゝはすまいとつとめてゐるし、ひとりで詩を吟じてゐると江岸の猿もそれに應じてなく。どこかの山からもれだした雲が高くうかんでたち去らずにゐる。脇息によりかかつてそれをながめてゐる自分も亦たその雲の様に無心である。

〔一〕

〔二〕

衆壑生寒早。長林卷霧齊。衆壑生寒早し、長林卷霧齊し。

青蟲懸就日。朱果落封泥。青蟲懸りて日に就く、朱果落ちて泥に封せらる。

薄俗防人面。全身學馬蹄。薄俗人面を防ぐ、全身馬蹄を學ぶ。

吟詩重回首。隨意葛巾低。詩を吟じて重ねて首を回らす、隨意葛巾低る。

【字解】(一) 防人面 人のかほを見ぬ様にする。面會を避くるをいふ。(二) 全身 身を安全に保つこと。(三) 學馬蹄 馬蹄は

【莊子】の鶴の名。潭の邊を以てすれば身を全くし、害より遠ざかるべきをいふ。

【詩意】多くのたにに寒さが早く生じ、長くつらなつた林にひとしく霧が巻きたつてゐる。青い蟲は太陽にちかづく様にとみづから吐く絲にぶらさがり、朱いくだものはほとりと落つるやいなや泥のなかに封じこめられる。自分はこの地の人情輕薄であるからなるたけ人のかほは見ぬ様にしてをり、身を安全にするには「莊子」が馬蹄篇にいうたところをまんでをる。こんなことをかながへて自分は葛の頭巾がかつてにかぶさつてこようともかまはず、詩を吟じながら重ねてあたりをふりむいてみる。

〔三〕

〔三〕

籬弱門何向。沙虛岸只摧。

籬弱くして門何れにか向ふ、沙虚しくして岸只だ摧く。

日斜魚更食。客散鳥還來。

日斜にして魚更に食し、客散じて鳥還た來る。

寒水光難定。秋山響易哀。

寒水光定まり難く、秋山響哀れなり易し。

天涯稍曛黑。倚杖獨徘徊。

天涯稍く曛黑なり、杖に倚りて獨り徘徊す。

【字解】〔一〕籬弱。弱とは、はれ易きをいふ。〔二〕門何向。門の不要なるをいふ。〔三〕魚更食。仇氏は分魚及溪魚の意なりといへり。或は然らん。

【題義】仇氏は此の篇を舍北の晚景なりといへり。非なり。これ舍東溪邊の夕景のみ。作者の瀟西の

宅は舍北は果林と山岡なり、東に瀟水の溪流あるなり、詩中に籬門あり、沙岸あり、魚食あり、客散あり、何ぞ舍北といふを得ん。仇氏は序文に拘泥して誤れり。

【詩意】籬は弱くて半ごはれになり、門はどちららむきになつてゐるかと思はれるほどだ。それは沙が空虚で溪岸がただただくだけるためである。いま日がかたむいて魚は餌をたべなほしをしてゐるし、お客は散じかへつたが鳥はまたやつてきた。溪流の寒ぞらの水はきらきらとうごいてゐるし、秋の山はもののおとがなんとなうあはれをもよほししやすい。天のはてまでだんだんうすくうすくになつてゆく。このとき自分は杖によつてただひとりぶらぶらしてゐる。

返照

返照

反照開巫峽。寒空半有無。

反照巫峽を開く、寒空半ば有無。

已低魚復暗。不盡白鹽孤。

已に低れて魚復暗く、盡きずして白鹽孤なり。

荻岸如秋水。松門似畫圖。

荻岸秋水の如く、松門畫圖に似たり。

牛羊識僮僕。既夕應傳呼。

牛羊僮僕を識り、既に夕にして傳呼に應ず。

【字解】〔一〕反照。反は返なり。〔二〕開。あらはしたした。〔三〕半有無。半分は有り半分は無し、上方には存し、下方に

は無きないふ。【四】已昏 返照の光がたるるなり。【五】魚復 浦の名、已にみゆ。【六】不盡 返照の光が消えつくさぬこと。【七】白鹽 崖の名、已にみゆ。【八】如秋水 共に白色を同じくするをいふ。此の句魚復浦をうく。【九】松門 此の句白鹽崖をうく。【一〇】誰復僕 しもべの聲音をしる。【一一】應傳呼 應とは牛羊が應じて答へるなり、傳呼は僕僕が牛羊をよぶをいふ。

【題義】 夕ばえのてりかへしのさまをのべた詩。大曆二年秋の作。

【詩意】 てりかへしのために巫峽があらはれでた。さむぞらにはそのひかりが或は有るがごとく或は無きがごとくである。已に光が低れてしまつたから魚復浦のあたりは暗くなつてゐるし、まだ光が消えつくさぬから白鹽崖は孤立してみえてゐる。浦べでは荻花の岸が白くて秋の水の様であり、崖の方では松の門が晝にかかれた様にみえてゐる。宅のほとりはいふと、牛や羊がしもべたちの聲音を知つてゐて、もう夕になつたものだから、呼びたてられる聲に應じて鳴いてゐる。

向夕

夕に向ふ

吠吠孤城外。江邨亂水中。

吠吠孤城外、江邨亂水中。

深山催短景。喬木易高風。

深山短景を催す、喬木高風なり易し。

鶴下雲汀近。雞棲草屋同。

鶴下りて雲汀近く、雞棲草屋同じ。

琴書散明燭。長夜始堪終。

琴書明燭に散す、長夜始めて終ふるに堪へたり。

【字解】 【一】吠吠 吠は畝間の小流、畝はうね。田園をいふ。【二】雲汀 雲のあるみぎは。【三】草屋同 草屋と共にする意、とりのねぐらを別に設けざるなり。【四】琴書散明燭 實注には燭光が散すととく。余は琴書が散亂する義とみる。

【題義】 夕にむかふさまを敘す。大曆二年冬の作。此の篇の後になほ秋の詩あり。編纂の際に入れかはりしものなるべし。

【詩意】 田島は孤城の外にある。江ぞひの村は亂れ流るる水にはさまつてゐる。山が深いので日は短くなりかけるし、たかい木があるから高い風がおこりやすい。雲のある汀が近くてそこに鶴がおりし、雞のねぐらは自分の草屋と一つところだ。燭をあかるくして琴や書物をうち散らしてこそはじめてこのごろの長夜はすこせるのである。

天池

天池

天池馬不到。嵐壁鳥纒通。

天池馬到らず、嵐壁鳥纒に通ず。

百頃青雲杪。曾波白石中。

百頃青雲の杪、曾波白石の中。

鬱紆騰秀氣。蕭瑟浸寒空。

鬱紆秀氣騰る、蕭瑟寒空を浸す。

直對巫山峽。兼疑夏禹功。

直ちに對す巫山の峽、兼ねて疑ふ夏禹の功。

魚龍開闢有菱茨古今同。魚龍は開闢より有り、菱茨は古今同じ。
 聞道奔雷黑。初看浴日紅。聞道奔雷黒しと、初めて看る浴日の紅。
 飄零神女雨。斷續楚王風。飄零す神女の雨、斷續す楚王の風。
 欲問支機石。如臨獻寶宮。問はむと欲す支機石、臨むが如し獻寶宮。
 九秋驚雁序。萬里狎漁翁。九秋雁序に驚く、萬里漁翁に狎る。
 更是無人處。誅茅任薄躬。更是是れ人無き處、誅茅薄躬に任せむ。

【字解】(一) 天池 山のうへの池なり。巫山縣にもありといへど、これは夔州府治の東に在るものなるべし。(二) 馬 蓋し西域の天馬の類をさす。(三) 青雲抄 高處にあるをいふ。(四) 曾波 曾は層なり。(五) 白石中 白石の間に在るをいふ。(六) 秀氣 山岳秀靈の氣。(七) 菱茨 菱とは其の然らざるやを疑ふなり。(八) 菱茨 菱はヒシ、兩角あるもの。三四角あるは之を菱といふ。茨はオニバチス、又雞頭・雁頭・烏頭の稱あり、葉は荷に似て大、葉上覺潤滑くが如く、實には芒刺あり、その中には米のごとき肉あり、飢に食すべし。(九) 初看 蓋し作者の射らざるをいふ。(一〇) 神女雨 已にみゆ。(一一) 楚王風 楚の襄王、蘭臺の宮に遊ぶ、宋玉景差待す。風あり飄然として至る。王乃ち扇を開きて之に當りて曰く、快なる哉此の風、寡人の庶人と共にする所のものか、と。それより王の離風と庶人の離風とを説く、宋玉が風賦にみゆ。(一二) 支機石 織女星の機織りの臺をささふる石。「荆楚歲時記」に云ふ、襄の武帝、張雲をして大夏に使し河源を尋らしむ。雲、樞に乗じ月を經て一處に至る。一女は織り、一丈夫は牛を牽きて河に飲ふを見る。織女支機石を取らば雲に與へて還らしむ。支機石は東方朔の識る所となる、と。詩は池のほとりを天の河のあたりとみてかかるとかかると話を用ひたり。(一三) 獻寶宮 河伯が天子に寶器をたてまつつた宮。「草堂錄事宅、觀曹將軍畫馬圖歌」の獻寶朝「河宗」の句解(卷十三、一三三頁)をみよ。詩は池を河伯の居とみなして想像するなり。(一四) 九秋 秋九十日。(一五) 雁序 雁の行列。(一六) 漁翁 江邊の漁翁をいふ。(一七) 無人處 池畔をさす。(一八) 薄躬 薄徳の身、自己をさす。

【題義】夔州府の東の山にある池についてのべた詩。大曆二年秋の作。

【詩意】この天池には馬もこす、嵐氣の横はる壁には鳥がやつとかようてゐる。青雲の上に百頃ばかりの廣がりの水があつて、白石の亂れ立つあひだにいくへの波が起つてゐる。ここからは靈秀の山の氣がたてこもつてあがり、またしづかにさびしく寒空を水面にひたしてゐる。ここは巫山峽とまむかひになつてゐる。こんな池をひらいたのは夏の禹王の功でもなにかとうたがはれる。ここに棲む魚や龍は開闢以來あるものであり、菱や茨は今もむかしもおなじ様に生えてゐる。ここは奔雷が黒く起るところだとのことだが、いまはじめて水波に浴する日の紅なのを見る。ここには巫山の神女のともしふ雨がおちてくるし、また楚の襄王を吹いた様な風が斷續して吹く。張翥がもらつてかへつた支機石はこんなところにあるのではないかと問うてみたくなり、河伯が周の穆天子に寶を獻じたといふ宮殿へでもきたかとあやしまれる。いま秋の節になつて雁が行をなして飛ぶのに驚かされる。かかるをりに自分はこんな萬里の遠方で江邊の漁翁などにしたしんで生活してゐる。が、自分はむしろ更にこの池畔の様な人のゐないところに來てきまゝに茅屋を結びたいとおもふのである。

復愁十二首

復愁十二首

人煙生處僻(僻處)虎跡過新蹄。人煙處僻(僻處)に生ず、虎跡新蹄過ぐ。
野鶴翻窺草。邨船逆上溪。野鶴翻りて草を窺ひ、邨船逆りて溪に上る。

【字解】「二」復愁、本篇の前に愁をのべたる詩ありて、次に此作ありしなるべし。その愁の詩は逸せしとみゆ。「三」處僻、處僻は處僻水「僻處」に作る、從ふべし。

【題義】ふたたび愁へたことをのべた詩。大曆二年秋の作なるべし。

【詩意】かたよつた場所(僻處)で人家の煙がたちのぼり、とはつたばかりの虎のあしあとがみられる。野らの鶴は身をひるがへしながら草間のえものをねらひ、村の船は逆に瀆水のたにをさかのぼつてゆく。

〔一〕

〔二〕

釣艇收緝盡。昏鴉接翅稀。釣艇緝を收め盡す、昏鴉翅を接する稀なり。
月生初學扇。雲細不成衣。月生じて初めて扇を學ぶ、雲細にして衣を成さず。

【字解】「二」釣艇、釣り舟。三、收緝盡、どのふれしすつかり釣り糸をがたづけた。「四」接翅、はれとはれとなくつつけてとぶ。「五」月生二句、初唐の李義府が堂堂詞に、鐘月成歌扇、舞衣とみゆ。本詩の扇は團扇、衣はうつくしきころしをいふ。

【詩意】どのつりふねも釣り糸をかたづけて歸つてしまひ、ゆふぐれの鴉のつばさをつらねて飛ぶのも稀になつた。月があらはれそめてうちのはの様に圓くならうとつとめてゐるし、雲は細かにうかんでまだ衣の様にはなりきらぬ。

〔三〕

〔四〕

萬國尙戎馬。故園今若何。萬國尙ほ戎馬、故園今若何。
昔歸相識少。早已戰場多。昔歸りしとき相識少く、早く已に戰場多かりき。

【字解】「二」戎馬、時に吐蕃、邠州靈州に寇す、故にいふ。「三」故園、東都(洛陽)の舊居をさす。「四」昔歸、作者乾元の初に邠州より東都にかへりしことあり。「五」相識、みしりあひの人。「六」早已戰場多、これ亦昔歸の時の狀。昔さへさ穽なりしことなれば今は更に甚だしかるべしとの意。

【詩意】いまだに天下(天下)ちうが兵馬に侵されてゐる。ふるさとは今はどんなであらうか。昔かへつたとささへ知りあひの人はすくなく早くも戰場のみが多かつたことであつた。(今はなほさらだらう。)

〔四〕

〔四〕

身覺省郎在。家須農事歸。身は覺ゆ省郎として在るを、家は農事に歸るを須つ。
年深荒草徑。老恐失柴扉。年深くして草徑荒れむ、老いて恐る柴扉を失はむことを。

【字解】「二」省郎在、尙書省の郎官として存在するをいふ。作者工部員外郎なり。「三」農事歸、不備の句、農事を視るために歸復愁十二首

るをいふ。【三】年深、年久しきをいふ。【四】荒草徑、故郷の田圃の草徑が荒るるなり。【五】失榮屏、故郷の家の屏を失ふ、家を失ふこと。

【詩意】自分のからだは郎官となつて存在してゐるが、故郷の家は農事みまはりのためにかへる必要がある。なが年のあひだかまはぬから田地の草の徑は荒れてゐるであらう。自分は年老いて故郷の家までなくなつてしまひはせぬかと氣づかはれるのである。

〔五〕

〔五〕

金絲鏤箭鏃。皂尾製旗竿。
金絲箭鏃に鏤め、皂尾旗竿を製す。
一自風塵起。猶嗟行路難。
一たび風塵の起りしより、猶ほ嗟く行路の難。

【字解】【一】金絲二句、賊將の用ふる所の物をいふ。【二】行路難、已にみゆ。

【詩意】金の絲を箭鏃にちりばめたり、黒い獸毛を旗竿にかざつてこしらへたりして賊の大將どもが用ひてゐる。こんなありさまで、いちど兵亂のほこりが起つてからといふものは今日までもまだ行路の難きをなげくといふ状態である。

〔六〕

〔六〕

胡虜何曾盛。干戈不肯休。
胡虜何ぞ曾て盛ならむや、干戈肯て休せず。

閩閩聽小子。談笑覓封侯。
閩閩小子に聽くに、談笑して封侯を覓む。

【字解】【一】何曾盛、實際は盛なり、作者主觀的にかくいふ。【二】閩閩、里の門、ちまた。【三】小子、こども。【四】覓封侯、軍功を立てて侯に封ぜられんことをいふ。武人は立身出世はやくにより小兒もかかる念をおこす。

【詩意】えびすなどといふものはなんで盛であつたことがあるものか、あんなものはすぐに平定できるものだ。しかるにいまだに武器を動かすことがやまぬ。村里でこどもの言ふことをよくきくと、彼等はわらひながらに、武功を立てて侯に封せられようともめてゐるのである。

〔七〕

〔七〕

貞觀銅牙弩。開元錦獸張。
貞觀の銅牙の弩、開元の錦獸の張。
花門小箭好。此物棄沙場。
花門小箭好く、此の物沙場に棄つ。

【字解】【一】貞觀、唐の太宗の年號。【二】銅牙弩、弩は機械のばれ仕掛によりて石をはちき出すものなり。銅牙とは弩の牙が銅して造られたるものなり、弩の部分について専門の名稱あり、柄は臂に似たるゆゑ之を「臂」といひ、弦を釣けるところを「牙」といふ、人の齒牙に似たる形をなせるためなり。牙の外を「郭」といふ、すべてを合して之を「弩」と稱す。【三】開元、唐の玄宗の年號。【四】錦獸張、張とは革張りの射的（昔は之を侯といふ）なり。これは鹿頭等の獸類を畫く。この張は獸を錦にて織りだしたる射的なりとみゆ。弩と張とは唐の官軍の武器の精なるをいふ。【五】花門、回紇の兵をいふ。卷四（三六二頁）句解をみよ。【六】小箭好、朱注に云ふ、唐史に、東京を攻めんとせしとき郭子儀戦ひ利あらず、回紇、黃埃中に於て十餘矢を發す。賊驚き顧みて曰く、回紇至れりと、遂に潰ゆ。花門小箭好とは此、一體なり。安史の亂には皆回紇の兵に藉りて中國を收復す、勁弩反つて其の長技を失ふ、公（作者）の

之を歎する所以なり、と。小箭好とは回紇の小さな箭が唐の武器以上に功を奏するをいふ。一説に箭を前に作り、小前好、と訓す。此の説によれば弩・張は唐より回紇に貢として賜はれるものとし、回紇は唐とわかるあひだがらなるに拘らず、「過去の好箭を輕小に賜たし」と解するなり。今前説による。【七】此物、弩・張をさす。【八】沙場、沙漠、戰場。

【詩意】我が唐には貞觀には銅牙の弩があり、開元には錦獸の射的があつて武器精良であつた。ところが花門即ち回紇の用ふる小さな箭がすこしよくてその援助をかりることになつて、弩も射的もみな戰場にすてて用ひぬことになつた。をしいことである。

〔八〕

今日翔麟馬。先宜駕鼓車。

無勞問河北。諸將角榮華。

【字解】【一】翔麟、駿の名。【二】駕鼓車、名馬をして太鼓をのせる車につないでひかせる。卷五(四三六頁)句解をみよ。一には漢の文帝の事とす。【三】無勞、そんなてかすなける要なし。【四】問、問罪なり。諸將恐らくは當らず。【五】角、角逐、競争。諸將まじめならば名馬を用ひて問罪の師を河北に向はしむべし、然らざれば名馬には鼓車をひかせ罪は問はずにおくことなり。是れ敵語なり。詩意を文辭の正面よりみるべからず。

【詩意】今日は宮苑の翔麟の名馬も太鼓車をひかせるがよろしい。河北に問罪の師を興すなどの手数をかけることがいるものか、武將等は榮華の競争をやつてをるのではないか。

〔九〕

任轉江淮粟。休添苑囿兵。

由來貔虎士。不滿鳳凰城。

【字解】【一】任轉、轉とは長安の方へ轉送すること。【二】江淮粟、長江淮水流域の「もみ」。【三】苑囿兵、長安の禁中に屬する植物園・動物園内の兵。【四】貔虎士、つよき兵卒。【五】鳳凰城、宮城。代宗の朝、宦者魚朝恩に任じて兵をつかさどらしめ、これより兵禍起る。衆兵を長安に置き、之を養ふために南方より食糧を運送するは財賦のたへざる所なり。作者この意をいへり。

【詩意】江淮地方の粟を北方へ轉送するのはかまはぬが、禁中の苑囿内に置く兵をやたらにますことはやめてもらひない。元來貔虎の様ならくれ武士は鳳凰城のなかに充滿させぬのが本當である。

〔十〕

江上亦秋色。火雲終不移。

巫山猶錦樹。南國且黃鸝。

【字解】【一】錦樹、紅葉せし樹。【二】南國、夔州の地をさす。【詩意】大江のほとりも秋けしきになつたが、火の様な赤焼け雲はあくまでうごかすにゐる。巫山はそれでも樹がもみぢしたが、それでも南土はやつぱりまだうぐひすの音がしてゐる。

〔十一〕

每恨陶彭澤。無錢對菊花。 毎に恨む陶彭澤、錢無くして菊花に對せしを。
如今九日至。自覺酒須除。 如今九日至る、自ら覺ゆ酒須らく除るべきを。

【字解】 〔一〕陶彭澤。彭澤の縣令陶淵明。淵明九月九日に酒無く、宅邊に菊花を摘みしに白衣の人を望見す、乃ち刺史王弘が酒を送り來りしなり。すなはち就きて酒を酌みて歸ると、「機曾陽秋」にみゆ。〔二〕除。おぎのる。かけ買ひにする。ただ買ふ義に用ふ。

【詩意】 自分はいつも陶淵明が錢がなくて酒を買へずに菊花に對してゐたといふことを恨めしくおもつてゐたが、けふは九月九日がやつてきた。どうも酒買はざるべからずの感がおこるのである。

〔十一〕

病減詩仍拙。吟多意有餘。 病減せしも詩仍は拙なり、吟多くして意餘り有り。

莫看江總老。猶被賞時銀魚。 江總老いたりと看る莫らむや、猶ほ時「銀」魚を賞せらる。

【字解】 〔一〕吟多。此の十二首をさす。〔二〕意有餘。舊解に所以寫其愁者、猶未盡矣ととく。非なり、それならば意未足とこそいふべけれ、有餘とはいふべからず。有餘とは十分なるうへに尙ほそのうへにあまつてゐるといふことなり。詩はまづいが意はこれで十二分だといふことなり。〔三〕莫看。他人がみるであらうといふなり。〔四〕江總老。此句の解、舊説多く要を得ず、余は鄭見によりて解く。江總は陳隋二朝にまたがりたる文人なり、人物は見るに足らざれども文辭は見るべし。ここは作者ただその文辭に就いてその點をとりて自己をあてて用ひしなり。人物節義などにのみ拘泥して解きては作者の眞意うかがひがたきことあり。〔五〕猶被。猶とは老の字を承けていへる語なり。〔六〕賞時魚。魚とは魚袋をさす。時の字は解しがたし。或は銀に改む。銀魚ならば明かなり。暫く疑を存す。唐制にて初めは正員官のみ魚袋を佩びたり。開元八年に張嘉貞が奏によりて恩例をひろめ檢校官等にも及ぼすこととなりたり。作者は檢校工部員外郎にて耕服と魚袋を賜はれり。

【詩意】 病氣は減したが詩はあひかはらず拙い。しかし上によんだ様にたくさん吟じだすとこれで自分の意は十二分にあらはされてゐる。他の人はこの自分をみたならば「ああ江總も老いたるかな」とみてとりはすまいか。自分はこれでも天子から魚袋を頂戴してをるのである。(まだ老いばればせぬ。御用とあればはたらくつもりだ、の意ならん。)

自瀼西荆扉且移居東屯茅屋四首

瀼西の荆扉より且く東屯の茅屋に移居す 四首

白鹽危嶠北。赤甲古城東。 白鹽危嶠の北、赤甲古城の東。

平地一川穩。高山四面同。 平地一川穩かに、高山四面同じ。

煙霜淒野日。秔稻熟天風。 煙霜に野日淒たり、秔稻天風に熟す。

人事傷蓬轉。吾將守桂叢。 人事に蓬轉を傷む、吾將に桂叢を守らむとす。

【字解】(一) 瀼西 卷十五(三六七頁)をみよ。(二) 東屯 卷十五(三六八頁)をみよ。(三) 白鹽・赤甲 卷十五(三六六頁)をみよ。(四) 危嶠 嶠は山高きなり。白鹽崖をいふ。(五) 古城 赤甲の古城。(六) 一川 東瀼水をさす。東屯は東瀼水の東瀼にあるなり。(七) 漑 つめたき感じをいふ。(八) 荊稻 カルシネ、ればらぬ米。(九) 蓬轉 よもぎの草の風にころがる如く轉轉する。漂泊の生活をいふ。(一〇) 桂叢 カツラの木のやぶ。淮南小山の「招隱士」に、桂樹叢生兮山之阿、とみゆ。山中のさま。仇氏は此の語により時に八月なりしならんといへり。

【題義】瀼西のいぶせき宿から東屯の茅屋の方へ住居をうつしたことをのべた詩。大曆二年秋の作。作者は大曆元年春夔州に來り、秋夔の西閣に寓し、二年の春、赤甲に遷り、三月瀼西に遷り、今又東屯に遷りしなり。のち復た瀼西に歸れり。東屯の寓居に關しては、于栗が東屯少陵故居記に曰く、峽中、多高山峻谷、地少平曠、東屯距白帝、五里而近、稻田水畦、延袤百頃、前帶清溪、後枕崇岡、樹林蔥蒨、氣象深秀、稱高人逸士之居、と。又陸游が入蜀記に曰く、東屯李氏、居已數世、上距少陵、纔二易里、大曆初故券猶在、と。東屯の地形と、杜甫の去後、其の故宅の所有者の變易せしさまとを窺ひ得べし。

【詩意】ここは白鹽といふあぶなげな山の北で、また赤甲山の古城の東にあたつてゐる。平らな地面に一すぢの川が穩かにながれ、四方はどちらも同じ様に高山が立ちならんでゐる。いまは煙や霜があつて野らの日の光がつめたさうにてり、うるしねがそらから吹く風にみのつてゐる。自分はよもぎの様に轉轉してあるくといふいたましい人事にであうてゐるが、こんなところで山中の桂叢を守つてくらしさうとおもふ。

〔一〕

〔二〕

東屯復瀼西、一種住清溪。

東屯復た瀼西、一種清溪に住す。

來往皆茅屋、淹留爲稻畦。

來往皆茅屋、淹留するは稻畦の爲なり。

市喧宜近利、〔瀼西〕

市喧しきは利に近づくに宜し、

林僻此無蹊。

林僻にして此には蹊無し。

若訪衰翁語、須令贖客迷。

若し衰翁を訪ひて語らば、須らく贖客をして迷はしむる

【字解】(一) 一種 一條に。(二) 市喧宜近利 作者の注に瀼西の居は市に近しといへり。市といふも市變(船着場)をさすなり。市變のこと「秋日夔府詠懷」詩にみえたり。(三) 此無蹊 此は東屯をさす。蹊は人の往來するによりてできたこみち。(四) 衰翁 自己をさす。(五) 贖客迷 暗に桃源漁父の事を用ふ。贖客は多客なり。

【詩意】東屯も瀼西もおなじ様にきよい溪のほとりに住むのである。かしことこのことに往來するにとちらの宅も茅屋であるが、ここにながく滯留するのは稻の畦のためである。瀼西のかしはやかましくて錢でもまうけるには都合のよいところだし、東屯のこちらは林がかたよつたところにあつて人がやたらに來てこみちをつける様なことはない。こんなところへもしこのおやちをたづねて來て話でも

しようとするならば、さぞ多くの人人に路ふみまよはさすことであらう。

〔三〕

〔三〕

道北馮都使。高齋見一川。道北には馮都使あり、高齋一川を見る。

子能渠細石。吾亦沼清泉。子は能く細石に渠す、吾亦た清泉を沼にす。

枕帯還相似。柴荆即有焉。枕帯還た相似たり、柴荆即ち焉を有す。

斫畚應費日。解纜不知年。畚を斫る應に日を費すなるべし、纜を解く年を知らず。

【字解】 〔一〕道北。道路の北、これによれば作者の宅は道の南にあるなり。〔二〕馮都使。都使は官名、馮は姓、其の名は未詳。

〔三〕高齋。高き書齋。〔四〕子。馮をさす。〔五〕渠細石。細石をたたみ、そこにほりをつくる、蓋し庭内に東漢水の流れをひきこむなり。〔六〕沼清泉。この清泉はやはり溪流を引きしものなり。沼とはそれを蓄へて池をつくるをいふ。〔七〕枕帯。枕山帯の水をいふ。〔八〕柴荆。自家の柴門荆扉。〔九〕即有焉。焉とは先方の庭園の景色をさす。〔一〇〕斫畚。杜田が補遺に云ふ、畚畚式車反と。畚は音シヤ、火田をいふ。斫とは木をきりはらふをいふ。趙注に云ふ、斫畚兩字は是れ楚人の語。農書に云ふ、荆楚には畚田多し、先づ火を燒ちて煖燻し、煖とは火をたき草をやくこと、燻とは山界を焼くこと、兩を細るを斫ひて種を下す。三歳を屢れば土脈竭きて復た樹藝すべからず、但だ草木を生ず。復た傍山を煖す、と。火耕のさまをうかがふべし。〔一一〕解纜。舟を放ちて峽をくだるをいふ。

【詩意】 自分の宅の道路の北には馮都使が住んでゐる。高齋からみると一すぢの川がみえる。あなたは川水を利用して細石をたたんでほりわりをこしらへる。自分も清い泉をためて池をこしらへる。庭園の山水にのぞんでゐるぐあひはおたがひに似てゐるが、自分の居宅はのながらあなたの方の景色をとりこんでゐるのである。ここで火耕をはじめにも日數が長いことだらうから、船のともづなをといて峽をくだるのはいつのことやらわからぬ。

〔四〕

〔四〕

牢落西江外。參差北戸間。牢落たり西江の外、參差たる北戸の間。

久遊巴子國。臥病楚人山。久しく遊ぶ巴子の國、病に臥す楚人の山。

幽獨移佳境。清深隔遠關。幽獨佳境に移る、清深にして遠關を隔つ。

寒空見鷺鷥。迴首憶朝班。寒空鷺鷥を見る、首を迴らして朝班を憶ふ。

【字解】 〔一〕牢落。さびしきさま。〔二〕西江。大江。〔三〕參差。たがひちがひ。〔四〕北戸。北向きにつけた戸、涼風を迎へ入るためなり。〔五〕巴子國。豐州をいふ。〔六〕幽獨。幽靜孤獨。〔七〕佳境。よきけしきのところ。〔八〕清深。塵濁の氣なく、人聲をはなれて奥ふかし。〔九〕遠關。仇氏は朱注を承けて唐國のこととせり。唐國は遠關といふべきにあらず、これは京師との間にある關をさすならん。〔一〇〕鷺鷥。なしどり、さぎ、文官の徵象。〔一一〕朝班。朝廷にての班列。

【詩意】 ここは大江の外にあつてさびしく、自分は參差としてひらかれた北戸のあたりにぶらぶらしてゐる。自分はながらく巴子の國にあそんで、楚人の山に病にふしてゐる。自分は幽獨をこのむところからかやうな景色のいいばしよへ移つてきたが、境地はおくふかくて清らかで遠方のせきしよとへ

だたつてをる。たまたまさむざらを仰ぐと鴛鴦や鷺のすがたが見える、それにつけてふりかへつてみやこの朝班のことをおもひだす。

社日兩篇

社日兩篇

九農成德業。百祀發光輝。

九農德業を成す、百祀光輝を發す。

報効神如在。馨香舊不違。

報効神在すが如し、馨香舊より違はず。

南翁巴曲醉。北雁塞聲微。

南翁巴曲に醉ふ、北雁塞聲微なり。

尙想東方朔。詠諧割肉歸。

尙ほ想ふ東方朔が、詠諧肉を割きて歸りしことを。

【字解】(一)社日「禮記」月令の仲春の條に「擇元日、元日とは吉日命民社」とあり、鄭玄が注に「社は后土なり、民をしてこれを祀らしむるは其の農業を神にするなり。社を祀る日は甲を用ふ、とみゆ。」「國語」卷四に共工氏の九有に始たるや、其の子を后土といふ、能く九土を平にす、故に祀りて以て社となす、とあり。韋昭が注に后土は共工の裔子句龍なりといへり。句龍が土官の長となりし故に之を后土といふなり。しかし「禮記」月令の正義によれば后土とは社神にして、句龍は社神に配して祀られしものなりと。日は鄭注には甲とあれどそは古制なのべたり。漢は丙午、魏は丁未、晉は月までもちがひて孟春の酉日を用ひしといふ。唐は蓋し春分前後に近き戊日を用ふ。禮記類書には立春の後の第五の戊日を春社とし、立秋の後の第五の戊日を秋社となすとみゆ。此の詩は秋の社日についていふ。(二)九農 少皞氏の時、九思を九農正となす。思は水鳥、水鳥の名を取つて官に名づけ、九思を九農の農官長となす。「左傳」昭公十七年に見ゆ。賈逵・杜預が注に詳解せり。(三)德業 農事に關する功德事業。(四)百祀 祀禮の多く備はるをいふ。百は多を

いふ。(五)報効 社神の効に報ゆ。(六)神如在 祭神、如神在、と「論語」にみゆ。(七)馨香 左傳に「黍稷非馨、明德惟馨」とあり。神を祭るにアム・キビのかなりよりも祭者の徳のかたるがかんばしといふなり。この詩にては供物の實物のかなりをいへり。(八)舊不違 古來かつて馨香を缺かざるをいふ。(九)南翁 或は一般の南土の老人とし、或は作者自己のこととす。今前説による。(一〇)巴曲醉 巴曲とは夔州の土產をいふ。(一一)塞聲 長城よりわたり來るこゑ。(一二)東方朔 「漢書」の朔が傳に云ふ、伏日、詔して從官に肉を賜ふ、朔劍を拔き肉を割き同官に謂つて曰く、伏日には早く歸るべし、請ふ賜を受けんと、即ち肉を懷にして去る、大官之を奏す、朔に詔して自ら責めしむ。朔曰く、劍を拔き肉を割く一に何ぞ壯なるや、之を割くこと多からず、又何ぞ廉なるや、歸りて細君に遺る、又何ぞ仁なるや、と。或は曰く、東方朔の割肉の事は伏日の事なり、社日の時に之を用ふるは誤れり、と。鮑文虎之を辨じて曰く、史記の十二諸侯年表を案するに、秦の德公の二年に初めて伏を作し社を祠り、狗を邑の四門に磔すとあり、しからば社を祠るに伏日を用ふ、此の詩に伏日の事を用ふるは疑ふべきなし、と。(一三)詠諧 おどけ。(一四)割肉歸 上にみゆ。

【題義】秋の社日にあへることをのべた詩。大曆元年の作か二年の作か詳ならず。

【詩意】古來の農官はそれぞれ德業を成した。だから百禮をそなへて祀られ德業の光輝をあらはしてゐる。社をまつる人は社神の効に報ゆるために神は目前に在すが如き敬意をつくし、かんばしき御馳走をお供へして舊來からかつて違はずにやつてゐる。ここでも秋のまつりがあつて、長城からわたつてくる北方の雁のこゑが微にきこえるころ、南方の老人たちは巴土の歌曲をうたうて酔うてゐる。自分はいまでも想像する、彼の東方朔がこのお祭りの日にあうたとき、宮中から肉を割いて家へもつてかへり、天子からしかられておどけをいうてゐたことを。

〔一〕

陳平亦分肉。太史竟論功。

陳平亦た肉を分つ、太史竟に功を論ず。

今日江南老。他時渭北童。

今日江南の老、他時渭北の童。

歡娛看絕塞。涕淚落秋風。

歡娛をば絶塞に看る、涕淚秋風に落つ。

鴛鴦迴金闕。誰憐病峽中。

鴛鴦金闕より廻る、誰か憐まむ峽中に病めるを。

〔二〕

【字解】 〔一〕 陳平亦分肉。漢書陳平傳に、平、わかき時家貧しく、里中の社に、平、宰となる、肉を分つこと甚だ均し、父老曰く、善いかな陳孺子の宰たるや、と。平が曰く、ああ平をして天下に宰たるを得しめば亦此の肉の如くならん、と。亦の字は前篇の東方朔の割肉を承けていふ。〔二〕 太史竟論功。太史公、陳平を論じていふ、肉を俎上に割きし時にあたりて意已に安んじたり、と。又いふ、功名を以て終り、賢相と稱せらる、と。是れ功を論ずるなり。〔三〕 江南老。自己をいふ。〔四〕 他時。往時。〔五〕 渭北童。渭水の北とは咸陽をいふ。趙注此の句によりていふ、作者童たりしとき社日には咸陽に在りしなりと。但必ずしも咸陽と定むべからず。長安をさしても廣くいはば渭北といひ得べけん。〔六〕 歡娛。土地の人人のよるこぶさま。〔七〕 絶塞。豊州をさす。〔八〕 鴛鴦。朝廷の羣臣をさす。〔九〕 迴金闕。金闕に朝してのちかへり去るなり。〔一〇〕 病峽中。自己をいふ。

【詩意】 社日には陳平も肉をわけた話があつて、太史公もつまるるところ陳平の相業は社宰たりし時からだと功を論じてゐる。自分は今は江南の老翁となつたがむかしは渭北の童兒として社日をすごしたことがある。この絶塞で衆人がたのしくしてゐるのを見るとなみだが秋風にはふり落ちる。長安のかなたではさだめし鴛鴦の様な朝臣のむれが金闕からたちもどることであらうが、たれか自分がこの峽中に病んでゐるのを氣の毒におもつてくれる人があらうか。

八月十五夜月二首

八月十五夜の月二首

滿目飛明鏡。歸心折大刀。

滿目明鏡飛ぶ、歸心大刀折る。

轉蓬行地遠。攀桂仰天高。

轉蓬地を行くこと遠し、攀桂天の高きを仰ぐ。

水路疑霜雪。林棲見羽毛。

水路霜雪かと疑ふ、林棲羽毛を見る。

此時瞻白兔。直欲數秋毫。

此時白兔を瞻れば、直ちに秋毫をも數へむと欲す。

【字解】 〔一〕 飛明鏡。折大刀。古樂府に曰く、羣姑今何在、山上復有山、何當大刀頭、破鏡飛上天、と。吳兢が解題に之を釋して云ふ、羣姑とは秋(わらな)うつ羣石)なり、即ち夫(なつと)なり。山上に山あるは出の字なり。大刀頭とは環なり、還るなり。破鏡飛上天とは月の半ば缺くるをいふなり。詩意は「夫は今よそへ出てゐるが、いつ還るだらうか、それは月の半ばころだ」といふことなりと。本詩に於ては飛明鏡とあり、破鏡にあらず、滿月を鏡にたとへたり。折大刀は大刀環も折れる意にて故郷に還りたくはあれどその望みなきないふ。〔二〕 轉蓬。前の「移居東屯」詩の蓬轉と同意。〔三〕 攀桂。桂は月中にあるもの、月をさす。〔四〕 林棲。棲はすむものにて鳥をいふ。〔五〕 瞻白兔。瞻はあふぎみるなり、白兔は月中に藥を搗きなるもの、即ち月影をさす。〔六〕 秋毫。兔の毛をいふ、秋の毫はことにほそし。

【題義】 八月十五夜の月をよんだ詩、大曆二年の作なるべし。

【詩意】自分の眼中いつばいにまんまるの明るい鏡が天上に飛んでゐる。しかし故郷へかへる心は大
刀の頭の環(還)が折れた様に見込みがない。自分は蓮の様にころがつて遠くまで土地をあるいてき
て、いま月の桂をよちる様に高い天を仰いでみる。水路を見れば白くて霜や雪がふつてゐる様に疑は
れ、林に棲んでゐる鳥をみれば羽や毛までもみえる。このときさらに月宮に居るといふ白兔をあふぎ
みると、秋のほそい毛すぢさへ數へられさうにみえる。あかるい月だ。

(一)

(二)

稍下巫山峽。猶銜白帝城。

稍く下る巫山峽、猶ほ銜む白帝城。

氣沈全浦暗。輪仄半樓明。

氣沈みて全浦暗く、輪仄きて半樓明かなり。

刁斗皆催曉。蟾蜍且自傾。

刁斗皆曉を催す、蟾蜍且く自ら傾く。

張弓倚殘魄。不獨漢家營。

弓を張りて殘魄に倚るは、獨り漢家の營のみならず。

【字解】(一) 刁斗、銅鑼の如き形のもの、晝は飯を炊ぎ、夜は擊ち鳴らして持ちあるくもの。軍中の夜警に用ふ。(二) 蟾蜍、三本脚のヒキガヘル。月の中にあると考へらるるもの、こゝは月をさす。(三) 張弓、成兵のさま。(四) 倚殘魄、魄は月のうすかけのところ、こゝは殘魄にて殘月をいふ。(五) 漢家營、みやこの陣營。

【詩意】月はしだいに巫山峽をくだつたが、まだその光は白帝城をくはへこんでゐる。光の氣が沈んだので江浦の全體が暗くなつたが、輪影がかたむきながらも樓の半分はまだあかるい。刁斗の音はひ

とこゝをひとこゝに曉方をもよほし、ひきがへる(月)もしばらくひとりでに傾く。この殘月の光によつて弓を張つて番をしてゐるのは都の陣營ばかりでなく、ここでもさうである。

十六夜、翫月

十六夜、月を翫ぶ

舊挹金波爽。皆傳玉露秋。

舊より挹む金波の爽かなるを、皆傳ふ玉露の秋と。

關山隨地闊。河漢近人流。

關山地に隨つて闊に、河漢人に近づいて流る。

谷口樵歸唱。孤城笛起愁。

谷口樵歸唱す、孤城笛愁を起す。

巴童渾不寐。半夜有行舟。

巴童も渾て寐ねず、半夜行舟有り。

【字解】(一) 舊挹、舊來より之をとる。(二) 金波、月光をいふ、漢の樂府にいふ、月移移、以金波、と。(三) 關地闊、關は邊の義、作者の慣用なり。故郷の遠きをいふ。(四) 谷口二句、仇注に云ふ、上四字一讀、下一字別讀と、これは「谷口樵歸リテ唱べ、孤城笛起リテ愁フ」と訓ますなり。余は上三下二としてよむ。(五) 巴童、巴地のわかものども。

【題義】十六夜に月色をもてあそびしことをよんだ詩。前篇十五夜、此の篇、次篇の十七夜の月の詩は皆順次にその夜の作なるべし。「杜臆」には三篇とも漢西の作とす。

【詩意】むかしから十六夜の月の金波の様にさわやかなことは人から値ありとしてとられてゐる。ま

ただれもがこのころが玉露のおく秋だといひつたへてゐる。關山は我が寓する地に随つてみやこからはかけはなれてゐるし、あまのがはは人にちかづくかの様にひくくたれさがつてゐる。谷の口から木こりは歌をうたひながらかへつてくるし、夔州の孤城では笛のねがして我をして愁をおこさせる。こよひは巴地の蠻童でさへ月のおもしろさにすべてねないでゐるとみえて、夜なかにもこぎゆく舟がある。

十七夜、對月

秋月仍圓夜、江邨獨老身。

秋月仍ほ圓き夜、江邨獨り老ゆる身。

捲簾還照客、倚杖更隨人。

簾を捲けば還た客を照らす、杖に倚れば更に人に隨ふ。

光射潜虬動、明翻宿鳥頻。

光に射られて潜虬動く、明なるに翻りて宿鳥頻りなり。

茅齋依橋袖、清切露華新。

茅齋橋袖に依る、清切露華新なり。

【字解】 一 仍圓 けふもやつぱりまるい。 二 潜虬 池にひそめるみづち、虬は角なき龍なりと。 三 宿鳥頻 翻ること頻りなるをいふ。 四 依 よりそふ、近きこと。 五 清切 きよらかに、葉にくつつく。

【題義】 十七夜に月にうちむかひながめしことをのぶ。

【詩意】 秋の月の依然として圓き夜。江ぞひの村でひとり老いつつあるこのからだ。簾をまきあげれば月はやはり自分を照らすし、杖に倚つてあるけば、また人にくつついてくる。この光に射られては池底にひそんだ虬も動きだす、あまりの明るさに一たん樹にやどつた鳥さへしきりにひるがへる。自分の茅齋は橋袖によりそうてゐるから露のしら玉はことに新らしく清らかにみえてゐる。

曉望

曉望

白帝更聲盡、陽臺曙色分。

白帝更聲盡き、陽臺曙色分る。

高峰寒上日、疊嶺宿靈雲。

高峰上日寒く、疊嶺靈雲宿す。

地坼江帆隱、天清木葉聞。

地坼けて江帆隠れ、天清くして木葉聞ゆ。

荆扉對麋鹿、應共爾爲羣。

荆扉麋鹿に對す、應に爾と共に羣を爲すなるべし。

【字解】 一 白帝・陽臺 已に見ゆ。 二 更聲 漏刻の更をしらすしたりのおと。 三 上日 のぼる太陽。 四 靈雲 つちふる如く粉雨ふる。 五 地坼 峽岸の裂開すること。 六 爾 汝、麋鹿をさす。

【題義】 あかつきのながめをよんだ詩。黃鶴は大曆二年東屯にての作とす。

【詩意】 白帝城のあたりによあけをしらせる水時計の滴のおとがなくなり、陽臺のあたりにあけぼの

の色が分明になつてきた。高い峰にはのぼりつつある太陽の光が寒げにみえ、かさなれる嶺にはこまかい霧の様な雲がまだやどつてゐる。峽岸の裂けめには江上の帆がかくれてゆき、天はすみきつて木の葉のさらさらおちるおとがする。このとき自分は荆の扉のところて麋鹿にうちむかうてゐる、じぶんはこれからおまへたちとなかまになつてくらしてゆくことだらう。

日暮

日暮

牛羊下來久。各已閉柴門。

牛羊下り來ること久し、各已に柴門を閉ず。

風月自清夜。江山非故園。

風月自ら清夜、江山故園に非ず。

石泉流暗壁。草露滴秋根。

石泉暗壁に流れ、草露秋根に滴る。

頭白燈明裏。何須花燼繁。

頭は白し燈明の裏、何ぞ須ひむ花燼の繁きことを。

【字解】

【一】牛羊下來、「詩經」玉風「君子于役」篇に、日之夕矣、牛羊下來、とみゆ。下來とは高い牧地よりおりてくるをいふ。【二】各已、各とあれば門を閉ざすの自己の一家に止まらざるなり。【三】石泉流暗壁、草露滴秋根、石壁・秋草を分割して用ひし句法にして、意は暗泉流石壁、秋露滴草根、と同じ。暗壁の壁は石壁をいひ、秋根の根は草根をいふなり。【四】花燼繁、この花燼は火の花をさす。此の句につき俗に「喜事あれば燈、花を結ぶ」といふことを引き喜事と連絡して解く説あり。ここにては燈花の喜事とは關係なし、燼花しきりにおこりて明を添へ白髮の照らしいだされんことを恐るるなり。故に上句に「燈明」と明の字をあらはしてあり。已に明なる花燼が繁くおこれば更に明を添ふ。

【題義】

日の暮れたときのことをよんだ詩。黃鶴は大曆二年漢西にての作とす。

【詩意】

牛や羊はとづくに山からおりてきた。村の人家はそれぞれ柴門を閉ぢてしまつた。風月のぐあひはしせん清らかな夜であるが江山は故郷のそれではない。くらくらなつた石壁には泉が流れてゐるおとがするし、秋の草の根には露がしたたりつつある。自分はいかるといふ。燈の前でまつしろなあたまをしてゐる。それにばちばちと燈の花がやたらに咲くが、そんなにまでしてこの白髮をさらしてくれする必要はない。

暝

暝

日下四山陰。山庭嵐氣侵。

日下りて四山陰る、山庭嵐氣侵す。

牛羊歸徑險。鳥雀聚枝深。

牛羊徑の險なるに歸り、鳥雀枝の深きに聚る。

正枕當星劍。收書動玉琴。

枕を正せば星劍に當る、書を收むれば玉琴動く。

半扉開燭影。欲掩見清砧。

半扉燭影開く、掩はむと欲するとき清砧を見る。

【字解】

【一】當星劍、星劍は劍身に星文あるもの、當はふるをいふ。【二】動玉琴、玉琴は玉にてかざりし琴、或は曰く琴を玉にてかざると。動とはこちらがふれしために絃音が發するをいふ。【三】開燭影、開は現出するをいふ。燭は蓋し他室にありしもの。

【一】 歡掩 掩は上句の半扉を手にておさへてしめること。【二】 清砧 砧はきぬた。清はその搗衣のときの音のすめをいふ。この砧は屋外庭上のもの。

【題義】 日のくれかかつてくらくなつてゐるときのことをよんだ詩。仇氏、大曆二年、東屯にての作なるべしとす。

【詩意】 太陽がおちてしまつて四方のやまがかげり、山下の庭には嵐氣が侵してきた。牛や羊はけはしいこみちをかへつてくる、鳥や雀はこんもりとした枝にあつまる。自分はいくら部屋にゐて枕をなほさうとすると剣にさはり、書物をとりにかたづけようとすると思つて琴にふれてじやんと音をさせた。そのとき他の部屋の扉が半分あいて、燭のかががさつとさしたが、その扉がしめられようとするときちらりと砧がおいてあるのがうかがはれた。

晩

晩

杖藜尋巷晚、炙背近墙暄。
人見幽居僻、吾知拙養尊。
朝廷問府主、耕稼學山邨。

藜を杖きて巷を尋ねれば晩る、背を炙りて牆に近づけば
人に見る幽居の僻なるを、吾は知る拙養の尊きを。
朝廷には府主に問ひ、耕稼には山邨を學ぶ。
暄かなり。

歸翼飛棲定、寒燈亦閉門。

歸翼飛棲定まる、寒燈亦た門を閉ず。

【字解】 【一】 拙養 一に養訓に作る、時義なり、自己の拙性を養ふ。【二】 朝廷問府主 朝廷は朝廷の政治のこと、府主は太守。こゝは柏都督をいふならん。一説に問字の主語を朝廷とし、朝廷が地方の事を府主に問ふことと解く。亦た通ず。【三】 耕稼 たがやしたりうみつけしたりする事。【四】 山邨 山村の人のする所。

【題義】 晩のことをのぶ。仇氏は大曆二年、東屯にての作なるべしとす。

【詩意】 あかざの杖をついてこうちをたづねてゐると日ぐれになつた。かきねにちかづいて背なかあぶりをしてゐるとあたたかい。他人はこのこのわびすまひがかたよりすぎてゐると見てゐるだらうが、自分はこんなにしてもちまへの拙性を養うてゐるのが尊いとおもつてゐる。朝廷の政治むきことは府の主人にたづねるだけのこと、農事については山村の人人のすることをまねするばかりである。ねぐらにかへる鳥もすつかりおちついた、じぶんも燈をつけて門をしめる。

夜

夜

絶岸風威動、寒房燭影微。
嶺猿霜外宿、江鳥夜深飛。
獨坐親雄劍、哀歌動短衣。

絶岸風威動き、寒房燭影微なり。
嶺猿霜外に宿す、江鳥夜深に飛ぶ。
獨坐雄劍に親しむ、哀歌短衣に動く。

晩 夜

煙塵繞閭闔。白首壯心違。

煙塵閭闔を繞る、白首壯心違ふ。

【字解】 〔一〕 魏雄劍。楚の王領邪に命じて雄雄の各劍を鑄しむ。劍に親しむは寵を平らげ世を救はんとおもふなり。〔二〕 動短衣。動は歌聲の動くをいふ。短衣は齊の將威が故事。齊威王に飯せしめ牛角をうちて商鞅を爲す、曰く、南山樂、白日爛、短布單衣。遂至

〔三〕 長夜漫漫何時且。と。〔四〕 煙塵。黃鶴曰く、大曆二年九月、吐蕃、靈州邠州に寇し、郭子儀涇陽に屯し、京師戒嚴す、と。〔五〕 閭闔。天の宮門、みやこの宮門をいふ。〔六〕 壯心違。違とはなすとぐるを得ざりしをいふ。

【題義】 夜の感をのぶ。

【詩意】 きつたての江岸に風力がつよくでき、寒いへやにはともし火のかけががすかにある。みねの猿は霜のうちに宿し、江の鳥は夜ふかに飛ぶ。このとき自分はひとり坐して雄劍と親しみ、短衣をつけたまま哀歌をうたひだす。いまやちりほこりがみやこの宮門をめぐつてゐる。壯年時の志はなにもしでかすことなくして自分はもう今は白髪あたまになつてしまつた。

九月一日、過孟十二倉曹十四主簿兄弟

九月一日、孟十二倉曹・十四主簿兄弟に過ぎる

藜杖侵寒露。蓬門起啓曙煙。藜杖寒露を侵す、蓬門曙煙に啓く。

力稀經樹歇。老困撥書眠。

力稀にして樹を経て歇み、老困書を撥して眠る。

秋覺追隨盡。來因孝友偏。

秋は覺ゆ追隨して盡くるを、來るは孝友に因りて偏なり。

清談見滋味。爾輩可忘年。

清談滋味を見る、爾が輩年を忘る可し。

【字解】 〔一〕 九月一日。此の日は例、寒露節なるべしといふ。〔二〕 孟十二倉曹・十四主簿兄弟。この二人は孟氏の兄弟なり。卷十九に「孟氏」詩ありたり。倉曹・主簿は官名、靈州府の役人なるべし。〔三〕 蓬門。よもぎの傍に生えてゐる門、自家の門をいふ。

〔四〕 藜杖・侵寒露。これ並に孟氏園内の事。「孟氏」詩に讀書秋樹根の句あり。〔五〕 追隨盡。追隨は孟氏兄弟と隨つてあそぶこと。盡は秋のつくること。〔六〕 來因孝友偏。因孝友。而偏來の意、ひとへに、こゝへ專に來るは兄弟が孝友なるがためなり。〔七〕 忘年。年齢の多少を忘れて交りをむすぶ。作者は兄弟よりもほどの年長者とみゆ。

【題義】 九月一日に孟氏兄弟の家に遊んだことをよんだ詩、大曆二年、寒露節の日の作。

【詩意】 よもぎふの門からあけぼのの煙のおこるころその門をひらいて、寒露を侵してあかざの杖を ついてでかける。力がよわいので樹の根のところではやすみ、老いてつかれるからよみさした書物をはらひのけてゐねむりしたりする。あなたがたとかくして遊ぶ間にいつしか秋がおしまひになつた、こんなひとすちにあなたがたのところへばかりおたづねするのはあなたがたが孝友の美德をもつてをられるからだ。あなたがたとの清談にはうまみがある。あなたがたはわたしと忘年の交りをしてもらひたい。

孟倉曹步趾領新酒醬二物滿器見遺老夫

孟倉曹步趾、新酒醬二物を領して滿器老夫に遺らる

楚岸通秋屐。胡牀面夕畦。楚岸秋屐を通ず、胡牀夕畦に面す。

藉糟分汁滓。甕醬落提攜。藉糟汁滓を分つ、甕醬提攜より落つ。

飯糲添香味。朋來有醉泥。飯糲香味を添へむ、朋來るに醉泥有らむ。

理治生那免俗。方法報山妻。理治生那を俗を免れむ、方法山妻に報せよ。

【字解】 〔一〕步趾、かちあるきする。〔二〕楚岸、楚地の江岸。〔三〕通秋屐、孟が岸べを通過し來訪せしをいふ。〔四〕胡牀、しやうぎ。〔五〕面夕畦、夕のはたけのうれにむかふ、自己をいふ。〔六〕藉糟、藉は濁酒をこすしきもの、糟は「もろみ」、しきしものよつてかすをこすことをいふ。〔七〕分汁滓、しるとかすとを分別する。單に分別すといひあれど、その分別した結果、新酒をもつてきたことを意味するなり。〔八〕甕醬、かめのしやうじゆ。〔九〕落提攜、ひつさげてきたかめからわきだしてあふれおちる。これも落ちたといふだけにはあらず、それをくれたことを意味す。〔一〇〕理生、治生なり、生活の方法をよくすること、こゝは食物製造を主としていふ。〔一一〕方法、酒醬の製法。〔一二〕山妻、山すみのつま、自己の妻を謙遜して稱す。

【題義】 孟倉曹があるいて、新酒と醬油とをもつて器物にいつぱいつめてわたしにおくつてくれられた。大曆二年秋の作。

【詩意】 自分が胡牀によつてゆふがたの畦に向いてみると、孟倉曹が江岸をあしだばきでとほつてや

つてきた。彼はもろみをこして汁と滓をわけ、ひつさげてゐる甕から醬油の泡をこぼれるほどわきた

たせてゐた。(それをもつてきてくれたのだ)。自分の粗末なごはんもこれで香味がそはるであらうし、

ともだちがきたら泥酔する様なものもあるだらう。生活改善は俗つばいものだが、どうしてこんなもの

がつくれるのか、しかたを妻にいらせてはくださるまいか。

送孟十二倉曹赴東京選

孟十二倉曹が東京の選に赴くを送る

君行別老親。此去苦家貧。君行きて老親に別る、此を去りて家貧に苦しむ。

藻鏡留連客。江山憔悴人。藻鏡留連の客、江山憔悴の人。

秋風楚竹冷。夜雪鞏梅春。秋風楚竹冷かなり、夜雪鞏梅春ならむ。

朝夕高堂念。應宜綵服新。朝夕高堂念ふ、應に綵服の新なるに宜しかるべし。

【字解】 〔一〕東京選、東京は洛陽、選は官吏に選任すること。〔二〕此去、今後といふこと。場所ではなく時間についていふ。〔三〕藻鏡、藻鏡といふ、其の人の文藻を鏡にて照らしみる如くみわけをいふ、吏部の官の鑑定をいふ。〔四〕留連、長く滞留すること。〔五〕江山、蜀地をいふ。〔六〕憔悴人、孟をさす。〔七〕楚竹、蜀地の竹、節をいふ。〔八〕鞏梅、鞏は縣の名、洛陽の東にあり、孟が到着の節物をいふ。〔九〕高堂、孟の老親の居室。〔一〇〕綵服、老妻子が故事、巳にみゆ。

【題義】 孟倉曹が官に選任せられるために洛陽へ赴くのを送つた詩。大曆二年秋の作。

孟倉曹步趾領新酒醬二物滿器見遺老夫 送孟十二倉曹赴東京選

三四一